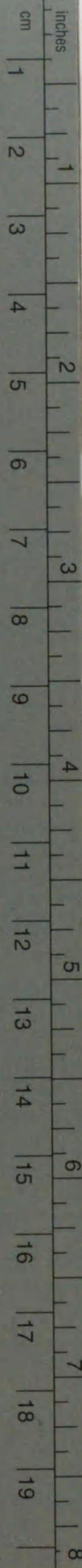


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

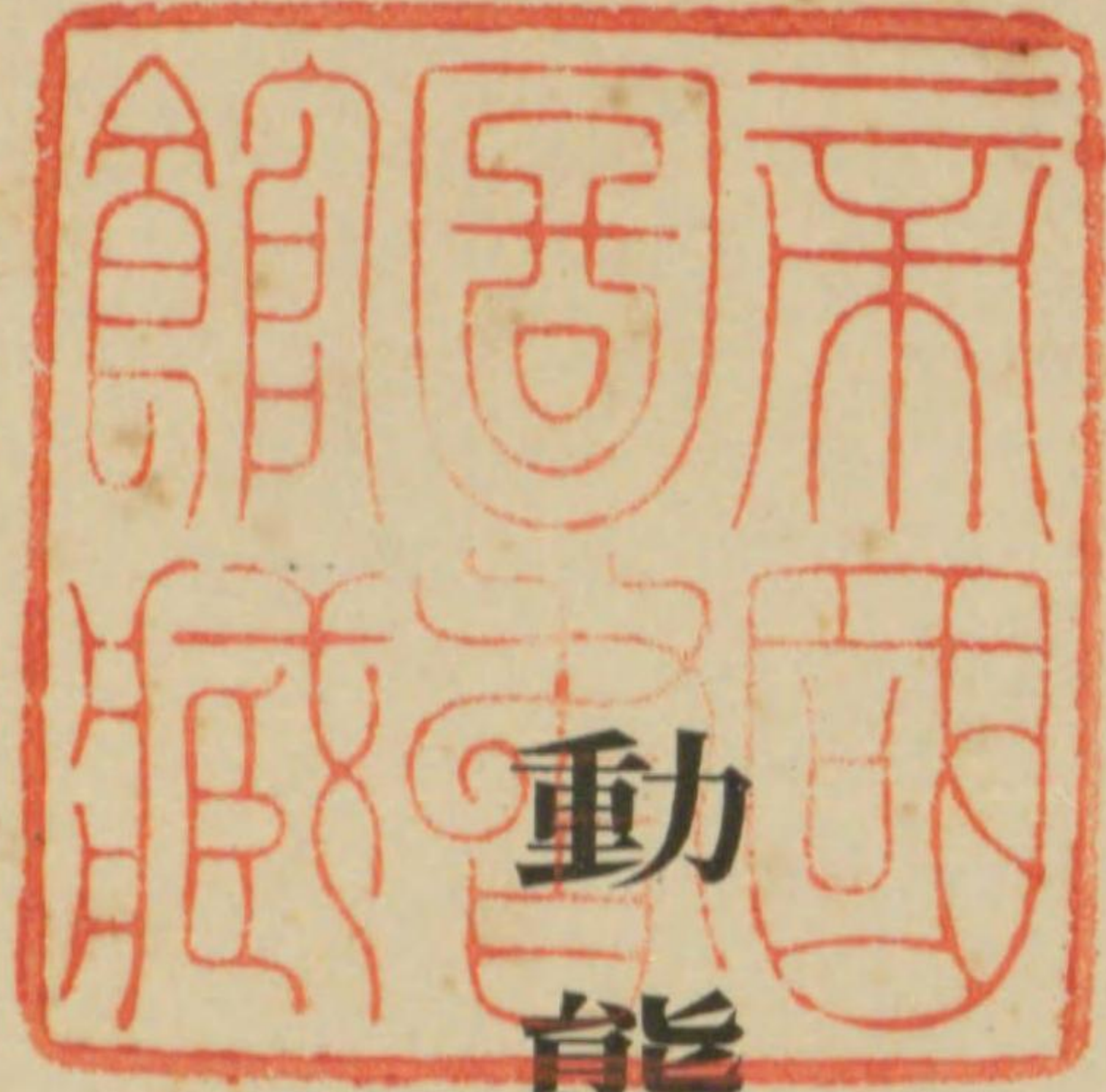
© Kodak, 2007 TM: Kodak



561
196

561-196
1200501512402

7.9.7



動態經濟の研究

高島佐一郎著

東京

株式會社

同文館藏版



117

序

「眞實の學問は全體を與へず。與ふるは斷層のみ。このゆゑに謬れる全體を描くかはり寧ろ眞實の斷片を寫さう。」——よし一面的なるにしても、グムプロウイツクツの此の言葉には、不易の眞理が含まれてゐる。とまれ斯かる見解のもとに私は再び、さきの著述「金融經濟の諸問題」の、より實證的なる姉妹卷として、此の論文集を輯するのである。

ここに收むる十二篇は、その未發表の一文第九篇のほかは、何れも一度び「國民經濟雜誌」「商業經濟論叢」「社會科學」等の専門雜誌上に發表したもので、いま此れらを單行本化するに際しては、簡別的に又た總體的に、能ふ限りの訂補を加へたるうへにて系統たて組織たてた積りでをる。そしてカツセル靜態經濟理論を討究せる一長篇(大正十四年四月より同十五年二月に亘り、その七號に跨りて「國民經濟雜誌論說欄」に續載されたもの)を除いては、それはまた同時に、私が最近三箇年にものせる勞作の集成でもある。

かく言へば、或る認識の靜態的動態的觀察を展開する普通の順序にかかはりて問はれる方もあらう。すなはち、斯くすでに靜態的方面についても若干の考察を施せるものあ

りと爲す以上、そのはうの單行本化こそ先きだたしめらるべきではないか。また經濟生活の動態的認識は、そもそも其の靜態的理論を前提して、初めて完たきを得られるものではないか。況んや明示または暗黙に、靜學的動態的研究を辨別論考しをれる西歐一流の著述家例へばカツセル、リイフマン、アモン、ビグウの誰れにしても、その追へる順序については皆な軌を一つにしてゐるではないかと。——然らむばあひ、消極的には先づ、經濟學全體系を展開すべき思想的成熟に到達してゐない旨を卒直に答へる外はないが、然し同時に積極的に言ひ開く理義を缺くものではなく、次いで斯う答へる。——認識對象または研究方法における差異より眺めて、靜態經濟と看做さるべき分野を耕せる好著述の尠からざるに反し、その動態經濟に關説せられたる述作にいたりては極めて寥々たる觀がある。然るにも拘らず、今日の經濟生活の需要してゐる認識要求の方向は寧ろ却りて、此の動態經濟の理論的展開のはうに横たはりをるもの如くに見うけられる。と云ふ事が、即ち此れである。

いま私は今日の經濟生活者の需めてゐる認識要求の主方向といふ言葉を用ひたことであるが、此れにかかはりて、輓近、動態的經濟理論の重要さを強く示唆し、此れを側面より實證し得るでもあらうところの一挿話を此所にさしはさみたい。それは本書校正の途上に逢遭せる事共の齎らした或る結果、即ち可なり大いなる刊行の遷延を、指すものであるが、此れが説明はたまたま、本書の存在理由を示し兼ねて其の理解に役立つことでもあらう。この校正に着手したのは、わづかに梅のいろづきそめた二月すゑの事であつたが、桃と櫻の淡紅、椿の赤、つつじの朱、藤の紫、薔薇の紅白と、つぎつぎに季節の進むを告げ、とりどりな色彩の地に散りしを送り、そして、目に青葉山杜鵑の新緑を迎ふるに到れる、初夏六月の今にして、漸やく、朱筆をおき得ようとするのである。いま早春の交を顧みれば、右の仕事と時を同じうして、さきに左右田喜一郎博士の高義熱誠にうごかされ、南亮三郎氏とともに、その編纂のわざに参加するに到つた、大西猪之介經濟學全集にかかはれる仕事は、着々と具現し來つたことであつた。ただし、よし此れによりて日常の多忙が加へられたにしても、それは私みづからの貴きメモメントウたるにとどまり、本書そのものに交渉するところはない。

ここに言はんとする、刊行遅延由來の説明にして、同時に客觀的意味を具有すとなすものは、三月半ば及び四月半ばに次ぎつぎに波紋を大ならしめて襲ひ來つた企業過超評價

と銀行騒亂の世相によりて得たる體驗のために、校正途上若干の訂補追記を施し、延いて秀英舎印刷所係員の豫定行程に向うて技術的故障を與へ又た同文館社員を甚しく煩はした、所業を指すのである。であるから、此の故障は、見方によりては、大正九年春及び同十二年夏の事端このかた内攻し來れる諸般企業の過超資本化の整理、殊に二巨大會社の大過超資本化の急激なる整理の強行を端緒として發生したる、二大銀行自體の資産過評價の暴露と此れに伴へる廣汎無前の取付騒ぎ銀行騒ぎとに直面して得たる實驗をもつて、たまたま本書數篇における論證を試煉することとなる、一結果一副産物とも看らるべきものであつたであらう。ただ、此れによりて圖らず、本書數篇に展開せられたる論證が、件んの動態的現象にかかはる實驗の坩堝に投げ入れられつつも尙ほ十分有效なるを實證されたことは著者の良心の安じ得たところである。

さて、志した仕事の時を一應こえ得た喜悅のために、可なり主觀的言詮に響くでもあらう言葉を語り過ぎた觀なくはない。そして其のため、當然觸れらるべきの一事を後廻はしに爲せることを虞れるのである。それは何か。かく本書の主たる認識目的が近代動態經濟生活の實證的理解にありとするも、この目的は何くまで統合的に企及されてゐる

か、の問題が此れである。そもそも論集なるものの構成に制約せられる限り、各篇の認識的鎖環が然かく緊密に又た有機的に關聯されてゐると主張し得られぬことは言ふを俟たぬ。が然し、動態經濟生活の本質は何であるか。その現はれである景氣變動が果して必然性を帯ぶる限り、此れが整調方策又は安定政策は何くにあるか。輓近理論經濟の高みは何くより來りて何れに行くか。およそ收益追求努力に任せつつも企業の確實性と大衆の福祉厚生とを保障すべき社會政策的施設及び之をも使命とする租稅政策の歸趨は何くにあるか。經濟生活の發達に伴ひ必然提唱せられる社會的進化思想の行手は何くにあるか。等々。——およそ、此れらの、アモン、リイフマン、カッセル、ピグウ等の經濟學體系によれば、當然に動態的認識圏内に屬するところの事共を採り、なるべく實證的に之を考察せむと努めたる點において、本書諸篇は、相當かたく連結されたる鎖環をなすものである。と私は考へる。かやうにして、かかる動態的時代かかる動態的生活を顧みると、き、本書は、わが讀書界實際界に呼びかける多少の發言權を所有してゐるものと私は信ずるのである。

はしがきとして書きたい事は以上で終はる。

ところが退いて考へると序としては話がいささか横道に外れる形をなすので、小引の意味にてなりとここに添記するの寧ろ合目的であると思料される一事の存在するのに思ひあたるのである。それは外ならず、謂ふところの靜態的又は動態的經濟生活とは、そもそも何を意味するかの問題である。上にては姑らく、靜態及び動態てふ用例を、確定又は既知のところと前提し來つたのであるが、この概念況んや研究範圍は、然かく明劃され理解されてゐるものではなく、更らにカツセル、ビグウ、アモン等の權威者について質だすも、彼れらの理解には互ひに多少の隔りのあるを見るからである。また、其の用例と意義は本書にありても勿論屢しば第一篇第九節第五篇第五節第六篇第二節第七節第八篇第六節第九篇第二節等、展示されてゐる事であるが、そは何れも定言としてではなかつたからである。然るに、例へば社會化なる語が、各國各時代により區々に使用せられてゐるに對して、西歐殊に獨逸の實際及び學問にありては明確なる概念内容をもつてゐるがやうに、この動態經濟てふ概念と範圍にいたりても、正しき學問的思考を營む前提として明確ならしめられるべきであり、少くも本書における此れが理解の何であるかは豫じめ明定

しおく義務があるやうに思はれる。

かへりみるに、今や明確なる概念と内容をもつて遍なく我が經濟學界に通行する、流通經濟論の成語と意想の創唱は、殆んど全く福田徳三博士に負ふものであつた。と同時に、これを暫く經濟動學の意味に解する限り、此の動態經濟論の着想も亦た、往年「經濟學講義」における同博士の提唱にかかれるもの如くである。然しマーシャルが、斯學の理論的眞核の經濟動學に在らずして經濟靜學に在るとともに、その現實的研究の基調にいたりては靜態的にあらずして寧ろ動態的たるべきであると爲したときの、その動態的思索の根基とは、實は需給均衡又は經濟的平衡の攪拌されることあるべきところの、流通經濟生活凝視の論態精神をもつて臨むべきの理義に外ならなかつた。と同時に、福田博士の經濟動學の概念は事實上、かの歴史派又は制度派また或ひは純理派の方法に對立するものとしての、新正統派の流通經濟理論の重視を意味されたものやうに思はれる。いふまでもなく、この概念この論態は、顧みれば經濟的均衡への自然的傾向を重要視して其の偏倚態その者即ち動態的運動態その者を深化せざらむとした、正統派よりの成長發展として、新正統派の遂行し得たる極めて重要なる寄與なのである。

然しながら此所にて言ふ動態經濟とは、それほどに廣汎な概念を言ふのでなく、内容的には此の現代流通經濟生活中の或る斷層と段階とに必然的に現はれる動的、生活的、現象を主對象とし、方法的には能ふ限り實證的研究と理論的研究とを併用して考察せらるべきところの局面を指すのである。しばらく思想史的に別言すれば、この方向への先驅が、一九一二年後におけるクラアク及びシュウムペータアの想跡に尋ねらるべきところの局面を指稱するのである。もちろん、此れが對象も理論も早くより存在してゐたのではあるが、それが明らかな概念として提唱せられ來つたのは、精々シェフレ又はボエム、バヴェルク以前には遡られざるべきほどに、然かく新しきものである。然るに此れら先驅者の直觀の與へたる内容は、その後の十數年間に發現せる世界無前の動的經濟生活の體験によりて豊富ならしめられ、此れが認識もまた有力なる研究者を得て著しく豐潤明晰ならしめられた。しかも其れは、特殊的研究としてシュウムペータア、シュピートホッフ、カツセル、レーデラア、ミツチエル、ケインズ、レエヴェ、レプケ、モムベルト等の優れたる業績を得たのみでなく、一般的研究としてはカツセル、アモン、リイフマン、ビグウ、ブツヂエ等の論考するところとなり、其の成果は、すでに其れぞれの經濟學體系に織りこまれてをる。

殊に往年バヴェルクの望めるごとく、一大編としての其の編入にいたりても、すでにカツセル及びビグウの經濟學原理において、精到博大に實現されてをるところである。

およそ上來のごとくにして、經濟學體系における動態經濟論の占めべき地位は、彷彿し得たことと思ふ。すなはち、流通經濟論の一面で、そして近代殊に強調せらるべき重要さを體得しつゝある或るものであることは、瞥見し得たことと思ふ。しかし尙ほ此の際、動態の概念を一層明かにしておく事が望ましいと思はれる。然らば、謂ふところの靜態動態とは、如何なる概念であるか。そもそも靜態動態とは、もともと自然科学の觀念より轉來した用語なのであるが、一度び經濟學に移入された後の此の成語は、彼れとは全く異なる概念として發展し來つた。まづ自然科学的對象においては、物質物體の靜止狀態は、思考し得られるところであり、然る場合の知識を靜學といひ、而して運動狀態にある物質物體の力學的因果關係の知識を動學と呼ぶ。すなはち、それが等質等量等速で行はれると、又た異質異形態加減速度にて營まれるとを問はず、運動的對象にかかはる認識は、およそ動態學なのである。

然るに經濟生活にいたりては、本質上、常に絶えざる運動行程を營むもので、國民經濟生

活には全たき静止状態なるものは存在し得ず、従うて思考し認識し得ないのである。にも拘らず、そこに靜態動態の辨別ありとすれば、それは自然科学的概念以外の概念たるべきは言ふまでもないであらう。然り、ここに謂ふところの靜態とは各經濟的要素が質量種類形態とも常に一定不易の力にて同一方向に運動する姿を指し、之に反して動態とは諸要素の内的生命により常に變化する大いさと力とにて運動する様相状態關係を呼ぶのである。一つ設例をもつて説く。自然科学的意味においては、星の世界は最も典型的なる動態であり、従うて之を對象とする天文學は最も模範的なる動學であると言へよう。然し、天體は箇別的にも全體系的にも、永遠に等質等量等力等速にて運動する體系なるが故に、經濟生活の一局面上において若しかかる均勢的運動現象が存在したならば、その生活に縦ひ進歩あり發達ありとするも、それは動態の相に在るのでなく、却りて靜態の姿にあるものである。例ふれば總體的には中世歐洲諸國民または近世までの支那國民の經濟生活や、また箇別的には殆んど増減なく又た増減ありとするも、毎年ほぼ一定比率を示す近代佛蘭西人口状態のごときは、此れであらう。之に反して、近代諸文化國民の經濟生活乃至は輓近米國における資本形成度や日米獨人口状態のごときは、右への對立を示すもの

なるが故に、その様相、少くもその諸相の一面は動態なのである。

ただし、近代經濟生活の特徴は價格生活に存するが故に、この價格生活の諸相で例示するを一層妥當なりとしよう。すなはち先づ完全なる自由競争行はれ、ために價格が狹義における生産費と一致して、費用主義（プライスコステンゲゼツツ）又はコステンプリンテイツプが全生活を支配する場合には、企業の利潤は存在し得ないのであるが、斯かる思维的抽象を學問化し法則化したる場合には、そこに例へばリカルドウのごとき典型的な靜態經濟理法が成立する。之に鋭く對立するものとして、價格成立行程において各當事者または各企業が何れも最大收益の取得を目標置して活動する流通經濟の現實的現象を全對象たらしめるとき、コステンゲゼツツは當然に止揚せられて、一の綜合としての現實的流通生活の本質が、明瞭に現はれてくる。そして此の點しばらくリイフマンの見解に従ふならば、諸産業部門の愈いよ特殊化され、箇々人又は企業の收益への努力の無統制に發揮せられるとき、技術的進歩と相ひ俟ちて、謂はゆる景氣變動の一原因は必然醸成され、又た過超資本化は自生し來るのであるから、斯かる動態的生活の極限においては、景氣不景氣の變動が必然發現すべき筈となるごときである。思ふに斯かる動態的現象は、

自然界には存在せざるとともに、國民經濟生活には屢しば生起するのみでなく、繼起するを恒常とするのである。さて、かかる思想を擴充すれば、經濟生活の諸相中謂はゆる景氣循環、經濟的發達此れを思惟的に把握し辯證せる社會發展學說、並びに斯かる動的生活に對應する政策一斑は大概ね、よく動態經濟の對象となり來たるものであらう。そして此れがまた、本書に編入せしめた主要諸篇の範圍——既述せる通り、有機的關聯てふ觀點より厳しく詮索しては、此れら諸篇の一篇と他篇との間に、其れは幾らか缺けるところはあるが、——でもあるのである。

私は、以上、經濟生活の諸與件の大きさの變化して已まず、經濟的諸要素の發達度の常に異なりて息まざる方面を、強調するに過ぎたことを自からも認める。けだし、斯かる態度はもと、本質的には經濟的均衡を指標して已まぬところの寧ろ惰性的な、經濟生活よりの、離脱變動の諸相を誇張するによりて、希くば動態經濟の概念を明劃せしめむとするの、目的觀より出でたもので、綜觀すれば事實は寧ろ其の逆に近いものがあるからである。すなはちアルフレツドアモンの言ふがごとく、動態的變化は決して國民經濟の本質的現象に

屬しないものであり、從うて經濟生活の理解にありて基本的なるものは固とより常に、靜態的觀察なるべきはずであるのである。(アモン著國民福祉學原理第一卷「福祉の形成配分行程」第三章第三十八節「往見」)

然り、右は自明のところであるが、決して看過してはならぬ一點である。まことに此の、より基本的觀察が靜態的たるべきの所以にいたりては、經濟學諸家の根本思想を成せるところの大凡その靜態的法則が、翻せば即ち動態的理法となると云ふの消息によりて、も十分、解明し得られるところと思ふ。例へば、リイフマンの景氣變動理論が其の限界餘剩均等法則の擴張の上にたてられ、カツセルの景氣循環運動論が其の稀少性法則より發展され、さらにピグウの産業變動論の中心思想が其の國民配當分可變性の思考より成せるものの如きである。かやうにして、吾人の力説せむとするは唯だ、一には軌近經濟生活には此れを動態化せしむる必然性の一層著しく作用するため、動態的現象の生起すること強く且つ頻りなる事、そして二には然るが故に動態經濟への認識要求を示唆して已まざるものあるに拘らず、我が學界には此の現實を反映する研究的精進未だ十分には示されず、よりて敍上の西歐學界の動向に顧みるも、尙ほ科學的沈潜を暫らく此の方向に轉

換するの意義ありといふことに、外ならぬのである。

上來われながら、西歐學界の所産をうんぬんに過ぎたのを虞れる。そしてまことは動態經濟に關する輝しき業績が、われわれの手近かに於いて産出されてをることを看失うてはならぬ。すなはち一は福田徳三博士が大正十五年中フランスの専門雜誌の卷頭を飾られた論文「經濟生活及び經濟政策の周期性」であり、二は上田貞次郎博士が大正十四年中東京銀行集會所にて講演された「株式會社の現代經濟生活に及ぼす影響」である。前者は、本邦開國以降の五十八年間に示現されたる動態經濟生活の昇降の諸相及び諸原因を實證的統計的に細敘詳論されたる長篇であり、後者は、その持論たる「株式會社の本質」の資本ないし財産の有價證券化にある旨を再論して、かかる證券の過超生産（これは過超資本化の一素因をなすものであらう）てふ事實ありて生産消費の連環よはめられ、延いて經濟的（周期的）變動の一大原因をなす理義を研究されたる一論證を含むところの小冊子である。私はあらためて兩博士の此の、何れも開拓者的なる業績に對して敬意を新たにしたいと思ふものである。

昭和二年六月一日

名古屋御器所

高島 佐一郎

Man glaubte, frei zu sein, Herr seiner Gedanken! Und da wird man ploetzlich wider Willen mit fortgerissen! Ein dunkler Wille will gegen unseren Willen! Und dann entdeckt man, dass das, was wirklich existiert, nicht die eigene Person ist, sondern jene unbekannte Kraft, deren Gesetze den ganzen menschlichen Ozean beherrschen.....

R. Rolland, Johann Christoph.

動態經濟の研究目次

第一篇 景氣循環理論の研究

一	國民經濟學體系において景氣循環理論の占むべき地位、即ち靜態理論に對立する動態理論並びに景氣理論と經濟パロメータとの關係……………三
二	景氣運動の正しき概念として周期的恐慌説より周期的景氣交代説への發展……………一
三	マルクス恐慌論中に既に景氣循環の辯證ありと見て其の寄與と其の謬想……………一九
四	景氣循環原因諸説の體系化並びに先づ貨幣側原因諸説の概念と其の謬想……………二五
五	福田博士の佛文近業經濟生活および經濟政策の周期性の與へたる二課題への多少の考察……………三一
六	ついで財貨側すなはち其の生産側原因説および消費側原因説……………三八
七	過剰生産の思考より各異産業部門が同一比例にて發達せざる必然性の認識……………四四
八	景氣循環原因研究の方法としての外生的思考より内生的理論へ……………五〇
九	同上方法としての靜態理論より動態理論へ……………六一
一〇	動態理論を採れるうへ其の究明資料として須要せられる經濟生活の事實的叙述……………六八

- 一一 景氣および其の周期律の本質としての生産財消費財の生産上の不比例性……………七五
- 一二 ついで景氣運動の制働機としての利率および勞銀……………八〇
- 一三 シュビートホッフ、リイフマン、カッセル所見の一致せる、景氣運動の根本的原因としての、私經濟的収益努力と國民經濟的に合目的なる資本形成度との不適合および將來の資本供給度に對する過超評定……………八八
- 一四 バヴェルクの翹望せる「經濟學中への景氣理論の體系的組織化」を實現したるものとしてのカッセルの動態理論の業績の評價……………九三

第二篇 景氣政策の一斑

- 一 マルクス主義視角の轉換による景氣政策の可能性と全社會化の下にても尙ほ景氣循環の必然性の持續する所以……………九九
- 二 景氣昇降が社會思想社會運動によりても影響せられる旨の論ぜられたる世相の一面……………一〇二
- 三 景氣政策の廣汎、並びに景氣政策としての當來事象の觀察および企業の聯合合同による過超資本化防止力の限界……………一〇四
- 四 景氣運動の制働機としての貨幣創減政策、金融的統制政策および外國爲替政策……………一〇九

- 五 をはりに景氣運動の成果結末に對する國家政策としての社會政策的租稅政策……………一一二

第三篇 唯物史觀の發展史一斑

- 一 經濟學徒の心眼に映れるマルクス主義の今昔……………一一九
- 二 經濟思潮史上の一對立思想としてのスミスかマルクスか……………一二二
- 三 唯物唯心の何づれにも偏せざる物心一如史觀の把持者としてのスミス……………一二四
- 四 佛蘭西革命、英佛産業革命、英國普選運動を反映する其の後の經濟學思想の變遷……………一三二
- 五 佛蘭西唯物論、革命思想、チャアチスト運動を綜合せるものとしてのマルクス主義……………一三九
- 六 今なほ有するマルクス主義の強よみの中心が其の經濟理論にも階級闘争說にもあらざる所以……………一四二
- 七 しかして其の中心が辯證法的に展開せられたる唯物史觀にのみ存する所以……………一四九
- 八 みぎの唯物史觀の重要考因としてのヘエゲル辯證法、並びにリカルドウの分配理論および階級利害對立論……………一五四
- 九 革命的志向に推進せられたるうへは單なる視角轉換によりて成れる、リカル

一〇 ドウ階級対立説よりマルクス階級闘争説へ……………一六二
 階級的利益代辯學たりし爲めリカルドゥ理論の陥れる同一陥穿が等しく階級的世界觀たるマルクス唯物史觀を待ちうる運命たるべき所以……………一六五

第四篇 マルクス唯物史觀の修訂と歸趨

一 前篇との連繫……………一七三
 二 カウツキイ等の固執するマルクス主義の核心としての唯物史觀……………一七五
 三 ベルンシュタインより該史觀の批判を先づ聽かんとする所以……………一七八
 四 事實に對する正だしき認識と理論に對する嚴びしき批判……………一八三
 五 マルクス主義の科學性と戦ひぬきての該史觀の修訂……………一八七
 六 何ん人とてもブルジョアの固定概念より解放せられざる事を例證するものとしてのリイフマン、アモン等の論態……………一九〇
 七 同意味にて、法則定立的なる理論とは別箇に理念的評價的なる認識を力説する我が經濟學者法律學者の論態……………一九三
 八 該史觀の修訂に關して社會主義の究極目的の存在を斥け厚生運動を其の一切となせる時ベルンシュタインのまた社會理想的文化價值的なる認識を別箇に展開したるものなる所以……………一九五

九 この運動の對象としても經濟形態が政治形態のより異なる事を省察すべき所以……………一九九
 一〇 彼れにありて社會主義の固定概念より放たれ此れにありて現存經濟秩序への評價的認識として社會政策學の討究せられるとき該史觀のまた理想的進歩史觀となる所以……………二〇四

第五篇 アルフレツド・マーシャルの風格と思想

一 その風格と思想との片影を豫じめ傳ふるための若干の引用文……………二一一
 二 「マUNK・デミチス」と言ひ得たるほどの完なき全集に對する鑑賞の態度方法……………二一四
 三 外國文化所産を批判するため私の特に採れる論態……………二一九
 四 學風の特徴としての無論争集大成體系なき體系理論の進化流轉の認識……………二二三
 五 青年期より晩年にいたるまでの人間のおよび學問的なるミリュウと其の精進……………二二九

第六篇 經濟理論と經濟理想とへのマーシャルの貢獻

一 前世紀四分の三ごろ經濟學の數學的解釋の頂きに立ちて尙ほ、デエヴァオンス、エツヂウアアスの同學派を斥けたる所以……………二四三

二 みぎの数理派經濟理論を克服してより大なる體系に包攝したる意圖……………二五二

三 劍橋派貨幣理論を完成し更らに之を超越してより大なる體系に攝取したる
 意圖……………二五五

四 つひに到達せる主論者、經濟學原理の特徴と其の啓蒙的意義……………二六二

五 みぎの主論者をもつて遂げたる理論的貢獻七束(上)……………二六五

六 同上(下)……………二七〇

七 より高所よりの理論的貢獻としての經濟動態學の展開と其の社會政策觀……………二七六

八 人間性より内展しゆく社會經濟理想への其の翹望……………二八〇

追記一……………二八六

追記二……………二八七

第七篇 國稅體系と地方稅體系とに於ける發展と歸趨

一 本論の考因と國稅地方稅二體系に關説せる文獻……………二九七

二 輓近稅制進化運動を特徴づける國稅直接稅および地方稅の強調……………三〇〇

三 地方稅體系の完成理論と運動、および國稅地方稅の課徵權域……………三〇六

四 二十世紀西歐諸國民の稅制進化において閱みせる五階段……………三一五

五 同上階段における第一期の概觀……………三一九

六 同上階段における第二期の概觀……………三二二

七 同上階段における第三期の概觀……………三二七

八 同上階段における第四期および第五期、即ち整理期および回復期の概觀……………三三六

九 謂はゆる稅制の國際的類似化において著しく示される社會政策的考慮……………三四七

一〇 國稅地方稅の二體系の相關的發展における四段階の綜觀と、其の歸趨……………三五一

第八篇 動態理論を強調せる「貨幣經濟の研究」の研究

一 増井氏著「貨幣經濟の研究」の紹述・批評における私の態度……………三六五

二 その行文・構想の一端に對する感想……………三六七

三 その消極的・積極的部分あひ合して統一的體系を成す所以……………三六九

四 貨幣本質論殊に貨幣價值論における名目主義行詰りの承認……………三七五

五 この貨幣價值論行詰り打開の爲めに用ひたる論理の批判……………三八一

六 貨幣流通論上、貨幣機能發展論の有する内面的意味……………三八四

七 同、産業社會化の齎らせる現代企業者職分論の有する内面的意味……………三八九

八 爲替相場決定論をもつて爲したる著者の貢獻……………三九三

九 賠償前途論および國際貨幣經濟理論をもつて爲したる同貢獻……………三九八

一〇 同著者の「概念より生活へ」の方法と一貫せる團體主義への信念……………四〇一

第九篇 リイフマンに於ける景氣理論と景氣政策

- 一 十五年間に發展せるリイフマンの景氣理論の核心と此れにて卷首二篇を補ふの正當理由……………四〇九
- 二 謂はゆる限界餘剩均等法則にて一貫されたる經濟學體系中には必然、同法則の經濟・社會政策の一應用たる景氣理論・政策の集成組織さるべきの所以……………四二二
- 三 この理論の紹述及び評價の方法、並びにビグウ新著、景氣變動論の與ふる暗示……………四一八
- 四 痛烈なる恐慌の代りに出現せる景氣變動の徵候……………四二〇
- 五 景氣變動の終局的二原因としての、營利活動特殊化の發達と、唯一最高流通原理たる個人的收益努力の無統制、並びに之を強調する技術的進歩……………四二二
- 六 景氣變動の必然性と必然害の認識より由來せる共同經濟態への渴望と其の不能性……………四二九
- 七 右の歸結たる、景氣政策としての社會的諸統制及び其の限界……………四三二
- 八 右の理論を援きて考察せる、本邦近時の經濟生活の沈降に即しての眞實にして有效なる景氣回復方策……………四三四
- 九 偏一方的なる此の景氣理論の包藏する三缺陷——仍りてカッセルへ、更にビグウへの轉向……………四四〇

附録一 金融論の一節——銀行業における分業主義と兼營主義

- 一 金融の概念……………四五〇
- 金融・信用および金融業の意義——双面的信用取引を主とする銀行業——双面的信用取引の本質・種類および相互關係……………四五〇
- 二 銀行における分業および種類……………四五八
- 銀行における兼營主義と分業主義——我が國銀行の二大種別——特殊銀行の種類および業務——普通銀行および其の發達の働因——銀行營業狀態の公表および検査制度における進化……………四五八
- 三 商業銀行の意義・資本金および業務……………四六八
- 商業銀行の意義——その資本金および積立金——謂はゆる減配か増資か又は合併か——その業務の種類および資金運用法……………四六八
- 四 わが商業銀行經營主義の將來……………四七七
- 兼營主義か分業主義か……………四七七
- 五 大預金銀行と大信託會社との併進……………四八〇
- 少數大預金銀行主義と少數大信託會社主義……………四八〇

追記一 四八三
 追記二 四八三

附録二 名古屋とボストン——文化批判より文化創造へ

一 ハーヴァード在住十周年にして偲ばれるボストンの風物 四八七
 二 古都市としてボストンと名古屋とが共通にもつ誇り 四八七
 三 今日のアメリカと文明と文化と 四八九
 四 標準化能率化萬能の米國に固有文化おこらざる所以 四九〇
 五 ただ弗の力によりて既成文化を輸入し鑑賞するの意味 四九一
 六 之が一例外たる鑑賞を通ほして創造に到らむとするのボストン 四九二
 七 昔わが東西文化の鑑賞者批判者たりし名古屋人 四九四
 八 しからばボストンの成長過程のごとくに創造に躍進すべきの必然性、固有文化創造に要せられるものは努力対象における方向轉換のみ 四九五

附録三 名古屋とりオン——企業分散より企業集中へ

一 反省的に祖國を顧みる遊子の心情 五〇一
 二 その市民性とその事業相 五〇一

三 共に独自の市格を誇り得る傳統 五〇二
 四 共に享有する山と水との美 五〇三
 五 諸産業部門における類似と相異 五〇五
 六 二都市銀行業における類似と相異 五〇六
 七 英獨佛銀行集中の實例——英國五大銀行、獨逸四大D行、佛蘭西四大C行 五〇七
 八 リオンにて生成したるクレデイリオネエの優れたる經營振り 五〇八
 九 みぎの成績を招來したる内面的および外面的集中 五〇〇
 一〇 みぎへの對立を示す名銀行の分立と經營振り 五〇一
 一一 銀行分立による、一般産業の及び銀行自體の不利益 五〇四
 一二 進歩が競争より生れず、却りて社會性經濟性が合同によりて遂げられる所以 五〇六
 一三 この合同を妨げる市人の有つ地方心と封建的傳統 五〇九
 一四 信託會社の新設は果して總地元銀行のクレデイリオネエ化すべき海燕と看らるべきか 一一〇
 一五 其れよりの解放の望ましき絶對主義の傳統と其の表現 五二二

参引用 著書論文名索引 五二七

第一篇 景氣循環理論の研究

- 一、國民經濟學體系において景氣循環理論の占むべき地位即ち靜態理論に對立する動態理論並びに景氣理論と經濟バロメータとの關係
- 二、景氣運動の正しき概念として周期的恐慌説より周期的景氣交代説への發展
- 三、マルクス恐慌論中に既に景氣循環の辯證ありと見て其の寄與と其の謬想
- 四、景氣循環原因諸説の體系化並びに先づ貨幣側原因諸説の概念と其の謬想
- 五、福田博士の佛文近業、經濟生活および經濟政策の周期性の與へたる二課題への多少の考察
- 六、ついで財貨側すなはち其の生産側原因説および消費側原因説
- 七、過剰生産の思考より各異産業部門が同一比例にて發達せざる必然性の認識へ
- 八、景氣循環原因研究の方法としての外生的思考より内生的理論へ
- 九、同上方法としての靜態理論より動態理論へ
- 一〇、動態理論を採れるるゝ其の究明資料として須要せられる經濟生活の事實的敘述
- 一一、景氣および其の周期律の本質としての生産消費財の生産上の不比例性
- 一二、ついで景氣運動の制働機としての利率および勞銀
- 一三、シュビートホッフ、リフマン、カッセル所見の一致せる景氣運動の根本的原因としての、私經濟的収益努力と國民經濟的に合目的なる資本形成度との不適合および將來の資本供給度に對する過超評定
- 一四、バヴェルクの翹望せる「經濟學中への景氣理論の體系的組織化を實現したるものとしてのカッセルの動態理論の業績の評價

この文による私の目的は、近時ますます強く國民經濟學の統一的體系において其の値ひするだけの十分なる地位を要求し來らんとする一大主題すなはち獨逸學界において周期的景氣變動、景氣循環、景氣不景氣交代、または經濟循環運動などの名をもつて呼ばれてゐるところの理論および政策の一斑を研究するにある。

ここに指すところの景氣循環理論は、かくて言ふまでもなく、國民經濟學における不可分のな構成なのであるが、その他の部分すなはち理論經濟學の考察が靜態的なるを固有の方法となすに對して、この部分の研究は其の主題の本質および其のおのづからなる經濟政策的見解への連繫をもつて、つねに動態的なるべきを特質とする。いまその主題の概念すらを解明するに先きだつて、本文の研究範圍を髣髴せしめんとするは、固とより多少の無理を含んでゐる事であるが、先覺の所説を藉りるによつて、しばらくまづ、此の點に關する私見を傳へおくを有效なりと思ふ。

いま私は理論および政策の一斑と言ふた事であるが、人々の需めるところは理論でな

くして、端的に政策に限られるなきを保しがたい。まことにアドルフ・ロエヴェの言へるとほり、十九世紀のはじめこのかた有らゆる近代文化國の經濟政策は、大いなる程度において常に景氣政策であつた[Die Wirtschaftspolitik aller modernen Kulturstaaten war seit Beginn des 19. Jahrhunderts immer in hohem Masse Konjunkturpolitik]のであつて、従うて理論的關心をより多く有せられる人々にても、此所にては特に政策的興味に傾かれるは必定であらう。けれども經濟政策の考察には先づ經濟原理の理解を前き立たしめねばならぬ、と同様に、正だしき景氣政策の究明には必然正だしき景氣理論の把握を前提せねばならぬ。仍りて、同政策の否な同現象にかかはる有らゆる事共の理解のために、先づ如何なる經濟秩序のもとに又た如何なる原因によりて周期的なる景氣循環が発生するのであるか、如何なる副的原因によりて其の運動行程が緩急せしめられるのであるか、の謂はゆる景氣理論が把握されねばならないのである。(本文はもと、主題の「理論および政策の研究」として起稿發表せられたものであるが、いま修訂にあたりては、對象の性質および理解の便宜を顧りみ、「理論」と「政策」とを別かつ事にした。仍りて、この理論の篇ををはつて後ち直ちに、次ぎなる政策篇を往見せられるを、望ましき順序なりと思惟するのである。)

そもそも經濟生活の現實において、前代世人の脅かされたる事象が周期的恐慌であつたるに對して、今日その虞かられるものが周期的景氣消長たるに到つたのは、既に吾人の常識となつてゐる。この現實世界の變遷を概念世界で象徴してゐるやうに見えるものこそ、實に輝しく復興し來れる[國家學辭典] Handwoerterbuch der Staatswissenschaften 中に示されてをる一項目の變更であらうと思ふ。すなはち、その第三版における恐慌てふ項目はとみに光彩を失なひ、目下、分冊の形ちで刊行されつつある同書第四版においては景氣循環てふ一項をもつて、殆んど全たく代替されてゐる觀があるからである。かやうにして、吾人の認識對象は、ここに現實と觀念との權威をもつて、ただ、景氣循環にて十分なるを論證せられたものと思ふ。

然るに、ここにまた、かく一度び劃せられた研究範圍をば更らに明瞭ならしめる一必要事が、別個に存在する。それは、ここに論ずる景氣運動論が、謂はば獨佛的思索系行によるところの國民經濟學的考察に屬するものであり、そして米國より輸入せられて近時本邦實際界の注目を引くにいたつたる、かの財界循環、景氣豫測または經濟パロメータと稱

せられるものとは、殆んど全たく、否な少くとも直接には、關係なき論考であると云ふことに外ならない。

しかり、きはめて完全なる調査機關を備へて組織的に研究せられつつあるところの、米國における景氣循環または經濟バロメータ *business cycles, trade fluctuations, business forecasting, business or economic barometer* の業績には驚嘆すべきものがある。かへりみれば既に一九一五年シユウムペエタアは「米國にては景氣循環問題に關する一の論説を収録しをらぬ經濟學術雜誌の唯だ一冊をすら繙讀することは困難である」(Schumpeter, Die Wellenbewegung des Wirtschaftslebens, A. reliv. f. Soz. u. Sozialpolitik, 1915, Seite 8.)と言ふた事であるが、今その生産力の旺盛および國際金融力上の優越をもつて昔日の對内經濟萬能より今日の對外關係重視に轉換し、之を反映して保護主義よりも寧ろ自由貿易の論陣のふるひ來つたる、同國においては、實に景氣交代問題は、凡そ經營學はた經濟學すらの中心的興味となり來つたるもののやうに見える。すなはち、ハーヴァアード大學經營學部の活動を中心として生まれてゐる、より正しく言へばビユウロウ・オヴ・エコノミツクリサアチの刊行にかゝる大小の雜誌(Harvard Weekly Letters, Harvard Review of Economic Statistics)や聯邦準備局その他

公私の諸施設諸機關の刊行する定期刊行物(Federal Reserve Bulletin, Brookline Economic Service, etc., etc.)の重要部分はこの種の問題について深甚なる注意を傾けてゐるのである。そればかりではなく、概ねハーヴァアードのに倣ふたる、獨逸の經濟調査諸機關や巴里大學統計學部や倫敦經濟政治學校等の調査刊行物にも、近く可なり見るべきものがある。(Konjunktur = oder Wirtschaftsbarometer; Indices du mouvement général des affaires, Univ. de Paris; Index Chart of the London and Cambridge Economic Service, esp. Bowley's Index of British Economic Conditions, Harvard Review, Vol. IV, Supplement 2.)

かかる如きにも拘らず、尙ほ、この種の謂はゆるバロメータ問題の研究は、本文の範囲よりして明確に除外せられねばならぬ。何故であるか。概言すれば、ここにて尋ねる景氣理論は經濟生活の認識と國民經濟の厚生のために國民經濟學的に取扱はれるに對して、謂はゆる景氣豫測は大凡そ簡體經濟の利益のために經營經濟學的の立場より研究されるものであるからである。すなはち、前者が其の研究方法として等しく、景氣變動の事實統計また之を略表する曲線的圖表等の資料のうちに沈潜し、長期にわたりて發生する景氣交代の一周期性ごときを論定するによりて、たまたま企業生活に助言する結果をも

たらさうとも、その本旨は何處までも、經濟生活に内在發現するところの、その隆替の否な
綜じては進化の波狀運動の有つ規則性合法則性を理論化するに在る。これに對して、後
者は其の視野を寧ろ短期現象にかぎり、今月今日の有らゆる市況變動の事實的調査より
して、明月明日に出現すべき情勢の變動を豫知せんとするものであるからである。かく
して共に、好景氣不景氣交代の類典型の數量的記述および類推をば研究資料として使驅
するのではあるが、その認識の指標および動機に到つては著しく異なるのである。

もう一つの異色を言へば、米國に濫觴せる景氣循環研究が事實上、理論經濟の外に立つ
て經濟生活の異常態を重視するに對して、主として經濟學思索系統に屬する景氣運動理
論に到りては、それが經濟學體系に内在し其の有機的部分を成すものと看做し以つて景氣
運動が經濟生活における正常態なる事を論證せんと努めるのである。すなはち、譬ふれ
ば獨逸前代における經濟學が國民經濟發展階段の認識を出發點となせるがやうに、この
景氣運動を内包する現代經濟學においては、この運動のなかに、進化てふ國民經濟生活の
一動力または契機を索ぐり、兼ねるべくば更らにマルクス主義の革命的崩壞説に對抗す
る進化理論を展開せんとするもので、シュビートホッフ、カツセル、ポレー、アモン、モムベルト

等の研究の態度は、蓋し之を證して餘りあるのである。

序でながら、謂はゆる經濟バロメータに到りては、嚴格に而して本質的に論じては、成
立しがたいものではなからうかと云ふことを附言したい。けれど「セテリスパリブス」て
ふ推論法式の容されるのは、性質上、ながき期間の通覽においてのみ可能なのであるから
である。さらには殆んど經驗事實として自明なる凡そ一年内に回歸する季節的景氣消
長とか、或ひは箇々の企業の經營実績を豫測し探知するによりて其の特定の有價證券市
價を推測するときものとかの、世上しばしば景氣豫測の客體と諒解しをれるものは、本
來の意味においてバロメータの對象で在り得ないと思ふ。で、この争點について、自分
の立場を代辯するものとして、左の評言を引用しおきたいと思ふのである。メエアヴァ
ルトすなはち曰ふ「……いかなる場合にも、當來する事實上の財界經營の進路や動向を
豫報し又は診定するのは、本質的および一般的には不可能である」……「dass jedenfalls eine
Propheteiung oder Prognose des kommenden tatsächlichen Verlaufes des Geschäftsganges grund-
sätzlich und ueberhaupt unmöglich sei. Meerwarth.

さきに私は、吾人の解する景氣理論の「經濟學體系に内在し其の有機的部分を成す」もの

である旨を述べた。いま之に關して、ポエム・バヴェルクの夙くに道ひやぶつたる卓越せる想跡を顧みておくのは、無用でないと思ふ。曰く、そもそも恐慌理論すなはち景氣交代理論なるものは、社會經濟現象の孤立的一部分の研究ではなくして、却つて常に、凡そ書かれたる又は書かれざる社會經濟學の體系における最後の又は最後より一つ手前の一大編であり、従うて一般的社會經濟學の有らゆる前論および其の相互作用の正だしき認識の成熟せる又た全體的なる果實である。]……, sondern sie (eine Krisen = oder Konjunktur-enwechselftheorie) ist immer das letzte oder vorletzte Kapitel eines geschriebenen oder ungeschriebenen sozialwirtschaftlichen Systems, die reife und ganze Frucht der Erkenntnis saentlicher sozialwirtschaftlichen Vorgaenge und ihres wechselwirkenden Zusammenhanges…… v. Boehm-Bawerk. (國家學辭典第三版「恐慌」の項) 然るに、斯かる理論經濟體系に含まれてゐる景氣論にいたりては、マルサス對シスモンディ將たセイの昔は措き、例へばマルクス以後の近代においては、實に獨逸經濟學の諸現代著作において最も體系的に、論ぜられてゐる。しかして其の頂きに、シュビートホッフのと併んでカツセルの主著「理論的社會經濟學」の立てるを見る。さらにより、近時にしては、レエデラア、ブツヂェアモン等の「國民經濟學綱要」または「厚生經

濟學綱要」等の、また右二者に近遜するものあるを見出すのである。そして斯く、景氣循環理論の國民經濟學體系中に、偉きく包攝せられたる狀態において、私どもが、近代經濟生活の特色を見いだし、且つ理論經濟學發展の一重要動向を察知すと爲すものであるのは、更めて言詮するまでもなからう。

二

かかる動向に従うて、私はまづ獨逸における景氣運動研究の近狀を鳥瞰して已むのであるから、この種の研究の進展の詳しき経緯に就いては、最近時のものまでを取扱へる思想史の二三權威をあげ、そして其れに譲られねばならぬ。すなはち先づ高舉せらるべきものは、チュウビンゲン大學のベルグマンの「國民經濟學的恐慌學說史」および自からメツド・ヘン・フェウア・アレズと言へる程に、然かく多方面な社會政策學徒なるヘルクナアの「恐慌」(v. Bergmann, Geschichte der nationalökonomischen Krisentheorien, 1895; Herkunft, Krisen, Handwoerterbuch d. Stw., 3. A., VI. Bd., 1910.) 等であるが、其れらは、その後ち諸家の研究の續出につれて、幾らか光彩を失へる觀なきを得ない。

ところで簡潔にして現に生動しをる學說史としては、私は一、シュビートホッフの「恐慌」、
「景氣交代に關する諸學說」、二、モムベルトの「經濟恐慌論選集への序說」、景氣研究の入門」、三、
ロエヴェの近業獨逸における景氣循環研究の現狀を擧げ得る事と思ふ。L. Spiethoff, Krisen;
Derselbe, Lehmeinungen ueber die wirtschaftlichen Wechsellagen, Hdw. d. Stw., 4. Aufl., VI. Bd.: 2. Mombert,
Einleitung zu Wirtschaftskrisen, Angewandte Lesestuecke, 7. Bd.; Derselbe, Einfuehrung in das Studium der Kon-
junktur, 2. Aufl., 1925; 3. Loewe, Der gegenwaertige Stand d. Konjunkturforschung in Deutschland, Lujo Brentan's
Festgabe, Die Wirtschaftswiss. nach dem Kriege, II. Bd., 1925.) 中についで一は徹底せる好研究である
が、マルクス主義者の所論の一顧せられざるを惜むべく、二は其の本文たる選集の資料範
圍に制約せられて最近時の論策に言及しをらざるを憾むべしとするが、次いで他の單
行書「景氣研究の入門」は、第二版に至りて大いに備はる。ひとり最後の三に到つては、その
百頁にみたざる紙幅の中に殆んど一切の資料を羅織しをるのみでなく、謂はゆる市民階
級的傳統にも囚はれず又た社會主義的先入見にも壓せられずして、獨自行論し評騭し
來れる點において、最も推擧に値ひするものであらねばならず、本文前半の記述は、同文に
負ふところ、極めて多いのである。このほか、ブウニアティアン著の獨譯「英國における商

業恐慌の理論及び歴史の研究」ゾムバルトの名論文「經濟恐慌理論の體系化への試み等」、
づれも廣く行はれてゐるものであるが、然し、其れらは、前掲シュビートホッフ及びロエヴェ
エのごとき純粹思想史と同視するを得ないものであると思はれる。

そもそも斯かる意想もて、諸家の見解の發展軌跡を窺ふには、その景氣循環の概念より
進みいり、ついで此れが原因に及ぶを順序なりとしよう。仍りて先づ、景氣循環または景
氣不景氣交代又或ひは景氣變動 Konjunkturzyklus, Konjunkturwechsel, Konjunkturkreislauf, Konjunktur-
torenmlauf, Konjunkturschwankung の概念の種々相と發展相とについて短言することであ
らう。ところが、この發展相において顯著なる事は、前世紀における恐慌の期間短かかり
しとともに激甚なりしに對して、近時の經濟的不況期の延長してきたれとともに緩徐た
るに到れるにつれ、世人また恐慌を云ふものの尠くして、景氣循環の總體的過程を對象と
なすに到つたことである。しかも、經濟生活の現實は連續するとともに、之を反映する思
想の發展また斷たれず連續する。仍りて、恐慌てふ概念の材料の果して幾ばくが景氣
運動てふ新概念の構成に與かつてゐるか、また、かかる思想の進展に架橋したのは何人で

あるか。——これが先づ尋ねられねばならぬ問題である。

一語に約づめれば、恐慌とは概ね好景氣の絶頂において崩壊するところの満期となれる諸債務の一般的支拂不能をもつて特色づけられる、經濟生活の攪亂をいふのである。さうして斯かる状態が或る周期性を有してゐると云ふ考へにいたつては、たとひ「人々の運命に満潮と干潮とあり、この潮勢を機敏に捉ふるもののみ能く幸福の彼岸に到達する」と語つたシェエクスピアの偶語ごときを措くとするも、尙ほ可なり過去の過去、少くとも其の現實在の發生した英國十九世紀の初五分の二ごろまでに溯り得られるのは明かである。が、その知識に對して、この偉大なる世界の眼と心となる爾ぢ太陽のおもてに略ぼ十年毎に現はれる黒點の現象を援用しきたり、自然科学的方法もて其の周期性を論證したるチエヴォオンスの示せる認識、並びに生産手段における必然的なる機能的構成および分配を規制する現存社會の機構關係より自發しきたるものとして其の周期性を論定したるマルクスの辯證において、此の思索の深化せられ刺戟せられたるは、なほ一層明白なるところである。

けれども多少明確なる其の特徴を、辯證的にてでなく却つて實證的に認識するにいた

つたのは、シュモラアの認めるところの如く、一九〇二年このかたシュビートホッフの引きつづき打ち出し來れる業績を首めとし、(Schmoller, Grundriss, II. Band, Seite 543.) その他ゾムバルト、オツペンハイマア、シュウムペッタア、ボーレ、ロエプケ、ライフマンおよびベルンシュタインの研究に負ふものと言ひえられるであらう。然らば、その特徴とは何か。一、この景氣現象をば流通生活における特殊な一斷層と見ず、却つて永劫に破られる事なき好況と不況との連環鎖又は騰貴と下落との交代と觀て、其の規則的必然的なる總體的過程の變化を研究の對象たらしめたること。二、從來の通説が大凡そ不景氣を異常態と看たるに反して、謂はゆる不景氣の時期は固と國民經濟の正常態であり、國民經濟上かならずしも不利益なるものと判定せらるべきでなく、(ライフマン)さらに進んで、不景氣こそは却つて近代經濟生活の謂はゆる自然的状態である、(シュビートホッフ)旨を強調したること。三、従うて景氣の循環はマルクスの説ける如くに決して經濟生活を崩壊せしめるものでなく、寧ろシュモラアの言ふ如く、一たび均勢を失へる一般的生産消費の不釣合が再び均衡を盛りかへし、徐々に然しながら確實に、新資本形成が強調せられて、その後ち暫らくは上はむき螺旋のごとくに進行するところの、全體としての國民經濟生活の發展の一

契機をば、この運動中に見いだせるに到れること等が、即ち之に外ならない。一度び斯かる特徴を認めえたならば、これが概念は、おのづから構成される譯けであるが、その瞥見に先きだつて一應、語義源を顧みておかう。おもふに、略ぼ産業革命に伴うて深刻になり來つた恐慌が、その革命成就の順序に従うて英國より米獨に傳はつたとともに十九世紀四分の三ごろには寧ろ米國において最も激烈に而して英獨佛の順序もて遞減的に緩和せられたる、其の現實在を、さながら反映するかのごとく、かの恐慌の語も、先づ英國語たりしより漸く獨逸語化した。之に對して、少くともその一部は、鐵と石炭と——生産料と消費料との最代表的なるもの——の生産量の増減に形影あひ伴ふごときの此の周期的景氣循環にいたつては、十九世紀四分の三以降の獨逸産業界において次いで英米經濟界において最も鮮かに看取せられたる、其の現實在を、あだかも反射するかのごとく、この「コンユンクツウア」の語もまた、逸早く獨逸經濟學界の成語たりしものが、今や英國語化したる觀があるのである。必ずしも興味なしとしない。

さて、其の當の獨逸學界において最もふるく此の景氣てふ語を正解した權威と看らるべきアドルフ・ワグナーは曰ふ、「分業と私有財産とに基礎づけられたる國民經濟において、原則として、又は獨り専ら、經濟主體の意思及び給付より、全たく又は少くとも大部分獨立して、財貨價值一般を決定するところの、技術的經濟的社會的・法律的條件の總體 (Gesamtheit) を意味する」と。(Wagner, Grundlegung d. pol. Oek. 3. Aufl. S. 387.) 次いで之を定言したるフィリップ・ウイツチの「は一層簡明で、即ち曰ふ「およそ生産上および販賣上に影響を及ぼし得るものにして而かも箇々の經濟指導者の意思欲より獨立なる社會關係の總體をいふ」と。(Philippovich, Grundriss der pol. Oek. 9. Aufl. Par. 122.) 後ち此の概念が愈いよ討究せられて深化するにつれ、其の表現は逆に遂に簡明になり來つたもので、左に掲げるシュパン、シュビート・ホッフ、カツセルの與へたる、其の各々の標語中には、景氣の有つ周期性と經濟生活より自發する其の内在性とが能く看取せられる事と思ふ。曰く「客觀的に發現する市場狀態の變化」(Spann, Fundament d. Volksw. 3. A. S. 69.) 曰く「昂騰と低落とによる經濟的交代狀態の循環」(シュビート・ホッフ)。曰く「上昇期と下降期との間なる經濟的交代」(カツセル)。かく既に、經濟生活の有つ内在力によりて一圓周を自働旋轉するものなる限り、これが交代には客觀的存在としての周期律が前提されねばならず、さうして果して、ロエヴェの謂はゆる「經濟的循環の騰落における規律的關係は、現實生活の外觀と内觀よりして、ほぼ常に七年な

いし九年の期間を挿みての循環期 (Zyklus v n je 7-9 jähriger Dauer) を形成することが立證されたのであつた。さうして又、シユウムペエタアの謂ふところの此の「經濟生活の波狀運動」 Wellenbewegungen des wirtschafts Lebens は、或る程度否大ななる程度まで、經濟秩序のいかに超えて必然的に發現するものであることが推論されたのであつた。

そしてゾムバルトの妙みじくも譬へたる、大酩酊のあとに宿醉あり而して暫らくは黄昏に似たる其の二日酔ひに彷徨したる後ち自働的に正常頭腦の回復されるがごとき、此の「經濟生活の韻律」そのものは、固と壓抑すること不可能でもあり、且つ無用ですらもあるのであるが、然し、循環性に對する適應能力を強大ならしめてふ意味における方策については、必無ではなく、たとへば最近、獨逸にありてはロエプケ、レエデラア、シユルツの、英國においてはホオトレイ、ケインズ、ビグウ、ロバアトソンの力説する、金融統制または信用統制は、實に斯かる景氣政策 Konjunktur politik 中にありて卓越せる地位を有するものであらう。およそ斯やうにして、近時、景氣運動の原因が益ます盛んに研究され來つたのである。

しかり、景氣運動安定政策 Politik der Konjunkturstabilisierung、みじかく言ひて景氣政策は、斯く單に經濟生活中に必然的に内在自發する景氣の騰落を緩和せしむるに止どまり、之を防止するを得ないものであるが、然し、われわれが動的生活を營む限り、其れが可成り重要な主題たるは論ない。で、私どもは之を、例へば物價指數を指針とし信用統制を中心として論考したるものとして、カツセルの「一九一四年以降の貨幣及び外國爲替問題」やホオトレイ、ケインズらの諸述作のところどころに、またロエプケの「信用と景氣」 (Roepke, Kredit und Konjunktur. Jahrb. f. Nationalökonomie u. Statistik. 124. Bd. III. Folge-69. Bd. Maerz-April 1926 Heft.) の殆んど全文にわたりて見いだすのである。私解するところの同政策においては、信用統制は寧ろ從屬的地位に居るものと思惟されるのであるが、其は何づれともあれ、此の景氣政策に到りては、別に次篇を立てて、多少の瞥見を興へる事であらう。

三

然らば、かの經驗の訓へたる、七年ないし九年、または七年ないし十年の周期性を有する、景氣循環の原因をば、諸家いかに觀たるか。この原因の諸理論を檢覈するに先きだつて、

縦し古典經濟學における恐慌説にまでは溯らずとも、ロツドベルトウス、マルクス、殊に後者の理論一斑だけは、之を瞥見しおかねばならぬ。すなはち綜じては、貧困と恐慌との原因は、現代の國民經濟組織においては、労働の生産率の増加するに際して、其の労働階級の受ける賃銀が、逆に其の國民生産物の常にますます少なき率となるといふ事實の外にはないといふの、ロツドベルトウスの消費過少説については、たとひこの思想が新しきもので、予は此れを予自からの着想であると主張するに値ひするものであつたにしても、輓近の現實とは餘りに距離があるから、敢えて關説せずとも、差支へない。が、ついでマルクスが有名なる平均利潤率低下の傾向の法則を論じたる章の末尾に示したる、かくて循環は更らに新たに回轉する。しばらく機能の停止によりて低下した資本の一部は、やがてその舊の價値を回復するであらう。が、その他の點では、擴張されたる市場と高められたる生産力とをもつて、前きのと全たく同じ缺陷を内在する循環が、再び廻轉し來るであらう。』(Marx, Das Kapital, Her. v. Engels, Band III, 1. S. 237.) と云ふ、その恐慌の周期性の認識が、果して如何なる觀察によつて到達されたものであるか、に到つては一應、顧みられねばならぬのである。けだし、其れは資本の有機的構成の内在する關係又は軋轢てふ事實に、その原因を

見ようとするもので、従うて縦ひ目的こそ全たく異なれ、現代最も有力なる景氣原因の諸研究の理論的構造に對して可なり強き示唆を與へてゐるからである。

しからば、その掲げたる原因の理論は如何やうなものであつたか。かへりみるにマルクス「資本論」の或る部分にありては一見、ロツドベルトウスの消費過少説に同ずるとき、語調が示されてはゐるが、綜じて言へば、右説に反對してゐるものなので、(Das. n. n. O. Band. II, S. 386.) として之に關する彼れの中心思想は、左掲のごとき資本構成の必然的發展なるものありて、其れが必然的に投下資本の絶對的過剰生産を醸成し來るといふのに存するのである。すなはちマルクス經濟學理論全體系より姑らく恐慌周期性の理論だけを遊離して約述するならば、まづ資本主義的經濟の發展は、今や、技術的及び經濟的進歩の結果として、單なる労働力に對立するところの、生産手段の意義重要さを絶えず増加せしめる。彼れの用語に従うて換言すれば、資本の有機的構成において、其の不變部分をして其の可變部分より常に遙かに迅速に増殖せしめる。註するまでもなく、此の可變資本 *Variables Kapital* とは生産行程において其れ自からの價値を再生産するのみならず餘剰價値を創生するものであつて、凡そ賃銀の支拂に供用される資本をいひ、そして不變資本 *Konstantes Kapital*

Kapital とは生産行程において、即ち工場機械原料補助材料等の生産手段のために投下されたものであつて、同行程中、自からの價値を再生産するに止どまり其の大きさを變じない資本を指す。さて斯かる經濟發達は、勞働力における數量的増加とともに、利潤に歸屬する餘剩價値の絶對的分量を絶えず増加せしめるけれども、不變資本投下額激増の結果として生産上に働らく總資本に對する其の割合にいたりては、逆に斷えず低落する傾向を呈せしめる。利潤率にして斯く低落すれば、新資本は勢ひ充分には増殖せられず、即ち資本の絶對的過超生産が現はれた譯で、その結果、資本の一部分は、生産手段としての機能を停止し又は破壊されねばならぬ。言ひかへれば、絶えざる生産擴張に對する資本の努力と、相當な利潤を獲て之を充用する程度に其の資本を増殖するの不可能との間に、一の矛盾が生ずるに到る。(不景氣) 然るに、之と同時に、再び正反對の方向に傾向する諸要素が現はれてくる。すなはち、生産の停滯が勞働力の一重要部分を破壊して、賃銀を減少せしめるとともに、相對的又は絶對的餘剩價値を増大せしめる。この恐慌による價格低落および激烈なる競争戦は、勢ひ、新機械新作業方法新勞働組織の採擇應用を促して生産力および利潤率を高め、ここに再び新たな生産擴張を準備せしめずしては已まな

し。(好景氣) およそ斯やうにして「循環は再びさらに廻轉する」のである。(v. n. C. I. Bd. Kap. 6-7; III. I. Bd. Kap. 8-10; II. Bd. Kap. 8.) 叙上、不變資本と可變資本との増殖率における周期的不同調の發現の外に、マルクスは更らに、不變資本または主として生産手段における絶えざる變革をも、恐慌の周期性の原因として數へる。曰ふ「かくの如き相互關聯せる資本廻轉の何箇年かを包括するところの循環、すなはち資本がその固定部分のために通過を強ひられるところの循環によつて、事業の通過すべきさまさまな階段、すなはち沈滯適度の活動、跳躍、馬鹿景氣、ついで恐慌といふ相互續づき發生する各時期を含むところの周期的恐慌の物的基礎が、おのづから生じきたるのである」と。かやうにして彼れは、可變資本に對立する不變資本の斷えざる發達と、技術的變革による不變資本の壽命の短縮とが、近代産業生活にありて益ます顯著なるべきとともに、その結果たる恐慌は益ます激しく、また其の舞臺は愈いよ世界的たるべきことを豫斷したのであつた。

然しながら、力調せられたる、かの慘烈無前の一般的世界恐慌は、曾つて襲來せぬのみでなく、急性的恐慌は今やエンゲルスの註解したやうに、「種々の國において各異の時期に配分されたる一の一層慢性的なる循環、すなはち比較的長期間にわたる不景氣と比較的短

期間にとどまる好景氣との交代に替へられ」てゐるのである。(Bernstein, Die Voraussetzungen, II. Aufl. S. 113. 金原氏譯「マルクシズム批判」二八一頁)をして之を招來したる原因としては、勞働階級の厚生的地位の上進、金融組織の整備、信用統制の有効化、不斷の併し小刻みの技術的改良發明、又はカルテル、トラストによる生産販路的統制等が擧げられることであらう。かやうにして、マルクス見解は、勞働價值觀の外にも尙ほ、重大な誤謬を冒した。けれども、わが經濟生活における周期的循環運動の一重要モメントをば斯く異種資本の有機的構成及び其の發達の必然的不調和のうちに見出したる、否な更らに、或る種の「生産過剰を調整するには或る大なる恐慌の襲來を待つの外ない」ことを認めて、此の恐慌をば經濟生活體に内在する適應力であると看做したる、彼れの見解に到つては、その寄與したるところ、まことに没すべからざるものがあつた。何となれば、不變および可變資本てふ概念をば例へば生産料資本および消費料資本の其れにて置きかへ、又は恐慌てふ概念をば不景氣の其れにて取り替へるならば、それは尙ほ、今日の經濟生活の動態を、よく觀照せしめるものであらうからである。けれども、結論は、マルクスのより全たく異なるものが抽きだされねばならぬ。けだし、既に斯くするならば、其の恐慌説の歸結たる崩壞説は、おのづから消えて、吾人の目撃する景氣交代の、寧ろ螺旋狀的進化および適應の里標たる所以が、理解されるであらうからである。これ、今私が、輓近諸家の見解を示すに先きだつて、まづマルクスを顧みた所以でもある。

四

夙に一九〇四年に「經濟恐慌説の體系化の試み」のなかで、その筆者ゾムバルトは、景氣循環における如何なる局面が經濟生活の常態 *Normalzustand* であるかと、自問自答して「近代經濟において常態的とは、一定の局面を指して言ひ得べきではなく、比較的短期間の好景氣と比較的長期間にわたる不景氣との周期的交代をこそ指稱すべきである」と説き去れるのである。しかり、經濟生活は、恰も星の世界のごとき一の運動體であり動的組織であつて、その韻律的運動變化の過程において、縦し若干の富の破壊を伴ふことありとも、綜じては資本の新形成殊に其の増殖で象徴される「經濟的進化」の行はれることは、鋭き經濟學批評家アルフレッド・アモンの力調することくなのである。(Amonn, Grundzüge der Volkswirtschaftslehre, 1926, I. Band, Par. 41.) この意味において、主としては生産過剰説従としては消費

過少説の二元的構成を有する、マルクス恐慌周期性原因論は、理論に寄與するところの大きいに拘らず、この周期的運動の現象を「崩壊説」に歸結せしめたる點において、誤謬に陥れるものであらねばならぬ。かくて吾人は今や、此の説に對して或ひは對抗し或ひは其の精神に抗争し、或ひは修正し、また或ひは全く独自の又は無關心の地位に立てる、さうして二十世紀初葉このかた發展し來れるところの、景氣周期性の原因諸理論に進みいることである。

さて今、之を體系化するには、しばらくロエヴェの爲に倣うて、諸家思想の類型を分別するを便宜であると思惟する。(Loewe, Adolf, Der gegenwertige Stand der Konjunkturforschung in Deutschland, Festgabe fuer Lujo Brentano, II. Band, Leipzig 1925.) 卽ちまづ譬へば横には、貨幣側 Geldseite を力説するものと財貨側 Warenseite を強調するものとに別かち、また右の財貨側原因を更らに消費側 Konsumseite を重視するものと生産側 Produktionsseite に二重圈點をうつものとの分別する。ついで右の殊に財貨側の種別を縦斷して、有機的産業と無機的産業との發達の不釣合ひに歸するものを一範疇とし、又は好景氣が凡そ其れに先行する沈滯の

條件中より自發すると爲す有機的原因 organische Ursache と流行程外に新たに發生する或る作用によつて惹き起されると看る無機的原因 anorganische Ursache とに別かち、又は經濟生活其れ自體は常に同一なる力で運動し發達するものとし此の平衡狀態を破るものが例へば通貨の創造消滅の不規則性にあるとする靜態的理論 statische Theorie と其れ自體變化して息まぬ力もて運動するが故に其の各異産業生活の固有する内在力によりておのづから景氣騰落が發現すると看る動態的理論 dynamische Theorie とに辨別し、さらには又た經濟生活體の内在的原因 endogene Ursache と其の外生的原因 exogene Ursache とに原因系統を別かち考へるのである。

そこで先づ問はるべきは、そもそも景氣運動は、本源的に言ひて、貨幣側または財貨側の果して何づれの變化に基づくのであるかに存する。が、古典的なる貨幣數量説に關聯して主張せられた、貨幣側に基因するとの思想は、最近まで同説を支持したる米國學界の一角を除くならば、およそ十九世紀の半ば以降ほとんど生命を喪ふたものの如くである。殊に通貨の創減行程を理論化せんとした歴史的論争としてのカレンシー説斥けられて

パンキング説の認められたる獨逸學界にありては、數量説を信奉するものの少きと同様に景氣周期性に關しても亦この貨幣側の原因を祖述するものは少ないのであつた。然るに少くとも例外と一見される見解が獨逸の碩學によりて提唱せられた。黄金の流れが水車に注がれば、生産行程刺戟せられて産業豫備軍は勢ひ充分の所を得るのであるから、好景氣回歸の指標として斯かる世界産金額の増殖を擧げ得るとした、ゾムバルトの無機的理論が、即ち其れなのである。けれどもゾ氏においては、其れは唯一な景氣觀ではなく、寧ろ從屬的な見解なのである。即ち本質的には、まづ無機的原料生産にあたる諸産業の發達が、性質上、有機的原料補助材料産出に従ふ産業を凌駕する傾向あるを認め、従うて此れら二種の産業上には周期的に不權衡が發生する。此れが結果主として有機的原料例へば食糧の價格に隨ふところの生産費一般おのづから増殖するが故に、其の景氣の波頭において、此の不調和が壞裂するのだと云ふ見解の方を、より強調したのである。ついで「貨幣および流通手段の理論」の著者フォン・ミーゼスは、可なりに一方的に貨幣側原因より促される景氣騰落の可能なる旨を説くものである。すなはち、一時代一階段を生きる一國民經濟の事實上の富度または貯蓄度に相應する利率を表はすところの謂は

ゆる自然的利率の以下に、一般金利歩合低下され、従うて銀行的支拂手段が増加されるならば、必然そこに一般景氣の無機の上進運動が發生し、殊に生産手段の擴張新設が助長される、而して其の反對の行程が採られるならば、景氣運動はおのづから沈降し來ると説くのである。(v. Mises, Theorie des Geldes und der Umlaufmittel, 2. Auflage, 1922, S. 369.) けれども、かく説くとも、ミーゼスは、あらゆる眞の景氣循環が利率運動によりて惹起されると主張するものでなく、また經濟上ほんたうの底力を伴はざる信用擴張が長く好景氣を支持する力を有しうると極言するものでない。ことに戦後における景氣循環については、其れが貨幣側の原因以上の一層深奥なる底流れによつて決定されてゐるのを、特記するを忘れないものである。

ミーゼスの考へを述べたからには、大體これを祖述せるものとしての、新進ブツヂエの所説にも觸れおくのを妥當とする。彼れは、其の近著「理論的國民經濟學綱要の最終章をば」動態の問題、すなはち景氣運動の問題」と命名して、およそミーゼスの見解に同じてゐるものの如くに見える。(Budge, Siegfried, Grundzüge der theoretischen Nationalökonomie, 1924, 8. Abs.) すなはち、同問題の核心をば、生産要素に對する價格決定の誤謬にありとしてゐるけれども、

その誤謬のさらに由來する根本を尋ねて、之を銀行貸出政策の失當に歸する。銀行過度の營利または貸出衝動より來たる金利引下げが好景氣を招來するとともに、銀行失當の保守主義より來たるその機宜を失へる此の好景氣時期に際しての金利引上げが、恐慌を、ついで長き不景氣を惹きおこすと論ずるのである。それが、ミイゼスよりもより、一方面的な考察であるのは明かであると思ふ。

しかるに、ハーンにいたると、信用擴張の作用をば景氣運動の眞の出發點として認めるのを見いだす。すなはち、その「銀行信用の國民經濟的理論」の第三章末の一節「信用と景氣運動」のなかにて曰ふ、(Hahn, Volkswirtschaftliche Theorie des Bankkredits, 2. Aufl., Seite 157-8.) だから事實上、結局近代國民經濟の景氣運動は、最後の分析において、銀行および其の他の信用授與者の行ふ信用行爲のうちに尋源される。……好景氣の來復は、最終の檢討において、信用擴張に、更らに翻つて一層本源的に尋ねては金利政策に覓めえられる。」さうして「景氣運動の動力は、斯く、信用授與の伸縮のうちに存するが故に、少くとも理論的には、永遠の好景氣 *die ewige Hochkonjunktur* の可能性は、必ずしも空想の王國に屬しない」と結論する。ハーンの貨幣信用原因説は、斯くして、ミイゼスのよりも遙かに徹底せるものであるが、其の偏

一面的なるだけに、却つて救ふべからざる謬りに陥つてゐると思はれる。けだし、この説が貫かれるならば、金利政策の完美な運用を前提しては、少くとも理論的には、不景氣を一掃しうべきであり、更らには景氣運動の周期性をすら拒否しうべき筈であるからである。さうして、斯かる如きは、明かに現實の様相で在り得ないのである。

五

右のやうに謂はゆる貨幣側原因説を紹述し、景氣周期性の眞説明としては其の到底、皮相觀にすぎない旨を斷じて、ここに財貨側原因説に轉回しようとする吾人の前には、最近福田徳三博士の打出せられた勞作ありて、重要な若干課題を投ぜられたるやうに思はれる。その勞作とは博士滯佛蘭西所産の一片として、同國最高權威の學術雜誌を飾られたる「一八六八年ないし一九二五年にわたり對外關係中に遂行されたる近代日本の進化をもつて例證したる經濟生活および經濟政策の周期性を指すのである。」(Fukuda, Tokuzo,

La Cyclicité de la vie économique et de la politique économique éclairée par l'exemple de l'évolution japonaise de 1868 à 1925 dans ses rapports avec l'étranger. Journal des Economistes, Avril 1926.)

按ずるに同文には、今、われわれの關心する限りだけにも、一、その景氣周期性を論じて謂はゆる米國的思索類型に屬するものでなく却りて吾人當面の主題たらしめてゐる獨逸的思考典型に類するものであるか。二、そして、果して然かるものとして、其處にては少くも一見わが國經濟周期性の主要原因として、前述せる貨幣側がより、強く説かれてゐるやうであるが、然らば其はミイゼスやハーソンの所見と同様に處理し得らるべきものであるか。の二課題が含まれてゐると思はれる。綜じて言へば、同文は此所に取扱はれてをる周期性の範圍以上の經綸を主張してゐる論策なのであるが、今は姑らく、本文にかかはる右の假題のみを略解するによりて、同文に對する敬意を表したいと思ふのである。

論はまづ、流通生活にかかはる、ケネエの創唱の高揚にはじまる。ついで、流通現象に關するマルクス及びリイフマンの所見の何づれも偏一方的なるを免かれず、仍つて之を綜合すべくんば、須らく初近世佛蘭西エコノミストの思想にたちもどり、此れを近代化し精醇化したる經濟生活の循環性または周期性 *la périodicité* (同博士は之に *la cyclotité* の名を命ずる) の理論 *cyclisme* を論攻すべきであるとせられる。そして一轉して、祖國の經濟的發展のあとを顧りみ、我が經濟生活における病根の外國事物に對する無批判的樂觀と通貨膨

脹に對する盲目的禮讚とに横たはれる旨を斷説し、さらに長年にわたる其の商品輸出入、金地金輸出入、金利歩合の高低および通貨發行の消長を示せるところの統計の權威を藉り、以つて我が開國以後五十八年間に出現したる六度びの、殊に西歐的産業革命の導入せられた日清戦後に現はれたる數度びの周期的景氣が、凡そ金入超海外起債及び物價騰貴に象影あひ伴へる事實を明白にせられた。おもふに博士が之によりて狙はれたる意圖には、少くとも二つを數へ得られるであらう。すなはち一つには、日本の否な寧ろ其れ以上にいでて近代佛蘭西の國民において、顯著なる重商主義的思想および之が一表現たる通貨膨脹の偏愛思想を拒斥せんとする事。さうして二つには、我が經濟的周期が、かの最も進歩せる英獨米における其の最重要モメントと看做される、資本主義的經濟生活内に内在自發するところの生産資本の有機的構成における不調和に求めえられる底の經濟生活には、いまだ到達しをらぬ旨を暗示せんとする事。に存在したのではなからうか。また、その研究の精神にいたりては、四分の一世紀前獨逸にて發表せられた同博士著「日本經濟史論」(坂田由藏氏譯、日本經濟史論。自譯經濟學全集第三集中)における中心思想が、本邦國民經濟生活の関みせる進化發展の階段の、よく西歐諸國民の發展階段に類似せる所以

を闡明するにあつたる如く、この近代日本の經濟生活の周期性論の其れは、最近産業生活を特徴づける景氣運動の討究を通ほして、今日の發展階段を生活しつつある現代本邦をば、全體として描寫せんとするに在つたものごとくである。要言すれば、其れは斯くして、經濟生活の連續性發展性、從うて之を反映する經濟思想の連續性發展性を、論文それ自體をもつて論證したものと史料されるのである。かく觀すれば、同文が、その研究的類型及び精神より眺められて、謂はゆる獨逸的思考範疇に配せらるべきは明白であらう。さらには、外國文もて物された右の新舊二論策の發表が、共に、同博士の宗とせられる碩學ブレントノの業績に關聯しをること、之を獨逸的思考系統に配するに適はしい機縁をなすものと考へられる。因みに、ブレントノ自身また十九世紀四分の三ころ夙に、生産および販賣恐慌の周期チクルスの不可避性をみとめつつ、唯だ私的利益關心に據らしむる外か經濟發達の途なきの論據よりして、社會的統制に反對したる、景氣理論一篇を發表せる事あるを、附記しておく。(Brentano, Die Arbeiter und die Produktionskrisen. J. f. G. V. u. V. — 1878)

ついで私の假りに提出した課題の後者、すなはち外見の然るがやうに其れは果して貨弊側原因を強調せられたものであるかに對しては、その外觀とは反對に、景氣周期性の眞

原因として貨幣側を一般的に重視したものでなく、寧ろ財貨側を強調せられたものである、と答へられると思ふ。そもそも博士が、本邦に目撃された景氣運動の經緯を歸納的實證的に考察して、その好景氣がおよそ、商品出超金入超海外起債金利低落通貨信用膨脹、綜するに結局において貨幣側に作用ける事情に隨伴し來つたる事を論證したのは、これら二現象の併行併存せるを單なる事實ファクトとして記述したるに止まり、必ずしも二者間に一般的なる且つ前後脈絡的なる因果關係の存在を肯定したるものではない。否な却つて、斯かる外見的因果關係を妄信する思想の尙ほ存する事、また斯かる景氣促進のためと稱して通貨、外債、金利の諸方策を玩弄するとき愚かしき現象の發生を可能ならしめる底の低き、經濟思想、産業階段に彷徨しをれる祖國狀勢を、指摘し戒飾せられたるものであらう。

さらに推想を行ふならば、景氣交代の原因としては、かの近代經濟生活に内在して益ます顯著なるところの異種資本構成發達における必然的、不同調例へば眞資本と金融資本と、生産料資本と消費料資本と、固定資本と流動資本と、マルクスの語に従へば不變資本と可變資本と、又は生産手段への投資額と勞銀總額との間に存在する有機的構成における相對的發展の不調和と云ふ、嚴たる實相を重要視せられたものと爲し得られるではなか

らうかとすら思ふ。私が今斯く推論するのは、文獻的に無稽なる想像を試みたるものでなく、同博士從來の著作、殊には「社會政策と階級闘争」中に收められたる最終論文「資本増殖の理法と資本主義の崩壊」の示せる一内容に徴して、敢えて之を言ふのである。實に右論文において、博士は、かく消費は彌々減ずるも生産は彌々擴大して、しかも資本制生産には何らの支障生ずるなしとした、有名なツガン、バラノウスキイの推算推論を指して、ゾムバルトのごとくには「誤謬なり」と斥くべき理由を見出す能はずと言ひ、従うてマルクスの謂はゆる擴張再生産は限りなく増大し行いて而かも資本主義其れ自からには行詰るべき何らの「内在的矛盾」の存在せざる「所以」を説く。しからば、その「所以」は之を如何に見たか。外ならず、同じく生産手段の中にも生産用原料例へば近世その最模範的のものである鉄鋼機械などが、益ます消費用原料を、實に人間の勤勞すらを代位し進むといふ一點に、この「所以」の重心を覓められたのだ。かく觀きたれば、景氣循環に對する福田博士の見解が、獨逸のハーンごとき單なる貨幣側原因論者とは全たく選を異にし、却りて寧ろ經濟生活の深潭を正視せるシュビートホッフ、ボーレ、カツセル、リイフマン等の見解に大同し、殊に、生産收益の重要部分の、生産よりも寧ろ流通關係即ち價格現象より派生するを

力説する、リ氏に共鳴し、ただ「循環」に關する其の認識に弱きを惜まれたのを知るのである。ただし、右の新舊二文に對し、私は、ささやかなものながら、一二の言詮を挿みたいと思ふ。其れは何か。すなはち、まづ、右の内在的矛盾よりの解放を説かれたる文において、「或る場合を除くの外」「過超生産はおこるものでない」（同書、五一〇頁）とせられたる、その「或る場合」をば、ひとり新生産要具の採用に局限せられず、廣く異種資本の有機的構成における内生的不均勢より自發するところの、有らゆる時期および契機と解釋せられたならば、この經濟周期性を解明する點についても、博士自から獨逸學界における卓越して明快なる理論研究者と認められたシュビートホッフの最近の所説に向うて、より、一致したることと考へる。ついで又、如今いはゆる鋼鐵の時代、機械の時代にありても、自然的資源の制約をうけて英米獨と同一の生産事情ないし階段には到達し難からんとする、本邦における景氣の原因については、かの鉄鐵産額の増加に代へて、之を纖維工業所産の輸出増加に求め、例へば其の出超が或ひは輸入鋼鐵或ひは流入金地金を招來し、言ひかへれば我が綿糸絹糸が外國産の鉄鐵鋼鐵に變形し、その刺戟のもとに謂はば二次的なる金利低下および信用擴張が行はれて、好景氣の時期の自のづから到來せるものと解せられたならば、謂ふ所の

海外よりの貴金屬の輸入また外資の輸入に引きつづいて凡そ決まつて日本に出現したる好景氣をば寧ろ財貨側よりして、より内生的に且つより、一般的に考察し得られたであらうと思惟するのである。(周期性「第五章をはりの部分」)

六

われわれは如上、經濟周期性の原因としては貨幣側に思ひを絶ちて、終ひに財貨側に之を尋ねるべきを暗示された。それにかかはれる、福田博士近業における思想的視野および順序によりても又、この貨幣側より財貨側への架橋を示唆されたものの在るやうに思はれる。然るに此の岸に立ちいづるも尙ほ過剰生産または過少消費の果して何づれの思索がこの經濟的流通生活における不比例性をば、より妥當に、より内面的に、又より廣汎に解明するのであるか、更らには右の何づれの見解を探るにしても、かかる景氣運動の必然的發現なるものは、果して現存經濟組織そのものの進化の里標たるべきか、將た其の崩壊に歸趨すべきものであるかに關する論争は、なほ多少殘されてゐるのである。

が、今、約解すれば先づ、ベルンシュタインの認める如く、景氣運動は、斷じて現存經濟組織

の崩壊に導くものでなく、適切なる經濟政策的社會政策的施設の伴ふ限り、寧ろ進歩の動力であり、進化的動力の表現たるものである。つぎの問題すなはち過剰生産か將た過少消費かの意見については、一語に約づめれば、經濟的發展上、生産關係が常にむしろ支配的要素をなしをれる限り、前者が後者よりもより、強力なるは想像し得られるところであるが、然し同時に、およそ生産が結局消費に宗朝するものなる以上、その一方的ではあり得ない筈である。たとへば、ふるくは自から社會主義者を標置せずして、然かも近世獨逸共產主義思想家を遍ねく影響したるシスモンデイの此れが創唱のかた、ロツドベルトウスを経て、ちかくは有力なる一講壇社會主義者ヘルクナアにいたるまで、より、大なる經濟の發達は、小數の富者を益ます致富せしめるとともに、大多數民衆を愈いよ困窮せしむるといふ論據のもとに、過少消費説を祖述したのであるが、其れは今日尙ほ殘存してゐる思考なのである。ところで、一見、一元論者たる如きマルクスにおいてもまた、可變資本に對する不變資本の壓倒的増加の傾向と、之が結果としての利潤率低落の傾向との認識より來れる過剰生産説とならんで、むしろ、輕るくは見られてゐるものであるが、其處に同時に、餘剩價值搾取の必然性および産業豫備軍の不可避の認識より由來せる過少消費の思

想が共存する。かくて、單純獨自な過少消費説の成立は、極めて困難な思索系行たるを免かれぬ。のみならず、この説の核心を形ちづくる労働階級の過少消費といふ概念は、ベルンシュタインの確認してゐるとほり、西歐輓近の實相を表示せるものでなく、更らに産業豫備軍の源泉については、オツペンハイマアの道破したとほり、必ずしも近世的大工業の醸しだす「再」生産ではなくして、寧ろ封建的農業經濟秩序の遺物より發生する「新」生産であると云ふ見解にも、可なり傾聴すべき論據を含んでゐる。およそ、かやうにして以下説くところの、勢ひ、過剰生産の思想を主とするのは、必然のところであらう。

さて、マルクスの所説は一見かく二元的ではあるが、然し其の主たる見解が、生産的範疇の技術的作用によりて、生産資本の有機的構成がおのおの異なる大いさ力をもつて發達するとともに、爲めに醸される生産上の不比例従うて流通上の不調和よりして、周期的恐慌が發生すると云ふに在るのは、世上周知のところである。然るに此所に、醫家にして同時に鋭きマルクス研究者であるヒルファディングが、相互あひ異なる有機的資本構成を有する諸産業部門間における發展の不比例「て」ふ必然性よりして、恐慌が發生するのだと見たのは、單なる一修正以上のものでないにしても、然し、たまたま近世諸學者の唱へる過

超生産説及び資本化説殊に過剰資本化説に對して、一脈の連絡を齎らせるものであることは、疑ひを容れない。(Hilferding, Das Finanzkapital, 1910, S. 318 ff.)

さらには又、二十世紀初葉に發表された其の三著作、中んづく有名なる「商業恐慌の理論および歴史」における、ツガンバラノウスキイの見解にいたると、その論考の歸結および目的こそ異なる、みぎのヒルファディングより遙か以上に、近世經濟學者の説く景氣周期性を示唆したるものであることは、全く明白である。よりて吾人は、いま、その前提と行論と歸結の大約とを、左に記述する事であらう。「しからば此の恐慌の周期は、抑そも何によりて惹きおこされるのであるか。上來の描寫に従へば、恐慌は、資本主義的生産方法に内在する二つの矛盾に歸因する。即ち、一には生産手段が直接的な生産者に缺けてゐるに對して却りて生産に參與しない人々に歸屬してゐる、さうして二には生産が個々人の經營において組織されをり従うて社會的生産が無計畫に行はれる、と云ふことが、其れである。」さらに、その原因と行程とを説いて、消費過少より生ぜず、却りて個々の異なる生産部門が同一程度に發達せざる事實よりして、流通生活上の此の攪亂が生ずるのだと論ずる。(Vide „Wirtschaftskrisen“, Her v. Diel und Momberk, Einleitung, Seite 24-25)「従前蓄積せられき

たつた資本は、いつか一度びは使用されねばならぬ。そもそも經濟的活躍の段階にあたりて、社會の新たな固定資本創成され、而して社會的産業全體は各おの獨自の一部層を形成するのであるが、斯かるとき、固定的生産手段の生産は、眞つさきに行はれるものなのである。即ち、鐵鋼機械器具船舶鐵道建築材料等は、前よりも遙かに大量に要求され、ここに遂ひには此の種の新しき固定資本が形成されるのである。しかし、此の段階に暫らく在ると、市況はおのづから變つてくる。新たな設立擴張等は減少し、固定資本の要素を形ちづくる有らゆる材料に對する需要が制限せられて、生産上の分配はここに比例的たることをやめ、新建造といふ新建造が凡そ減少し來るために、鐵や機械や器具や石材煉瓦木材等の建築材料は勢ひ、従前よりも、少ししか要求されなくなる。然るに、此の時生産手段の生産者は其のすでに、投下せる資本を彼れらの企業より引きだすこと能はず、殊に他方、建築物機械等の形態への放資の大いさ従うて、其の利拂の齎らす壓力は、勢ひ、生産の續行を要請して已まぬのであるから、そこに必然、生産手段の過剰生産が發生する。しかるに凡ての生産部門が、相互に依存し、合うてゐる結果として、かかる一部分的な過剰生産は、間もなく、一般的過剰生産へとおし擴がり、一切の商品の價格下落して、終ひに一般的

事業沈滞不振進みては恐慌が出現するのである。斯かる今や避くべからざる、個々の生産部門の發展における不比例性より歸結されるところの、資本主義的生産における大なる矛盾の主要原因が、バラノウスキイの頭腦を強く打つたのである。さうして、この矛盾は結局において、景氣運動の決定要素としての消費が全く後退するとともに、其れに代りて生産のみが前景に立ちいでて、經濟的發展の支配的モメントになると云ふ事に歸着した。ひとしく社會主義論客であるバ氏が、右の論理より導ききたれる結論は、逆睹するに難くないので、即ち、此の矛盾の存在よりして然しながら、資本主義の局限されたる歴史的役割が明白にされる、此の故ゑに、資本主義的經濟のより大なる發展は、この撞着より解脱し、きたるべきより、高き經濟的形態への變革に導かねば已まぬ、と結論したのである。

このバラノウスキイの「各異の生産部門の發達における避くべからざる不比例性」*unevenmäßige Disproportionalität in der Entwicklung der einzelnen Produktionszweige* の概念、ことに其の有機的な内生的な論理のなかには、マルクス主義中に固と潜在してゐる調和的半身のエンゴオネ的辯證を密そやかに含んでゐるのであるから、其れが修正主義者ベルンシュタインにおいて共鳴者を見いだすと共に、激越なるロオザルクセムブルグによりては勿論、

カウツキイによりてすら論難されるを免かれなかつたのは偶然でない。ことにロオザにいたりては、この批評のため、又た他端のマルクスを生かすために、その二著作をとほして、却りてロツドベルトウスの所説に近づくこととなり、以つて過少消費説すらを甦生せしめんとした。すなはち、労働階級の宿命である過少消費および産業豫備軍の必然性こそ、景氣循環を促進する根本的動因なれと爲したのである。が、綜するに、吾人興味の主題は其處には在り得ないので、ただ此處には、バ氏の「さまざま産業部門が同一比例に發達せぬところの必然性」の道破にいたつては、近代經濟學者の思索方向を暗示せるもの少なくなかつたる一事を、記述すれば足りるのである。

七

いま私は、ルクセムブルグの過少消費説の一支柱即ち産業豫備軍の考へを粗描したる序に、この同じ一點について、有力なる一經濟學者の力説した想蹤を顧みおかねばならぬ。それは、豫備軍の源泉について、極めて鋭きマルクス主義批評家たるオツペンハイマアが、ルクセムブルグに反對して、これを近代機械的大規模生産の固有する技術的機構の

なかに見ず、寧ろ封建的經濟秩序の遺物即ち土地の大所有のうち求めたる事を、指すのである。換言すれば、封建的遺制としての農耕用大所有土地に隸屬しゐたる地方大多數の農民が、資本主義的生産行程の先驅者であつたる、自由主義的經濟秩序の導入のために、解放せられざる寧ろ放逐せられたる、其の過渡的社會相のなかに見いだしたのである。然らば地方人口の産業都市への逃遁てふ現象が、資本主義的經濟組織の一重要屬性たる産業豫備軍の形成過程であるとする、此の見解は、そもそも如何なる理論的意味を有するのであるか。あもふにオ氏においては、この偏へに地方のみより入りこみ來る豫備軍は、必ずしも規則的な人口の「再生産」ではなく、却りて不規則な其の「新生産」なのであり、また無制約に再發すべき生産技術的要素ではなく、却りて今尚ほ殘存する大所有土地ないし大土地兼併てふ社會的歴史的モメントの廢棄とともに緩和さるべきものである、と看られたからである。

また斯く觀るによつて、この景氣循環の一大要因も、オツペンハイマアにとりては、單に自由流通經濟生活における過渡的な現象形態に外ならぬものとなつて來るのである。ふるくケネエ、ちかくヒルファディングと同様に、醫家出身であるところの、此のオツペン

ハイマアの社會病理の診斷における叙上の見解が、果して如何なる程度まで眞實なるや、は今措いて問はず(Wilbrandt, Die Entwicklung der Volkswirtschaftslehre, S. 88-9.)、其れは、少くとも、モオアの謂はゆる羊が優捷して人間を食ひ盡くせる状態と同じき環境を作出しつつある、即ち棉糸また進みて鐵の勢威が地方人口をして益ます大都會の自由なる空氣を呼吸せしめずしては已まざらんとする、本邦の現状を考へるに當りて、示唆を供するものであるのは、疑ひがない。否、我國人口の半ばが既に都會人口たるのみでなく、他の残れる人口も、經濟的自由主義の進みにつれ一度は豫備軍たらうとしてゐるのだと思はれる。

が然し、このツガンのと同じ理論的構成をば、彼れのは全く別な目的に置いて、即ち景氣運動の窮極が社會的變革に導くものと見ず、進化の結果に對して適應の作用の絶えず現はれ、爲めに其は全體として現存經濟組織の發達に歸趨せしめるのだと云ふ目的に置いて、より深き分析を試みるものとしては、まさしくシュビートホッフを尤なるものと爲しえよう。けだし、その論考の出發點は、さきに觸れたがやうに、經濟的發展においては、好景氣は異常態であり、而して不景氣が正常態なのであると云ふ見解から出立するもの

だからである。マーシャルもまた或る機會に、海運界の景氣が十年毎に一回位の上はむくを指摘し、以つて不景氣を常態と見て經營するの須要なるを説いてゐた、と記憶する。

(Vgl. Loewe, n. n. O., Seite 218; Mombert, n. n. O., Seite 26-27.)

さて、シュビートホッフの鋭き分析は、まづ好景氣を四つの段階に別けて考へる。「商品生産に及ぼす好景氣の最初の影響は、既に存在する生産設備を十二分に利用すると云ふ事に在る。それに引き續づく段階においては、既存設備を完全に充用して尙ほ足らず、勢ひ新たな生産手段が創設されるので、この時には、資本の現實的稀少さ Knappsein が痛感される。然るに第三の段階に進むと、かかる新興生産設備は益ます大なる投資を喰ひはるとともに、既に擴張された再生産行程よりせられる生産物はおのづから大なる再生産的消費 reproduktive Konsum を促す。ところで、後者が前者に對應して増加せぬならば、再生産設備に對する從來の高き價格は、資本化評定行程上、維持し得ざるに到るので、つひに最後の段階に押し進んだる場合には、熱病的に増加し來れる生産は、之に對應する消費の伴ふなきに拘らず、その生産物を市場に投げだすのである。かくして、好景氣は、そのすぐ後に、否、な其れ自から、不景氣を胚胎すると云ふ、此の状態こそは、まさしく決定的なるも

のである。一次ぎには、好景氣と、其の次ぎに來る過剰生産とは、原始的な直接的な消費料資本において高潮するものでなく、實に近代産業を特色づける再生産的消費に役立つところの大工業の生産物、言ひかへれば大凡そ生産料資本において、其の極限に達し其の最尖鋭なるを示すものであると在るのが、讀まれる。

私は、シュビートホッフの此の分析によつて、財貨の種類によりて景氣運動の其れに及ぼす影響に強弱の較差あるのを、はつきり示されたるものあるやうに思はれる。しばらく、人間の目的意識より眺めたる、メンガアの有名な財貨分類に従うて言ふならば、こは左の如く説き得られよう。すなはら、景氣循環の波動運動によりて最も敏感かつ激烈に蕩搖されるものが、高次財または生産財 (Gueter hoeherer Ordnung, oder Produktionsmittel) であるとともに、低次財または享樂財 (Gueter niedriger Ordnung, oder Genussmittel) において其れは最も鈍感かつ微弱であるといふ事、さらに詳しうすれば、財貨種類が第一次財または直接消費財 (Gueter erster Ordnung, oder Konsumgueter) より順次に第二次、第三次、第四次等々を経て高次財 (Gueter zweiter, dritter, vierter, usw. und hoeherer, Ordnung) へと進むに従うて、益ます鋭く且つ烈しく景氣不景氣の影響を受くると云ふ事が、此れである。(Carl Menger, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, Her. v. Karl Menger, Leipzig 1923, Seite 20—23.)

しかしてシュビートホッフの提唱は、後人の所論たとへばカッセルの所説を評價するにあたりて、逸すべからざる認識の一つであらう。

ついで注意すべきシュビートホッフの言説は、好景氣より不景氣への轉換を誘入する一要因として、景氣の頂きにおいて早くも出現するところの、各異の社會部層に對する所得分配の不平等化を擧げ、更らに好景氣の期間に強く上昇する再生産的消費に對する最上限界が、獨り欲望によりて設定されるのみでなく、利用し得らるべき資本の、現存數量によりても決定される旨を、明確にした事である。實に價格勤勞の騰貴にせよ、また市況一般の好景氣にせよ、結局において、充用さるべき資本の存在量を超えては維持し得られず、資本の需要にして若し一度び之を超過すれば、より、厳しき金利政策によりて統制さるべき事は、必然であるからである。およそ斯やうにして、主として財貨生産側より出發したる景氣周期性の研究は、このシュビートホッフの論考によりて一とまづ、一高頂が示されたと言ひ得られるであらう。

八

そもそも景氣循環は價格經濟生活における波狀運動であるのに、この價格運動の大勢を支配するものは、謂はゆる所得形成の状態を支配する貨幣側または財貨側より來る原因に外ならぬのであるから、その原因説についてもまた、敍上の思考方法で盡されてゐる筈である。けれども一層包括的な其の理解に到りては、更らに、主觀的心理原因説と客觀的原因説と、内生的原因説と外生的原因説と、または靜態的理論と動態的理論となどを、別かち考へるのを効果ありとしよう。何故とならば、アドルフ・ロエウエの論ずる如くに、貨幣側または財貨側より原因を論究し、或ひは過剰生産側または過少消費側より其れを檢討するもの、其の何づれなるにせよ、それは内生的たるか又は外生的考察たり得るし、また靜態的たるか又は動態的觀察たり得るからであるのみでなく、(Artikel Loewes, in Brentanos Festgabe, II. Band, Seite 349.) 斯かる研究方法ないしは思索觀照の重點の所在における異同を考へることが、取りも直さず、それを機縁たらしめて一層包括的に諸家の見解を示し得る所以となるからである。

で、吾人は先づ、内生的または外生的原因説について考へる。この辨別は之を一語に掩へば、景氣周期性を解明する主要要因が果して、經濟流通行程それ自からの内在固有する機構自體の必然性より發生するものと觀るか、或ひは流通經濟の外部の事情より進入するものと考へるかの、見解の相異にある。然らば、例へば、本邦にて周知されてゐるエールのアーヴィング・フィッシャの説くところの、交換經濟の機構においては物價平準變動の背後には利率變動常におのづから隨伴し而して通貨膨脹が二次的に之に従ふのであるとなすときは、通貨側の原因を内生的に考へたものであるのに對して、前述せるハーゲン又はミイゼスのに到りては、通貨膨脹を外生的要素として景氣運動を眺めたものである。また例へば、マルクスのごとく、産業豫備軍を資本主義的經濟の流通行程に不可離なる、更らに其の發達と有機的連繫を有する、必然的產物と考へたる場合には、その現象は景氣循環の一内生的原因と觀ぜられたものである。これに對して、さきに掲げたオツペンハイマアにおけるごとく、同現象を、自由經濟的流通に影響したる前期資本主義的經濟秩序の遺物よりの轉入なりと考へる場合には、同じき産業豫備軍てふ概念は、景氣運動の理

解としては外生的原因と観られたものとなる如きである。序に一語しておくべきは、經濟生活に内在する原因を重視するものと、太陽黒點の周期的出現ごときの自然的原因または人口増殖ごときの一般社會的原因を力説するものとを指して、經濟的原因と外經濟的原因とを別かち言ふ論者もあるけれども、併し其れは必ずしも内生的と外生的原因の概念以外の別の存在でない、と云ふ事である。併し更らにアフタイヨン、レスキユウア、ブウニアテイアンら、近代佛蘭西における研究者の唱へる過剰生産説又は過剰資本化説を含めての、同じき思想系統を示すところの獨逸研究者の所説にあつても、凡そ、その或るものには有機的考察が、また他のものには無機的思考が、おのおの其の論考の力點をなしてゐる事は、注意せらるべきであらう。

が、綜じて顧みれば、景氣運動の本源的要因を生産方面に覓める理論中にありても、その内生的要因を重視せんとする傾向の、近時ますます顯著なるは、争ふべからざる事實である。例へば、ゾムバルトの謂ふ有機的産業と無機的産業とにおける發達の不比例性のごときは、之を内生的原因説と看るに可なりの困難を感ずるのであるが、ついで一見、外生的

たるもののごとき、人口の自然的増殖を景氣循環に連繋せしめて考へる、ポールの試みは、實は全たく内生的原因説と觀じえられる。すなはち、人口の斷えざる増加および生産における資本の集約的方法の絶えざる新しき導入發達は、新生産手段の繼續的擴張を要請して已まず、従うて其處に資本財の相對的過剰生産は常に引き續き起らねばならぬのに對して、貯蓄による資本形成の總額に到りては、貯蓄と消費との性質上、これに應ずる能はざることを生ずるが故に、暫くならずして生産減退して周期的恐慌が出現せざるを得ないと説くところの其れである。(Pohle, Bevölkerungsbewegung, Kapitalbildung und periodische Wirtschaftskrisen, 1920.) それとは反對に一見、内生的と見えるもので、却つて外生的原因説をなせるものが、「經濟生活の波狀運動」におけるシュウムペッタアの過剰生産説であらうと思ふ。すなはち、經濟生活本然の相が、もと、適應性でふ靜的運動形態を維持しようとするものであるに對して、企業家的精神の醸し出す進化性といふ動的運動要因が干犯してきたため、そこに資本利子等の複雑な特殊現象を通ほして、景氣循環が惹き起されると云ふのである。言ひかへれば、もと企業家典型には、靜態のおよび動態のおよび半靜態的經濟人

Dynamische, statische, und halbstatische Wirtschaftsmenschen とも概念さるべき人々が併存するので

あるが、この動的經濟人が創造的なれども合理的にあらざる生産上の或る豫測従うて行爲を試み、やがて他種の企業家および大衆を驅りて同一方向に向うて躍進せしめるとき、必然そこに景氣の周期的韻律が打開されると云ふのである。深く考へるまでもなく、特定人のみの持つ企業家精神ないし投機的精神 *Unternehmungs- oder Spekulationsgeist* が、恰かも一般的經濟生活の外部に立つて爾餘の大衆を指導するのみでなく更らに經濟生活全般を昂揚せしめる力を有つとなすときは、明らかに外生的な要機を過重視したもので、長期大局を通じては中和し飽和しするべきものを實在と看んとする、一錯覺に外ならぬ。

およそ斯やうな思索行程を展開しつつ、やうやく外生的なるより内生的なるへ進み來れるものが、既述せるごとく、この主題における論考の軌近動向であるが、此所に、リイフマンの所説ありて、宛がら其の橋を架してゐるのは、興味なしとしない。その「國民經濟學原論」において、より正確に言へば、其れより先きに發表された二三の論文において、リイフマンの展開したる精到なる景氣理論は、之を要約すること容易ならず、また上述シユウムベエタアのに相ひ通ずるところ尠なからざるものであるが、リイフマンにおいては正だし

くも、生産技術上の改良發達といふ客觀的方面を力調したところに、特徴がある。これが行論の特徴は、企業經營行程上、投下された生産設備または固定資本が自然的に自からを年賦鎖却しゆく期間よりも、生産技術的進歩の速度の、はうが遙かに迅速であることを常態となすところの事情狀勢のうちに、この景氣變動の根本的原因を見ようとするものである。従うて、それは七年乃至九年毎の循環といふ如き、一定の周期性の想定には勢ひ反對する事となる。(この周期性の點は、リ氏「經濟學原理」第二卷七六一頁、福田博士「周期性」比較)。

さて、ここまでは、外生的原因説の臭味が残つてゐるのであるが、ついで、彼れが他端より同現象を觀察するを忘れざりしがため、リイフマンは、内生的、理解への、架橋を施せるものと言ひ得られるのである。と云ふのは、彼れは、資本制經濟の固有する機構上の缺陷——獲得せらるべき價格即ち企業の私的利益の追求のみが生産上の方向と數量を決定するを其の最大なるものと爲すところの缺陷を、右の外生的要因と共に併はせ認めらるからである。これとともに、景氣循環を齎らさずして已まぬところの、生産上の觀測ちがひ、殊に過剰生産に陥らしめる近世市場の機構に對する明哲な展望理解を試むる事の一般的不可能といふ點においても、彼れは、景氣交代の必然的原因を認めたとであつた。ただし、

この見解は必ずしもリ氏に創まれるにあらず早くも一八八九年ライプティツヒにて試みたりしブレンタノの講演綱領にも溯りえられ而してモムベルト、デイイル、フオオゲル等の祖述したところなのである。(Brentano, Ueber die Ursachen der heiligen sozialen Not, 1889, Bergmann, n. a. O., S. 389.) が、リイフマンがその天才的思想の飛行機をかりて「外生的の彼岸より内生的の此岸へと」この種の思索の本源的系統をうつし、以つて景氣運動の理解を深かめたる寄與には没すべからざるものがある。其の片鱗は、その小著「一般國民經濟學」中の隻語、例へば「ひたすら利潤を目的とする私的利益と、技術上の進歩を基礎とする資本構成の國民經濟上もつとも合目的な投資上の限界との分裂する事實關係のうち、明かに景氣變動の最終の原因が横はつてゐる」と云ふ言葉のうらにも、閃めいてゐる。(Lietmann, Allgemeine, 1924, S. 74.) ただしこの「分裂の認識よりしても、彼れの經濟秩序への確信が動搖され來ないのは説くまでもないであらう。

おほよそ斯かる徐ろなる、外生的より内生的へてふ原因研究の視野の擴大深化を経て、シュピートホッフみづから内生的景氣理論の名を自説に命じたるごとき「經濟生活體の内在力により自働展開する景氣交代の理論」に沈潜する、學徒の輩出を見るに到つた。さ

うして今、その頂きに立てるものはシュピートホッフに外ならぬのであるが、然しその創唱のプライオリテイに至つては、シュ氏と同一順位を要求しうるものにルドウイツヒ・ポールの在るのを忘れてならないであらう。然らば、此の二パイオニアにかかはらしめてのカツセルの地位はどうか、の問題については後に更めても、少し詳論の機會を有することであらうが、兎まれ、カツセルの近く、理論的社會經濟學の最終の長篇を傾けて展らき來つたる、略ぼ同方面に向うての精細なる研究成果に到つては、可なりに高き評價を要求しうるものであらねばならぬ。ただし、カツセルがその文頭において、恐慌史實の類型化を主要方法と爲したるバラノウスキヤレスキューアの論攻に對する不滿を指摘せる意味は諒解ができるにしても、盟友ポールの研究より全然關係なしに其の理論を研覈したと爲すに到つては、輕ろがろしく信するを得ない。と云ふのは、一九〇二年發表のポールの論文における見解は、シュ氏及びカ氏と同じ思想の下に同一行論をたどりて過剰生産説を展開してゐるのみでなく、投資と貯蓄との間の吻合を妨げる時期的數量的な大なる距離の存在よりして、恐慌が奔流しきたる旨を明確に論證したものである。だからである。

ポールの關係は右にて措いて、ついでシュピートホッフとカツセルとは、共通せる

特徴が二つあるやうに見える。すなはち、共に、生産資料生産手段または再生産的消費の過剰生産の不可避さに圈點を施こせる事。および共に、その理論を立證するため、大戦發生にいたる最近半世紀にわたりて歐米重要諸國民の經驗し來つた景氣循環の實相に關する、極めて丹念な史實的統計的解析を試みたる事が、此れである。いま、先覺の諸説における場合に興味を示したる次手に觸れおきたいのは、カッセルが産業豫備軍の源泉を尋ねて、オツペンハイマアのと同一説に據つてゐることである。すなはち、景氣運動の高潮の一大要件であるところの、この産業豫備軍の徵發源泉をば、マルクスのごとくに高度資本主義的經濟組織自體内の機構にもとめず、却りて景氣の低潮には其所に貯藏せられ而して高潮に際しては其所より自働的に放出せられるところの農業的人口において物色したのである。で、カッセルのオツペンハイマアのと異なるところは、その必ずしも前期資本主義又は封建時代の遺物たるを力説せず、従うて其の過渡的現象たるを強調しない點にあるのであるが、此れが歸結にいたつては、二者あひ同じい。何故ならば、カ氏は、歐洲における豫備軍の駐屯場所を農耕地方に、そして米國における其れを外國移民産地に見たものであるが、斯かる外來的豫備軍勢の生産率にいたつては、諸産業發達に伴ふ都會地

方の人口分布の漸く安定するにつれて漸次低下せざるを得ず、従うて景氣の高潮に際し、諸産業の、殊に鐵鋼生産額の激増して資本財生産業の、奔騰せんとするに當りても、所要の豫備軍の徵集を期待するを得ずして、ここに地方および産業による人口分布のほぼ遂行さるべき將來における景氣運動は、少くとも此の一點より、見ては、今日より急激たり得なくなる、と推論するものだからである。(Gussel, Theoretische Sozialökonomie, 3. Aufl., S. 512.) これは正さしくただし。しかし更らに、カッセルの想迹を尋ねるならば、右の景氣運動強度に對する將來的推測が直ちに、氏の主命題すなはち過超資本化説(Überkapitalisationslehre)と撞着し來るを看過し得ず、また其の眞資本と蓄積資本との不調和説と矛盾し來るを見のがす事を得ない。ただ、今のところは、斯かるカ氏理論の内部に存する矛盾をあげつらふ餘裕はないのであつて、縦シカ氏の擧げる原因中の從屬的なものであるにしても、此の産業豫備軍の見解こそは、マルクスのに對して、著しく外生的觀點に立てるものであるのを、注意しておくにとどめよう。

さて綜じて細枝をさつて根幹について眺めるならば、シュピートホッフ、カッセルおよ

びリイフマン、殊に前二者の行論には、その内生的原因重視の鮮かなる點で、吾われを打つものが多い。ともに其れは、景氣運動が性質上、主として固定資本殊に鐵鋼を原材料とする生産財の生産における變動にて象徴されるもので、他の産業諸部門には第二次的な影響を與へるに過ぎず、然るに抑そも經濟恐慌は凡そ債務履行に應ずべき一般的な無能力で特徴付けられるものであるが、右のごとくにして例へば鉄鋼鐵生産額の累進して次ぎつぎに高められたる資本財生産業の繁榮とともに、必然要求しきたる益ます巨大なる資本需要が、つひに甚しく蓄積資本を超過するに到つて、過高なる寧ろ其の場合には適切なる利率によりて統制せらるべき資本の稀少性に逢着し、そこに景氣の方向は必然逆に轉換する、と爲すのである。短く言へば、ともに、經濟生活に進化ある限り不可避なるところの、この景氣運動の核心は、眞資本と蓄積資本との數量間に必然醸成さるべき一般的矛盾といふ事實に横はると爲すのである。尤も、この見解とても異議の挿まれるものなかりしにあらず、例へばレスキユウア、アフタイヨン、ブウニアテイアンらは、斯かる意味にての二種資本間の一般的不同調てふ現象の不可能性を強調したのであつた。が然し、箇々の企業よりしてではなく、廣く國民經濟より考察するとき、斯かる一般的稀少性の出現、

寧ろ逢着の可能なる事を把握するには、必ずしも異常なる理解力を俟たぬのである。

九

右やうにして、今や内生的考察が、討究上、より効果おほき方法なる事は大體承認し得られたとして、次いでまたわれわれはロエヴェに從うて、主觀的心理原因説か、客觀的原因説かの思索系列に進むのであるが、少くとも景氣理論のかかはるかぎり、ここには然まで關説に値ひするものなく、隨うて單なる片語を記すにとどめる。實に吾人は、シュビートホツフ、カツセルらにありては勿論とし、多數の限界利用説論者、またはリイフマンごとき箇人心理的考察を重んずる謂はゆる限界餘剩均等説論者にありても、景氣運動の方向を決定するものとして、箇人心理的判斷ないし行爲の重要さを説けるものあつたる、例しを聞かないのである。ただし、曾つても觸れた、投機的精神とか企業家的精神とかの箇人心理的原因があるひは人氣といふがごときの社會的指導力にまで高かめられたる場合、あるひは然らずとも既に動かんとしてゐた循環の底流れを緩急せしめる場合は、むしろ在り得るであらう。然かし其れは、既に其れ自體流動せんとする内在的な客觀的な經

濟的狀勢が成熟しをれる上にて初めて然り得るのにとどまる。かれら天才が、既存事實を逸はやく捕へて、群集これに追従するのにとどまる。が、そは大局を支配し得ない。

かくて吾人は尙ほ一層効果ある方法に移り進むことであらう。靜態的理論か、動態的理論かが、即ち此れである。

然り、其處には豊かな收穫を約束する果實がまかれてをる。かへりみるに經濟生活の研究上、シュウムペータアが、流通行程における運動形態について適應と進化と (Anpassung u. Entwicklung) を對立せしめたることは、之とほぼ同じき思想よりして、オッペンハイマアが、經濟學自體を純粹經濟學と政治經濟學と (reine Oekonomie u. politische Oekonomie) に辨別したると同様、社會科學の認識を深めるに著しい寄與をなせるものである。因みに右に謂ふところの純粹とは理論的といふに同じく、また政治とは社會又は國民といふに同じい。しかして、其れは、ジョンベエツクラアクが、靜態經濟學と、其れより分岐する然かし、永劫に其の示す方向に歸趨する動態經濟學と (economic status and economic dynamics) を別かてる思索、およびマーシャルが、斯學の理論的核心的靜態經濟學に在りて、動態經濟學に存せざると

ともに、其の現實的研究の基調に到りては、常に靜態的にあらずして、動態的たるべき (not static but dynamic) であるとした、其の思想が、英米經濟學の深化に貢獻したると、殆んど揆を一つにするものであらねばならない。そこで、今、右の思想系列の何づれに據つたにしても、かの、均衡おのづから破れて、而かも、大小波あひ異なる、波長もて、蕩搖しつつも、崩壊することなく、進化に向うて、永遠に運動するところの、現存資本主義的經濟における、此の景氣運動て、ふ現象の研究は、右に示せる對立に、即して言はうならば、實に、恒常的進化の認識に任ずるところの、社會經濟學の、更には、經濟動學 (politische Oekonomie, oder dynamische Oekonomie) の範疇に、落つるものであることは、明白な理義であると思はれる。しからば、この靜態的と言ふの概念はいかなるものであるか、又た、從うて、景氣運動にかかはりて言ふところの靜態的および動態的理解とはいかなるものであるか。

そもそも、靜態的および動態的の概念は、單一に表現し得られる所でないのであるが、或ひは最も、狭まく、均衡的な、靜止状態のものと、常住運動的な、進行相のものとの區別せられ、或ひは常に、整一な、脈搏を、繰返へして、生活する、生物學的なるものと、不均整な、運動を、豫想する、動態力學的、加速度的なるものと、別たれ、また、或ひは、物すべて、運動するものなれど

も、其のうち常に同一進度にて之を爲すものと其の強度のたえず異なりて加速度もて進展するものとに辨別して考へ得られる。さて右の一つの形容詞で制約される靜態的景氣理論とは如何なるものであるかと云ふに、——たとひ之が對象となる靜態的經濟生活は、恰も矛盾なき調和の、又は加速度なき落下速度の考へられぬと同じく、現實に對立せしめては飽くまで理論的概念的な抽象に外ならぬものであるが、——飛躍的な景氣上騰自體がつねに、其れに先き立つ靜的な均衡状態より發生するものであるとともに、之に引き續く沈滞的な不景氣は好景氣より反動的に進轉してきたると云ふ如き機械觀にたてこもるものである。この意味においては、ドイツェル、リイフマン、シュバン、ゾムバルトらは概ね、靜態的理論家と見らるべきものであらう。

ついで動態的な見解においては、全經濟生活には全く靜止的均勢的な平衡状態なるもの存在する事なしと爲すのである。即ち、或る生産部門または或る産業部門はおののおの其の固有する内在力によつて各異の發達過程を辿るものであるから、その間だ勢ひ常に發達の不同調生じ、また投下資本と蓄積資本との不比例性發生して、主もに金利的統制によりて景氣循環が周期的に展開されるのであると觀るのである。この故に、動態的

理論家にあつては、内在力によるデアアレクテイッシュな循環運動をば内生的に繰りかへされるところの韻律とみ、以つて全體として、景氣運動を理解しようとする。シュビート、ホッフ、カッセル、フイツシャア、ブウニアティアン、アフタイオン、レスキユウアらは、この意味において動態的理論家たるものであらう。さて此所に到りて、これら動的理論家中の何ん人かの所説を藉り、いささかにても、これが内容を充たしおくのを適切であると考へる。ちなみに、この靜態的動態的の概念の理解には、クラーク、シュウムベエタアの利子學説を論評したるバヴェルクの小文、および輝やかしき高田博士の一業績の繙讀を望ましいと思ふ。(Boehm-Bawerk, Eine „dynamische“ Theorie des Kapitalzinses. 1913. — Kleinere Abhandlungen ueber Kapital und Zins. Her. v. Weiss. 1926. 高田保馬氏經濟學研究第一篇、クラック研究。)

かやうな考因のもとに私は姑らく、カッセルの主著の終篇「景氣運動の理論」および同氏の近小著「理論的經濟學の根本思想」(Ossel, Fundamental Thoughts in Economics, London 1925, ch. I; Do, Grundgedanken der theoretischen Oekonomie, 1926, Kapitel I.)の首章「社會經濟學の目的と方法」のうち、或る條りを綜合して概敘しておくこととする。そもそも經濟生活は永遠に連續し永久に進化して已むところのないものであるが、この進歩にも、三段階が區劃される。

第一階段にては、生活一斑が無變化少くとも均勢を維持し従うて一切の價格現象が自然的正常的狀態において成立し推移する場合であり、その理論的把握は謂はゆる靜態經濟學に外ならぬ。次いで第二階段にては、有らゆる方面における發達が均衡をえて行はれ従うて進歩のもたらず動搖とての殆んどない場合であり、その研究成果は準靜態經濟學である。しかして此の領域における經濟生活の理解のためには、主著の首めの三篇において採用したるとき廣汎な靜態的な演繹的な方法が可能でもあるし又た絶對に必要なでもある。しかるに一度び第三階段におしすむと、均勢的發達より離脱する幾多の偏倚が現はれ、従うて其の研究方法にも必然、動態的な現實的な歸納的な行き方が必要となつてくる。(Pers. S. 12, u. u. O.)が、この事の存するは、爲めに靜態的理論の存在理由を毫も喪はせるものではなく、ただ之を補足し修正するにとどまるのである。何故とならば、動的なりとはいへ、この現實の社會に見られる一切の現象は、靜態的なるそして人力の支配しうべからざる力の嚴存するによりて、成立するものであるからだ。

いま理解を資けるため、極めて卑近な例を引かう。かの經濟生活の最重要特徴である、資本の社會的蓄積なる現象は、高度に動的なる經濟生活にて最も著しいのであるが、これ

が認識のためには、均勢的一様な發達を示すところの經濟生活における其れを豫測し想定したる上ならずしては不可能なるが如きである。例へば大戦時および其の直後に於ける西歐米諸國民の蓄積資本總額は、あるひは數十倍に増し、あるひは數十分の一に減じた事であらう。が、かかる急激な變動が果して、該生産要素に對する價格構成を如何に支配し、また景氣運動を如何に深刻に左右したるかを測定するには、どうしたら宜しいのであるか。實に此の進度の一斑を推知すべくんば、大戦時に先き立てる約五十年間にわたり西歐米諸國の遂行したる經濟的進歩の強度が年平均三分であつたる事、しかして其れが正常的自然的な情勢であつたる事をもつて、豫備知識たらしめねばならぬが如きである。——カッセルは大凡そ右やうに説いてゐるのであるが、思ふに、その「原理」におけるマインヤルの論考精神もまた、是所にあつたるもののやうである。

さて以上、この二種の思索系行の意義ならびに現實生活の理解殊に景氣現象の會得のためには、畢竟するに動態的理論を、否な全經濟生活に對する靜態的理論を、擱れる上にて、動態的理論の究明を、より有效なる方法と爲す事の大略は、之を示し得たことと信ずる。

一〇

上來、景氣循環運動原因にかかはる獨逸諸家の見解を略示したとともに、其の歸趨したる里標の高みが、およそ方法的には内生的動態的なる理論に、また内容的には過剰生産説より、正確にいへば過剰資本化説または蓄積資本稀少説にて補はれたる過剰生産説的なる理義に、到達したる所以を概観し得たことと思ふ。しかるに今ま前説をむすぶに、殊更らにカツセルの所言を抽き、以つて其の採れる動態的歸納的現實的經驗的なる論證法を高揚したるには、何かの意圖あるか。そは、シュビートホッフおよびカツセルの研究を特徴づけてゐる、歸納的具體的なる景氣運動の事實的經過の精観細叙をもつて、先行せる景氣理論を補足するにより、希くば此の全理義の領解はじめて完たきを得るであらうと云ふ見解のもとに、今や其の方向にむかうての諸家研究の概要を紹述し論評せんとしたるものに外ならぬ。

さて、其れには先づ、景氣循環の一期間、即ちカツセルの用語をかれば景氣の上昇期より其の下降期までの交代一期間に、現はれる變動のために、國民經濟生活一斑殊に持久的

有形的な生産手段の生産および勞銀その他の價格所得の形成に關する諸事情は、實際上一かなる影響を受けるかを考へねばならぬ。これが手段としては、景氣の交代を一の全體と觀て斯かる狀勢の變化を示す指數統計や之に基づく曲線を調製せねばならず、更らに是れらの材料を一層有用ならしめるため、輓近經濟生活とほぼ同一基調のうゑに立てる時代ないし發展階段につき、成るべく長き期間および成るべく多き國民の示す經濟事實を網羅せねばならぬ。およそ斯かる行き方を歩みて、ミツチエルが逸はやく優れた研究を發表したのは周知されてゐるが、今や近く、それは獨逸の研究にありても著明たり來つた。ただ注意すべきは、かやうな景氣事象の選擇および展開そのものにもありても、甚だしばしば、其れが、諸家みづからの支持する理論を確證するやうに調製されてゐることであらう。その事の存するは、必ずしも彼等が恣まに事實經驗統計の選定を行ふたものとは言ひ得ないのであるが、こは、シュビートホッフが世界大戦争にいたるまでの獨逸資本主義經濟の全過程を叙述し、またカツセルが一八七〇年代以降の西歐諸國民の示し來つたる高度資本主義の諸變動を描寫したる史的展望に妥當するであらう。ついでブウ＝アティアン及びバラノウスキイの遺せる業績を更新するため、フオオゲルの行ふたる一

八九五年ないし一九一四年間の英國恐慌史に關する特殊研究にありても、更らにまた、最近レエデラアやロエプケの企てた大戰中及び大戰後における獨逸景氣運動の大觀に用ひられたる史實にありても、凡そ同じく該當するを見いだす。要するに、正だしく把握されたる理論と鋭く進められたる推理との必然的歸結をもつて前提されざる限り、廣く長きに亘りて蒐集せられたる事實的精敘細録は必ずや、その先行理義を論證するに相異なるのである。

中に就いて、この循環に關する典型的なる詳敘を試み、最も輝かしき成果を收めたるものは、ロエヴェの承認するがやうに、シュビートホッフ及びカツセルに如くものはないであらう。前にも多少觸れたことであるが、シュ氏は、材料を獨逸のみに即して蒐集したけれども、時代は殆んど十九世紀のはじめよりして検討し來つた。これに對して、カツセルは時代については、寧ろ正當にも一八七〇年ないし一九一四年てふ、曾つて破られざる謂はゆる産業革命完成後の資本主義經濟の繼續的發達の約半世紀に限定したけれども、横斷的には右の時代に跨がりて工業中心の産業生活を營み來つたる英獨米等の諸國民に見られた一切の重要事實をば極めて包括的に推敲し來つたのである。この點より、國際

的なる且つより、近代的なる比較的考察を寧ろ採るべしと考へるところの、私は勢ほひ、後者の方法に傾かざるを得ない。

かくして今はしばらくカツセルに追隨することであるが、彼れは上昇期より下降期に變轉せる年、即ち景氣轉換年または恐慌年 *Wendepunkte oder Krisenjahre* を、およそ一八七三年、一八八二年、一八九〇年、一九〇〇年および一九〇七年と看做した。さうして此れらの轉換年横線と、經濟生活上もつとも重要な財貨勤勞の生産高および其の價格の變化を表はす變轉縦線 *vertikale Wendelinien* との、單一なる又た複雑なる交錯より成立するところの、あまたの景氣曲線表又は經濟曲線表 *Konjunkturkurve oder Wirtschaftskurve* は、實に景氣循環が、各般の經濟事情すなはち生産一般、殊に持久的な生産手段の生産價格所得、勞銀その他の資本形成および資本市場一般等に及ぼせる影響を描出して、餘蘊なき論證力を發揮してゐるのである。

ただし、この曲線調製の素材たる統計を編むにあたりては、可なり周到なる注意を須要する。すなはち統計の包括すべき部門または物件の選定、例へば生産財の代表的なるものとしては、有らゆる固定的生産手段の原材を爲す鉄、鐵を選び而かして消費財を代表す

るものとしては小麦のごとく其の豊凶が自然的條件に支配される物資を除いて最も廣汎なる市場を享有する石炭を選ぶと云ふが如きことを肝要となすのみでなく、その統計には價格統計 *Preisstatistik* の外に、生産統計又は數量統計 *Produktionsstatistik* oder *Mengenstatistik* をならべ包含せしめるを望ましと爲すごときである。生産統計については、少くも大戦前には米國にありてすら、技術的制約の數々多く存する爲めに大量的なる原料品および半製品にかぎられ、精製品には及び得なかつた。また有名なるサウエルベックの指數にありても、原料品および其の他の商品の二大種別をなしをれるに過ぎないのである。が、若しシュビートホッフおよびカツセルの研究に従へば、少くも景氣不景氣の循環運動の關するかぎり、景氣が固定資本または生産資本の主原材料へば、鉄鐵の生産額には全く一定せる影響を及ぼすに對し、主として消費財一般の生産に使用される石炭の生産額には注目に値ひするほどの影響をもたらさぬのである。翻言すれば、景氣の上昇期と下降期との交代は、其のそもその内面的の性質上、固定資本の生産における變化なのであつて、其の他の財の生産の變化とは少くとも直接的なる關係を有してゐないのであるから、上來の生産統計が、生産財の其れ以外に涉らぬとしても、其れは左して著しき不便を醸

さない事であらう。(Cassel, a. a. O., Seite 493.) 右にて私は、景氣の上昇期下降期交代の抑そもの内面的性質と言ふたが、一語を釋註する。それは、生産財の完成には往々つぎつぎに遞増する巨大な資本化を須要するものゆゑ、この資本の調達が同じく遞増しゆく高利率の壓迫によりて漸く困難ならしめられ、終ひに絶對的なる資本稀少性に逢着するに到りて、上景氣は其所に勢ひ不景氣に轉換すると云ふごとき、不可避的性質あるを指せるのである。そは何づれともあれ、かく財の種類の異なるに伴ふ、シュビートホッフの謂はゆる景氣感性の強度 *Intensität der Konjunkturrempfindlichkeit* の鋭鈍の較差あるに拘らず、米國多數の指數統計中、大戦後漸く消費財製品についても調査を伸ばさんとしてゐることは、經濟生活一斑の見通しのために、勿論歡ぶべき現象である。

いま景氣統計や經濟曲線のことを記述したるつひで、一見しては場所はずれの觀あらうとも、私は、かの貨幣購買力又は物價平準の安定 *Kaufkrafts- oder Preisstabilisierung; Compensated or stabilized d. I. I. r., "managed" currency* を意圖して、カツセル、ケインズ、ホオトレイ、フィツシヤアらの望んだる、或る一事を記しおくを、無用ならずと思惟する。それは、各國が物價、生

産高勞銀等の統計調製に際して同一基年および同一計算方法を採用し、且つ之を迅速に國際的中央事務局に通報するとともに、同上局また時を移さず其の總計表を公表して之を參加國に移牒する事、各國の通貨政策勞働政策に對してのみでなく、景氣政策に對して寄與するところ甚大なりと云ふ事實に外ならぬ。「一九一四年後の貨幣および外國爲替」中で、カツセルの勸説してゐるやうに、其れが爲めには、各國とも一九一三年の平均數を一〇〇として有らゆる統計の基年基數たらしめる。同一算法に據りて算出されたる毎月の統計を其の月末に通報し且つ其の復移牒をうける。そして其の中央局としてはハーグにおける國際統計局またはジュネエヴにおける國際勞働局を選び、此れへの又た此れよりの通報は悉く電報に據らしめるのが、正當且つ便宜であると思ふ。(Cassel, Money and Foreign Exchange after 14, p. 50.) この事こそ有らゆる文明國を擧げて國際聯盟におのづからなる興味を繋がしめる一助ともなり、延いては國際的なる恆久的平和の大業に參ぜしめる一機縁ともなる事であらう。ただし一つ、此の國際的通報が、各異の國々によりて幾らかの參酌すなはちウエエトの加へられるべきは、國々の經濟發展の階段および主要産業の分野の異なる限り、特に言詮するまでもない事であらう。

一一

さて、シュピートホッフ、カツセルの研究の業績の價值を高かめるに與つて力あつた、景氣交代の事實經過の詳述および其の類型的態様の曲線的表現を、理解すべき豫備知識の箇々については、上述せるところで盡されてゐると考へる。が今や、幾らかの重複を覺悟しつつ、本文を結ぶの準備として其の總括的把握より得きたれる、之が主要なる歸結および私見の二三を、一括して摘録しおきたいと思ふ。

その一は、景氣の上昇および下降を特徴づける事象が、固定資本又は生産財の生産額の増減にあり、しかして流動資本又は消費財の生産高にいたつては殆ど之に參與し影響するところなく、ただ經濟生活一般の發達及び人口の増殖に伴うて緩徐たる増進を示すとどまる。従うて好景氣とは生産財の生産が可なり急調に遞増しゆく相であり、不景氣とは其が前きに到達したる増進點以下に遞減し來る形であつて、しかして謂はゆる恐慌とは右の運動の頂きに殆ど必發するところの外觀的な過超生産と一般的債務決濟上の

スツルム・ウン・ドラングの状勢を指すと云ふことである。さうして、結局は勿論、その發達に向うて歸趨するのではあるが、生産財の生産の増減なるものが固と概ね七年ないし十年の周期] (die 7-10) jährigen Periodizität) 内に循環し來る如き本質を内在するが故に、さきに言へる生産財生産の不斷の發達とともに經濟生活一般また斷えず進展しつつも尙ほ同時に其の間だ、波狀的景氣運動は絶えず行はれるのである。ただし其處に一つ注意するべきは、かつて福田博士の一近業を考へたる機會に觸れおいた事でもあるが、概念においては均しく生産財の生産と言ふけれども、國々の生産上の資源の厚薄や技術上の制約や又た經濟上採算上の考慮等のもとに、その國民の須要する或る生産財、たとへば鉄鋼鐵鋼軌條船舶諸機械機關殊に電力諸施設、建築材料等の十分な數量をば、自ら生産し得ざる國民は蓋し少なく、しかして、斯かる國民に對して之が生産とは其の間接的生産を意味するのだと云ふ事である。いま例解を本邦にとれば、その主要生産物殊に重要輸出品たる、しかして明かに消費財の範疇におちるところの、生絲、綿糸、絹織物、綿布等の輸出が盛んに行はれて、その對價として上記ごとき鐵鋼等の原材料生産財の輸入が増進するならば、其は之を生産財の生産増進とみ、從うて好景氣を告げる海燕とあふいで差支えな

かるべきが如きである。

其れは姑らく措いて、然らば、かく進める産業國において、抑そも生産財生産が特に促進されるのは、何の故か。もちろん、斯かる固定資本の増進が常住的に漸進的に促がされる所以は、一般的に言うては、マインシャルやリイフマンの詳説するところの如くに、經濟生活の能率化厚生化への努力の結果であり、翻言すれば、常に生産的施設には自然的技術的經營的壽命の存するのみでなく、絶えず生産手段を改良更新し規模經營を擴充する事の經濟生活の充實能率化のために必要であるからである。故に、苟くも進歩せんとする社會的意思、營利し収益せんとする企業家的意欲にして、絶滅せざる限り、生産財の生産が消費財の生産に超えて行はれ、以つて世に景氣の脈搏を鼓動せしめるは、絶對的なる必然に屬するのである。

が、その生産が周期的に格段に刺戟され、右の景氣運動の循環を規則的ならしめるところの、其の力は抑そも何であるか。直接的に其の最前線にたつものは、シュピートホッフの道破したるが如く、經濟生活の正常状態であるところの、不景氣の時期において、恐らく長く育ぐくまれ居たる、低廉なる資本使用の價格であり、低き利率である。けだし、その時

には、一方にては固定資本がおよそ特別に高き収益を約束して設備し得られるとともに、他方にては低き利率にて還元さるべき有らゆる固定資本化價額は勢ひ増大されるからである。で、この時この環境のもとに景氣運動はおのづから上は向かざるを得ず、つひにことんまで亂舞し進みて波頭らに近づく事であらう。しかるに、やがて、(しばらくカッセルの用語を藉りて言へば) かかる投下資本の増進すなはち此の場合、固定眞資本の増大 *die Vermehrung des „investierten“ Kapitals, d. h. des festes Realkapitals* の趨勢の息む所なく進むに伴れて、其れより流れ出る流動眞資本 *Bewegliches Realkapital* すなはち消費財または勤勞用役はますます増大し、従うて其の價格低下すべきと同時に、更らに生産資本擴張のために充用さるべき社會の蓄積資本に至つては必然逆にますます乏うして従うて其の利率上進し、兩者あひ俟つて曩きに高く評價されたる生産財の資本化價額は必然的に低減する。しかるに、此所に更らに、生産財の生産を軟化せしめる他の要因が併存してゐるので、即ち固定資本の生産、例へば幹線鐵道や大建築物や水力電氣工事の完成ごときものは、性質上はなほだ長き年月を要するので、その完成の末期に近づくに従ひ、愈いよ稀少ならんとする蓄積資本に對し益ます高き利子を提供してまで資金を調達せねばならず、ここに時と

して恐慌的現象を経過し、又は進みて景氣は遂ひに沈降せざるを得ないのである。で、一九七〇年以降件んの景氣交代が、大約七年ないし十年を一期間として循環し來つたことは、周知の所なのである。ただし、本邦はもとより米國にあつても、その謂はゆる轉換年または恐慌年が、英獨佛の諸國にあらはれたる其れと多少異なるものありしことは、經濟生活の國際化の趨勢の傍らに尙ほ各國産業生活の特殊相の存するかぎり、寧ろ當然の理義に屬するであらう。とまれ、一景氣循環期間の長さといふものは、國際的紛争ごとき外生的原因によつて攪亂されたる場合を除いては、可なり大いなる程度において、重要生産財の設備の完了期間又は重要産業部門における諸改良諸發明と密接なる交渉をもつてゐるのである。故に、最近時のごとく固定財生産の工事作業行程がより迅速に行はれ、従うて其の完了期間がより短縮し來る傾向の顯著なるにつれて、この景氣期間はおのづから短縮せられ、又た其の交代は小刻みに去來せんとしてゐる。そして此の傾向および其の結果が、米國にて特に著しきは何人も偶目するを逸しないところであらう。かくて、カッセルは、この傾向を指して、二十世紀中ひき續き進行するものと斷説するのである。

一一一

かく、二十世紀にも引きつづき進行するものと論定されたる此の景氣循環の一期間の時間的短縮化の傾向は、そのうえ更に、金利的または信用的統制が有力なるを加へ、金融の組織または制度が改善せられたるため、景氣不景氣間の強度の幅に就いても著しく狭められた。すなはち、景氣運動における有らゆる飛躍的不規則性が殆んど消滅して、謂はば豫想さるべき比較的平靜なる韻律的規則性 *soğ. n. rhythmische Gesetzmässigkeit des Zyklus* が其れに代つたのである。そこで、おのづから前節の談に引續く其の二としての、景氣循環に對して利率の保有する制働機的作用の瞥見へと吾人は導かれるのである。

かの統制されざる信用の濫授や、國家官憲の強壓のもとに行はれたる銀行券または政府紙幣の濫増發や、さては不健全銀行業者または投機業者の破綻の必然的結末として惹起されたる、病の上景氣より急轉して不景氣の奈落へと云ふがごときの、劇的事件經驗に到りては、歐洲大戰のために近く關係諸國民の嘗めたるものを除いては、もはや十九世紀後四分三以降の世界の經濟界にとつて忘れられたロオマンヌとはなつた。さすがの米

國にありてすら、この種の狂燥痛烈な景氣運動は、一九一四年の聯邦準備銀行法の施行このかた迹をたつたので、ただ其處にては、景氣交代事象の花形をなすところの生産財の生産の夥しきことや、後述さるべき農産物の豊凶が有力なる別働隊となりて、景氣運動に參加することや、生産財の施工設備における迅速なる完成期間および眼まぐるしき其の更新改良擴張などの事情あるために、景氣不景氣の交代が、巨大なる弾力性を把持して小刻みに従うて敏活に往來するの特色を示すのにとどまる。

かやうにして吾人は近代景氣理論としては、偏へに謂はゆる純經濟的景氣循環のみを對象たらしめて足りる事となるのであるが、さて此の純粹經濟的または内生的運動にあつても、貸出利率は景氣交代に對して明確なる一定の作用を及ぼすので、爲めに利率の高低が、少くとも外觀上、専ら同變化を惹き起す原動力たるやに思惟されるのは否なみ得ない。上述せるがやうに、沈靜期においては利率低廉なるため、採算上おのづから、巨大なる資金と長き完成期とを要する生産財の生産に關する事業の發起および擴張が、頻りに助長せられるとともに、其の反對に、漸く好景氣の阪をのぼりゆくに従うて利率、必然高まるため、其れはおのづと起業擴張に對抗するところの、制働機的作用を發揮しはじめるので

P30 Hahn 何 景氣如何

ある。これと反對に、景氣の上昇または下降がまづ能働して利率の高さを決定すること
も在りうるが、(例へば、上景氣の頂きに現はれる投機熱勃興の時、または歐洲大戰後の兩三年間
に見られた物價殊に原料品價格の狂騰息まざる時には、その一般的物價高の割合の以下にてな
らば如何なる高利率を支拂うても尙ほ収益しえたる如きである)然し、綜すれば、利率が先づ主
働の地位にたちて以つて景氣循環の内的生命を嚮導する方が、遙かに有力でもあり又た
正常的でもあるのは疑ひない。

さて借入資本の利率の有する作用を斯く語りくるならば、人あるひは、然かほどの巨資
と長期とを要する事業の着手に際しては、當事者にして唯だ其の計畫の初めにあたりて、
豫じめ所要資金の全部をだに、其の初期に唱へられたる低利もて調達しおく限り、この問
題は自解されるのではないかと問はれるでもあらう。が、かかる疑問にして若し提出さ
れたとするならば、其は株式會社の軌近經營の中心を理解せず、また社會資本の本質を把
握しないところから起れるものに過ぎないであらう。しかし、個々の企業にとつては、そ
の調達方法が、株式全額の拂込み、又は十分なる社債の發行、その他いづれの道に據れ、所要
豫算額の全部を豫じめ調達しおく如きは、たとひ採算的經濟的には可能ならずとも、技術

的には尙ほ可能である。しかも、個々の企業の觀點よりしても、將來事業の進行するにつ
れて物價一般の騰貴し來る場合には、資金は必然缺乏するであらうし、況んや、然かり況ん
や、企業界總體が悉く此の種の方策に出づるときに到つては、全然不可能事に屬する。
けだし、其は、カッセル「主著」を一貫してゐる主張の一つ——それは、經濟生活の無限連續性
を言ひ換へたるものに外ならないが——の説くところの如く、「資本一般、すなはち今日必
要とする資本は、常に今日の社會的所得よりして引出し來られぬばならない」からである。
かくして皮相的には可能であり、しかして果して可能ならば、景氣運動は其の循環を或る
程度まで停止し得るであらうところの、この將來に要する資本全部を豫じめ低利率時代
に用意しておくこと云ふごとき事は、國民經濟的に考へては、全く問題たり得ないのであ
る。設例は多少異なるけれども、其は、近時ヘンリー・フォオドの資産二十億弗を傳 たる
米國の記事が、筆を興味的に脱線せしめて、だから、フォオドにして若し欲するならば、米國
最重要の四大企業、ユウ・エス・スチール、アナコンダ、スタンダード、インタアナショナル・ハー
ヴェスタアの全部を買収し得る旨を説きたる事が、經濟生活の見地から問題にならない
のに類すると思ふ。何とならば、フォオド自からの事業が依然社會的に有用なる限り、右

の買収の實行に際しては、フオオドの事業を引受けるため同額の株式社債が當代米國蓄積資本に向うて募集せられねばならず、この結果必ずや其の長期利率を著しく昂騰せしめずしては已まないものであつて、斯かるごときは、箇人的經營よりのみでなく國民經濟上よりも等しく不能事であるからである。言ひかふれば、利率と關係なく營み得られる限界は、フオオドみづからの事業に投下せられをらざる彼れの預金の運用、または單純なる企業支配の交換に限りられるであらう。それは暫く措き、ここに看過すべからざるは、利率の高さは、畢竟景氣運動の制働機的作用を演ずるに過ぎぬのであつて、固とより、その本質でもなく、又た原因でもないことである。

いま利率の作用を語りたる序でに、其れに類するものとして景氣運動の方向決定につき投機取引の力を數へるところの、考への當否を瞥見せねばならぬ。すなはち、景氣交代の本質的なる要素をなすものの如くに時に思料せられる投機殊に株式投機取引の眞の地位は、いかなものであるか、が此れである。その内在的生活力によつて、おのづから上向かうとしてゐる景氣時際に、更らに投機的作用するところの、重要な役割に至つては、むろん看過するを得ない。が、さらに根本に溯り考へれば、投機取引殊に株式市場における

投機取引一般は、その常軌を逸せるものを除いては畢竟、主にも固定資本に對する社會的總需要の増進を見越し、以つて之を利用せんとする營利的な且つ合理的な意欲の表現——然り單なる現はれに外ならない。故に、投機界の諸作用諸活動といふものは、凡そ、企業界における進歩せんとする意思欲の投影以上のものではなく、従うて今ま尋ねてゐる景氣の長期的趨嚮 *secular trend* を決定する力を有するものでは、斷然あり得ないのである。けれども勿論、利率のみが景氣循環運動のブレクたるものではなく、ほぼ同様の勢力には、諸原料の騰貴もあり、勞働力殊に生産財生産に従ふ勞働力の價格の昂騰もかぞへられる。で、其れが、景氣運動における此の二理論家の論證の歸結の、其の三。と看做されたのは、當然であると思ふ。さて斯かるとき、諸原料殊に生産財生産の原料の價格が概ね、消費財一般のに超えて昂騰するのは、物價指數の明徴するところで、今さら異見を容れる餘地がない。が、ついで勞銀の増加の又た景氣運動方向の轉換に關係を有するのは、常識の談に屬するとはいへ、然し其の實質賃銀そのものが景氣交代の行程において果して如何なる關係を有するやは、必らずしも確定し得られたところでなく、諸家見解のまた、別たれてゐるところである。すなはち、シュピートホッフは、少なくとも生産手段に關與する諸産

業部門については、景氣上進とともに名義的のは固よりとし、實質賃銀そのものの増進をも認める。然るにカツセルに到りては、その行程の半ば以後に消費財價格の騰貴の發現して貨幣賃銀増加の効果を減殺するの故をもちて、賃銀向上に關する一般的確認の可能性を拒否して居るのである。この點、私はカツセルのよりはシュビートホッフの見解を正だしいものと見るのみでなく、將來その益ます然るべき事をすら豫見しようとする。何故とならば、生産財の價格騰貴よりも遙かに敏感であるのみでなく、そこには更らに勞働組合殊に生産手段一般に關係する勞働組合のより、一層完たく組織せられ居るため、かく鋭敏に高まり來れる其の生産財の騰貴、從うて其の事業の齎らす増進せる利潤に對しては、可なり速かに強よく要求し參加し來るべきことが、明瞭であるからである。そして斯くして、實質賃銀の上進は、かく運動し來つたる景氣の方向を逆轉せしめる一契機として作用らくものなのである。

シュカ二氏の見解には、もう一つ、重要な相異が見いだされる。其れは、農業一般に對して、工業上の景氣運動が如何なる關係を保有するか、の問題である。シュビートホッフが

此の點、極めて慎重なる論態をとり、寧ろ依存關係の存在を認めようとするに對して、カツセルは農業がその性質上かの工業的なる景氣循環運動の圏外に立つものである所以を明確に論斷する。

私はカツセルの此の思考、すなはち見方によりては、工農業勞働者間には、否なより、廣く都會人口農村人口間には、共通的なる利害關係存在せずと言ふ義にも解し得られるところの、此の思惟において、敢えてマルキシズム克服者の闘士に自任する、同氏の社會思想の片鱗を見たり、と爲すものでない。いな却つて、近代景氣交代が工業的景氣循環であり、さらにより、狭く生産財生産高の消長によつて表徴される進化的動態的運動であると爲すところの、其の根本的主張より導かれたる、論理の徹底さを鑑賞しようとするものである。けれども姑らく視野を、カツセル自からの思想系行のみに限りて考察するとも尙ほ、幾らかの矛盾あるを發見せざるを得ない。彼れは半ば正當にも先きに、農業勞働者をば工業一般殊には生産財生産部門の要する産業豫備軍であるとし、農村一般をば好景氣に際して都會の生産手段工業の徵發すべき豫備軍の貯藏所であると爲したからである。かくて彼れの勞銀の稀少性理論に従へば、農業勞働者數の、從うてその勞銀高の、工業的景

氣運動の昇降によりて影響せらるべき事を明かに認めただからである。況んや米國のごとく、農業上の豊凶が可なり深刻に工業むしろ廣く産業一斑の景氣運動を左右し、その收穫高より、正だしく言ひては其の所得高における増減が可なり鋭敏に銑鐵鋼鐵に對する需要を消長せしめる場合にありては殊に然りと考へられる。ただし退いて考へれば、英獨兩國ごとき近代的産業生活の發展せる階段にありては、工業的景氣交代が農業に影響することの愈いよ微弱たるべきと同時に、更らに又、上記の米國の例のごときは謂はゆる季節的景氣變化であつて、此所に目指すところの長期的景氣傾向には關はるところがない、とも論じ得られるであらう。けれども、二者關係の存在を全たく否認するは、餘り過ぎたる獨斷であらう。

一三

吾人は今や、二權威の展開しきたれる理論的辯證および事實的實證をたどりて、景氣理論の頂きの一つを眺めると共に、經濟生活における此の動態運動の不可避的必然なる旨を知つた。すなはち、凡そ消費財の對するものとしての生産財の生産に、又は之を主材

料とする設備に、充用せらるべき投下資本額の絶えざる膨脹が必然性を帯びてゐるとともに、好景氣の中心的現象である事。並びにかかる好景氣に向うての歩調に對して拍車を加へるものが不景氣の時際における低廉な利子であるとともに、一度び到達したる上景氣を轉換せしめるものが亦おのづと高まり來る利率および勞銀に外ならぬ事を、知つたのである。そして右の理義が、英獨米等の産業的先進國における景氣現象を解明するものであるとともに、上來くはへ來れる多少の修正ないし批判を経過するによつて、我が國における景氣運動をも大凡そ説明するに堪ふることを、私は信するのである。ただし今、既述した文献を回顧するならば、かかる理論殊にカツセルの到達したる歸結が、實はバラフウスキイ及びシュピートホッフの見解に類するを見いださざるを得ない。すなはち、バ氏の解する、もろもろの各異生産部門の進歩發達における不比例性の考へ、更らには又シュピートホッフの説く、再生産的消費財および直接的消費料の生産發達のおのが固有する速度における必然的、不同調性の認識とに對して、右のカツセルの見解は、ほぼ共通の意思のうゑに立てるものたるを見いだすのである。

然るに、たとひ斯く、固定資本生産高の激増および利率の急騰貴において、おのおの好景氣に向うての中心的現象および上景氣に對抗する制働機的任務を見たりとするも、右は未だ、景氣不景氣に對する眞實の、根本的の、原因を示せるものではない。そもそもカツセルの言ふ、固定資本は好景氣に際しても拂底してゐるのだから、之が生産は多々ますます辨すべきであるとは、必ずしも眞實をうがてるものではないけれども、然しながら生産財の過剰生産のみにては未だ、生産者と消産者と、また企業者と資本家との連繫されてゐる流通の鎖が全般的に中斷される理由とはなり得ないのである。然らば、その波頭において急激に景氣くづれおち、突如として恐慌少くとも不景氣の海底に沈降せしめるところの、根本的原因は、そもそも何う説かるべきであるか。

この點につき、世相の表皮をみて、金融業者側における極度の貸出引締とか、企業家側における資金調達能力の缺乏とか、ないし商品一般の販賣性の減却とかいふごとき概念を掲げるのは、從來ひろく行はれた所であるが、此れらは勿論本質の深かみを捉へたるものでなく、そして私は左に引かうとする、カツセルの歸結の語において、最も正鵠を得たる解答を見うるものと思ふ。(Giesel, n. n. O., S. 380.) 「これが正しき答は斯うである。典型的な

る近代の好景氣なるものは、過剰生産を意味するのではなく、又た固定資本用役一般に對する消費者の有效的需要若くは一般社會の欲望の強度を過大に評定したためでもない。が、しかし、それは確かに、資本の供給の過大な見積り *eine Ueberschaetzung des Kapitalangebots* 言ひ換へれば、生産された眞資本の引受け又は買入れに充用し得らるべき蓄積資本の數量の過大な見越し *eine Ueberschaetzung der Menge der Sparmittel* を意味するものである」と。ここに謂ふ蓄積資本とは、寧ろ、投下し運用し得らるべき社會的資本または國富力の一部分とか、ないしは總所得または國民所得とか云ふ概念もて置きかへるはうが、より適切であるを思はしめられるのであるが、然し、カ氏の此の考へ自體に至つては、綜じて眞相に迫れるものである。で、この見解によれば、言ふまでもなく、景氣轉換の眞原因、また眞原動力は將來にわたりて實現さるべき資金供給の數量と條件とに對する見積り過ぎ又は樂觀に存することとなり、而して、世相に直接現はれる過剰生産なり將た過少消費にいたりては、ただ、此れを反映する假現に過ぎないことになる。しかして、數年後に跨りて資本需要の現實的數量の次ぎつぎに展開し増大し來るものに對應するところの、社會の資本供給能力をば、極めてしばしば過大に見積らしめる理由は、既述せるやうに、固定資本の生産又

は設備の完成が概ね、起業數年後の將來に屬するものだ、と云ふ特質に内在してゐるのである。そして右の理義がカ氏の稀少性の原則に照應するものであるのは論ない。

さりながら、かかる理義の提唱は必ずしもカツセルをもつて創められたところではなく、否、之より先き、シュビートホッフは明らかに「好景氣に際して急激に増大しきたるところの、此の再生産的消費財即ち生産財の生産に對する限界は、單とり社會的需要をもつて割せられるのみでなく、尙ほ實に、この固定資本に充用さるべき其の當代の現存資本額によりて制限されるのである」と説いてゐる。(Eine Grenze…… ist jedoch nicht nur durch die Bedürfnisse gesetzt, sondern auch durch das zur Verfügung stehende Kapital…… Sjiethoff.) 更らにリイフマンも、つとに一九一二年「貯蓄と資本形成の理論」の論策中で、興味ある新觀察を恐慌問題に加へ、同問題の藏する最深奥の根本的基礎をば「斷えざる技術的發達の影響のもとに、私經濟的收利性と國民經濟的に合目的なる資本形成度との間に生ずる不適合性」(die Inkongruenz zwischen von privatwirtschaftlicher Rentabilität und dem volkswirtschaftlich zweckmaessigen Grade der Kapitalbildung unter dem Einfluss dauerhafter technischen Fortschritte……, Liefmann.) と云ふ事實において探究したのである。そして右のリイフマンの考

へが、カツセルの、企業家の必ず陥るべき將來的資本形成度はた融通度に對する誇大なる錯覺性でふ思考と、想脈を通じてゐる事は疑ひがない。因みに、この右の言葉は近く、その「國民經濟學原理」にありても、そのまま採録せられてゐるところであり、従うて其がリ氏の根本思想の一つであることは明かである。(Liefmann, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, II Band, X. Teil, 3. Kapitel, S. 760.)

一四

しかも斯かるごときを以つてして、尙ほ私は、主題の根本的原因を闡明せるものとしては依然、カツセルの業績を、シュビートホッフやリイフマンのを超えて高揚せんとする意欲を禁じ得ないものである。何故であるか。

それは決して單とり、カツセルの解釋の、他の諸家よりも周到明暢である爲めではない。カツセルは夙くに、その事實上の處女作「利子の性質および其の必要」において、資本の充用に對し利子の有する普遍妥當なる自動的調節機能の妙諦を詳論するところあつたのであるが、後日これを、その主著における靜態的經濟理論を貫流する根本思想たる稀少性

原理とあざなはせ、以つて利率騰落が作用するところの重要意義を演繹し來つた。ところが、今や、同じ主著の全三分の一を占める主題動的經濟理論を、檢覈するに及びても又た、この同一原理、すなはち利子および資本の理論の展開に極めて妥當するところの稀少性原則を提示してもつて、之が理論的總歸結を與へようとしてゐるのである。わたくしが故らにカッセルをたふとばふとするは、理論および論理における實に驚くべき、此の徹底さ首尾一貫さの存在するが故に外ならない。

さて顧みれば、本文における私が、その思想の系行および内容をシュピートホッフ、ロエヴエ、カッセル、殊にカ氏に負うてゐることは、殊さらに言ふべくば餘りに顯著なるものがあつた。よつて、ここに、景氣理論の考察を了へついで、景氣政策を極めて手短かに瞥見して筆を洗はんとするの今にして、——しかり、カッセルにおいては、景氣政策は殆んど觸れられをらず、従うて彼れの思想は其處にては顧みられること多くない——カッセル著作の此の部分の有する貴重な意義を陳べるのは、愉快な義務でもあるし、また適當な場所でもあり得るであらうと思ふ。

しかり、カッセル行論の方法ないし内容には、然かく驚嘆すべき獨創さ斬新さは閃いてゐない。しばらく本文中に記されたる管見について見るも、その理論討究にあたりて、方法には統計的歸納的に據り、觀照の態度には動態的を重んじ、さらに原因働因については、經濟生活の内生的考察を施せるものは、決してカッセルにかぎられたものでなく、否な必ずしも少しとしない獨逸諸家の凡そ等しく採れるところなのである。従うてカッセルが其の二種論著において、自畫自賛したる斯論の創唱性の高調に到つては、世上その大語に眉をひそめる人々も少くないであらうし、否な、卒直にいうて私自身もその一人であつたのである。

しかも尙ほ、その論著、しかり此の景氣理論を内包容せる其の論著が、特にあふがねばならぬ一點がある。短く言へば、この經濟循環運動論をば、其の當然値ひする地位にすゑて、その理論的社會經濟學言ふまでもなく、此れは其の主著の題名である(の統一ある全體系を集大成したる事が、其れである。すなはち、極めて包括的なる其の經濟學論著全部を二大部に縦斷して、靜態的部分および動態的部分となし、前三編——嚴格に言へば貨幣理論編を除ける、總論および價格構成理論の二編——の考察を全靜態的に又は純理論的に

取扱へるとともにこの最終篇景氣運動理論の研究をば純動的に現實社會的に又た國民經濟的に處理し討究したるのみでなく——そのおのこの領域の性質上斯く此所に採られたる對立的な方法は全然正だしい——右の二大部分は既知せられたる統一的根本思想にて一貫され全體系化され居るのである。そして是れ景氣運動が現代經濟生活に對して占めてゐる偉いなる全局的なる重要性を其のまま自からの論考の上にて實證したものでなくて何であらう。また是れ本文首めに引用したところのポエム・バヴェルクの會つて經濟學中への景氣理論の體系的組織化を翹望したる其の理想をば實踐に移したものでなくて何であらう。かくてこのカッセルの體系および方法は經濟生活の統一的理論化のために今後ながくわれわれに強よき示唆を與へるものであらねばならないと確く思ふ。

(天正十五年七月。)

第二篇 景氣政策の一斑

- 一、マルクス主義視角の轉換による景氣政策の可能性と全社會化の下にても尙ほ景氣循環の必然性の持續する所以
- 二、景氣昇降が社會思想社會運動によりても影響せられる旨の論せられたる世相一面
- 三、景氣政策の廣汎並びに景氣政策としての當來事象の觀察および企業の聯合合同による過超資本化防止力の限界
- 四、景氣運動の制働機としての貨幣創減政策・金融的統制政策および外國爲替政策
- 五、をはりに景氣運動の成果結末に對する國家政策としての社會政策的租稅政策

一

問ふ。——景氣運動における平靜なる推移均衡を招來するを指標するところの景氣政策は、そもそも可能であるか。おもふに、景氣の現象本質原因および其の制働的作用の保持者に關する「理論」にして、明確に闡明せられたる以上、その研究對象に對する達觀的な又た權宜的な政策は、おのづから存在すべき筈である。ただし、この場合には、景氣循環の有つ必然性なるものの解釋の如何によつて、政策の有無、少くとも其の有効の限界が、おのづから異なつて來る。よりにて、吾人は此れよりして説き入ることであらう。

その先づ説き越えらるべき障碍とは、マルクス理論——修正派——一般經濟學理論と、その異なるにつれて、景氣運動が結局何を意味するか、の視野の角度に關するものである。ひとしく景氣變化が經濟生活における不可避的な必然に屬するてふ理義の把握より出發しても、それが現存經濟組織の崩壞に結末せしめる契機を爲すのであるか、將たその發達の表徴たるとともに、其の進化に歸趨する道程たるのであるかの、異なる見解にかかは

るものである。この異なる視角の由來するのは、其の各思想者の社會生活經濟生活に對して把持してゐる世界觀の相異によるけれども、然し其のあひだ、現實の觀照と認識より得られるべき客觀的に妥當な批判の資料は、別に存在せねばならぬものと思はれる。實にマルクス資本論第三卷第一冊における主題資本主義生産方法の全部的崩壞の辯證は、頗る多岐にわたれるものである。けれども、之を要するに、社會の總資本に對應せられて比較的ますます過少となり來れる被搾取者たる勞働者の員數と、其れ及び其の他の事由より生ずる低下やまざる平均利潤率との根據より下されたとともに、この低下利潤を補ふ目的より又た其の他の動機より生ずる深刻なる過剰生産と不景氣つづいて慘烈なる恐慌と云ふ、次ぎつぎの前提よりして施されたものである。景氣循環の斯かる結末にして若し、鐵のごとき必然性をもつて作用する不可避な傾向であるとしたらば、自然科學的必然に對して方策なきがやうに、景氣政策を云爲するも、それは殆んど何らの意味をなし得ないであらう。然るに、かかる過剰生産および不景氣は十九世紀末以來會つて痛烈激甚になり來つたる事なく、従うて不景氣なる事實現象より延き來るものとしての謂はゆる崩壞の落下するなき事は、既に實證せられたるものと斷説して妨げない。

このごときは敢えて吾人の陳辯をまつまでもなく、ベルンシュタインが夙に明かに認證してゐるところである。いな現に、社會主義の現實態であるところの、諸生産手段および用役の全般的な社會化、または國有國營化 *Sozialisierung, Vergesellschaftung oder Vollverstaatlichung* の状態、即ち共同經濟態が、果して、景氣運動の奔流の激成を絶滅し得べきや否やの問題に對しては、その試練の若干相を目標しつつも尙ほ、リイフマン、ポレ、カツセルらの否認してゐる所なのである。「社會化」そのものに關説するは、たとひ其が時代の問題なりとて此所は場所柄でない、今は唯だアモンに従うて、「社會化」とは、勞働を資本の支配より解放するため、生産手段の處分權を變更して之を個人の私有より社會總體に移すことをいふ」と定言しおくとどめる。しからば、全般的社會化が主義としてはマルクス主義の適用より成ることは多言を須ひないであらうし、之がまた、多數經濟學者の拒否する所以でもある。また事實上かかる試練中、獨逸加里工業社會化の短期間の經驗に徴するも、その期待したる生産調節は容易すからず、過剰資本化は避けるに由なかつたのである。(Liefmann, Geschichte u. Kritik des Sozialismus, 1922, 7. Kap. 1.)

しかも、其れは寧ろ當然なので、社會的生產を驅りて固定資本の生産増加に偏倚せしめ

る傾向は、必ずしも單とり箇人の又は箇々の經濟主體の營利的衝動の作用のみよりではなく、既述せるごとく近代の固定資本そのもの、の本質にも深く潜在してゐるが故である。かくの如くにして、全般的社會化または完全社會化（然り、それは *Vollsozialisierung* である。部分的社會化 *Teilsocialisierung* に至りては事實上あらゆる文明國で見られるところなので、其は本質的なる經濟秩序の變革ではありえない）の實現された他日の社會にあつても、此の生産財生産の本質の存する限り、また進歩せんとする意思の續く限り、さらには人口増加の進む限り、さらには又、同一人口がより、多くの文化財または享樂財を欲する限りにおいて、この景氣循環運動は實に、社會秩序の如何ん、況んや經濟秩序の如何んを超えての必然性を有つものなのである。それは實は當然のところであらう。何故となれば、社會化は、ブレンゲの夙くに解したとほり、少くも生産に關しては組織の問題たるにとどまり、そして本質の問題ではないからである。

二

しかし、それと同時に、適當なる範圍内にて進退する限りにおいて、景氣變動は如何なる

場合にありても、革命に終局するの必然性を意味するものでなく、ただ進化發展への道程として韻律的に繰り返へされるといふ必然性を有つものである。そもそも現實の景氣循環の必然性をば、この意味に解すればこそ、經濟政策の力によつて之を平調ならしめも得られるので、其處に、景氣の内的生命に従ふ運動に放任する代りに之を統制しようとする景氣安定政策または景氣政策 *Politik der Konjunkturstabilisierung, Konjunkturpolitik* の存在理由が生れてくる譯けである。

序でながら一言すべき事がある。それは敢えて景氣政策に俟つまでもなく、輓近經濟生活には景氣運動に對する自己整調的要素が内生しきたり、爲めに平常時の關する限り、また經濟力の充實し居れる限り、その循環期間は短縮せられて長くも四五年を超える沈滞期のなかるべきと共に、景氣不景氣の頂上または奈落にも異常の騰落を現はさざるべしとは、既述したところであるが、然るに、此の傾向に幾らかの修正を加へるとき、ドヴォルフの興味ある研究を瞥見しおかねばならない事である。すなはち、ドヴォルフは、一八七〇年ないし一九一三年の長期間に生滅した、幾たびかの循環の總體を通覽すれば、そこに各時代に流れてゐた時代相時代精神との關かはりの存在せるのが、看取されると説く。そ

れに従へば、まづ一八七三年ないし一八九五年間の、総じては景氣上の退潮期ともいふべき時代には、明かに革命的社會思想および帝國主義的軍國主義的精神がばうばうしてゐた。其れに對立して、一八九六年ないし一九一三年の世界的景氣滿潮時代にわたりては、修正派社會主義思想および非鬭争的勞働運動が世表に顯現し來つたのである。然るに、世界戰爭發生の年には、實に、世界的に觀て新たな退潮時代がはじまらうとしてゐた。かくして既に破壊された經濟生活の再建設といふ偶發的障礙もある事であるし、旁々世界の景氣はおのづから從來よりも一層ながき引き潮どきを經驗せねばならぬであらうと云ふのである。これには若干の附會もあり無論精確なる理義でもないけれども、然し確かに、本邦近時の論客殊に猪進的な景氣贊仰者に對して或る暗示を供與するものであるとともに、社會的運動に當る或る人々にとつても反省の資料を投ずるものであらねばならぬ。とまれ、そは徒らに反動思想の一言説として拒けらるべきでないものと思ふ。

三

然かり、景氣運動のセキユラア・トレンドには周期的なる一高一低また一高といふこと

き平靜な循環が豫想されるのであるが、かかる波長の幅狭く波高の低い輓近景氣運動においてすら、能ふ限り其れに緩徐たる一定の韻律性を保たしめるために、謂はゆる景氣政策が在るのである。が、同政策の範圍は非常に廣汎で、それは正しくロエヴェの言へるとく、十九世紀の始めこのかた有らゆる近代文化國の經濟政策は大いなる程度において常に景氣政策なのであつたのである。

まことに直接的には、國營または民營にかかる鐵道海運の運賃政策または同認可政策、國營大工場における販賣また製造政策、中央銀行の發行ないし割引政策よりして、間接的には、租稅政策ことに輓近の風潮たる間接稅減廢に伴ふ直接稅擴充政策、公債政策ことに内外債決定の政策、勞銀政策、小住宅公營政策、失業防止又は緩和政策、勞働保險政策、小作政策、人口調節政策、國內勞働力移動政策、移殖民政策、日常品配給政策、さらには食糧政策ことに産米增收または開拓政策にいたるまで、實に其の、一つとして、景氣運動の方向強度によりて、或ひは影響し、或ひは影響せられざるものが無いであらう。觀來れば、近代景氣政策は宛がら經濟厚生社會政策と共擴がり、にすら見えるのである。よりて此所に關說せられるのは、勿論ただ總括的なる景氣政策の一斑に限定せられることである。

まづ、經濟生活の最奥の流れには、社會生産一般を驅りて固定資本の生産の増加に偏倚させ過ぎる蓋然性むしろ必然性があり、しかも遞増してきたる此の増産額を結局引きうけるべき社會的實力は必然的に其の當時當年の總國民所得より引出されるものに限られるのであるから、周期的には當然賣られざる商品が投げ出される譯けである。すなはち抽象資本がわより眺めれば、ユウバアカピタリザチオンよりデカピタリザチオンへの行程が強制される筈である（ブウニアティアン）。だから第一に一方かの社會的進歩の源泉を枯渴せしめることなくして、他方一國生産能力における浪費を防止すべくんば、企業當事者は常に市場趨勢の將來を察知すべき資料を有せねばならぬ筈であるが、然るに巷間の人々にとりては普通、その時の時の利率および物價の狀勢以外この資本市場および商品市場の狀況を判断すべき材料がないのである。かくて達觀的なる企業家は凡そ斯かる資料材料をば成るべく長期間にまた能ふかぎり世界的にわたりて蒐集せねばならぬのみでなく、その種類は單に物價および利率に關する指數統計に限られず、更らに生産數量の指數統計 *Produktions- oder Mengenindizes, Produktions- oder Mengenstatistik* を調製し觀

察せねばならぬ。そして其れが純粹バロメータ問題に關聯してきたるのは言を俟たぬところである。

豫測を困難ならしめる原因の一つは、其れが然かく本質的なるものでないにしても、現存企業界一般が統制されたものでなく、リイフマンの力説するとき私的収益追求の努力が單に交換流通を組織する最有力な原理たるの一結果、寧ろ謂はゆる生産上の無政府狀態に放任せられるものだ、といふ點に横たはる。かくして、この現存の社會經濟秩序の範圍内にて可及的に生産販賣上の平衡狀態が促進されねばならず、しかして其れには企業の大經營化または聯合化が促進されねばならぬと云ふ事が、景氣政策の第二の考察となつてくるのである。すなはち、一方技術上經營上の必要に驅られて大規模經營に歸趨するとともに、他方流通生活における平衡を指標して同種企業家を一團とする聯合化が策されねばならぬ事である。言ひかへれば、その將來一度びは生成すべきところの必然性を加速度せしめてまで、英米流のトラスティイケーションと併んで、獨逸流のカルテル、シリリングを行はしめるを要する事である。しかして是れら同一部門のカルテルは、單に生産額販賣價等の協定にとどめず、むしろ生産技術の進歩に留意しつつも

之と同時に既に生産設備に投下せられたる舊るき資本の償却せられるよりも一層速かには全然たる新設備を擅まには採用せず、以つて過度の過超資本化を豫防するとき協定を爲さねばならないであらう。

尤も景氣政策の一として、カルテル政策が如何ほど作用するか、即ち其の目標とする工業的生産の組織化が不景氣の襲來に對して如何ほど有力なる安全瓣たり得るかの評價にいたつては、諸家の見解は必ずしも歸一してゐない。が、一八八九年におけるブレンタノの有名なる研究、また概ね其の歸結をブ氏と同じうするリイフマンの論攻において展開されたる肯定的樂觀的態度は、近くり氏自から及びデイイル及びフォオゲルによつて、より徹底的に強調されてゐる。この點について回想せらるべきものは、最近傳へられたる、歐洲銑鐵鋼鐵業總聯盟の企てであらう。但だ思ふに、國際的聯合化の成らず、そして例へば米國より出動すべきダムピング等の存在のために未だ國際的利害共通を擧げ得ざる限り、世界市場にわたる景氣の安定化ないし平衡化に向うてカルテルの寄與するところの、完全でないのは明らかである。けれども同時に、それが内國市場の平調化に向うてより強く作用するのは、より明白である。そして、一般企業の聯合化に關連して、銀行業者

の聯合さらに進みて合同に出でる事の、景氣政策のみより眺めても、少くとも消極的景氣安定に寄與するものとして尙ほ、極めて望まじきものであることは論を俟たない。

四

第三に擧げると雖も景氣政策の最重要なる部分が、合理的なる貨幣政策、中央銀行割引政策、金融市場に對する中央銀行の統制政策に存するは、異議なきところと思ふ。まづ、其の大部分貨幣原料となる世界の金地金の産出額における變動は、ゾムバルトの所見に反して、景氣運動に影響するところ尠ないのであるが、併し同時に純粹貨幣の創造消滅に至つては、明かに景氣昇降に關係を有つ。ところで、景氣變動を平調ならしめる貨幣創造政策は何ぞやとは、ここにては廣汎に過ぎる問題であるが、この點について私は、ベンディクセンの完全貨幣クラシツシエス、ゲルドの創造消滅の理論をもつて最も理想的なるものと考へざるを得ない。ついで、かの外國貿易が經濟生活上きはめて優越的地位を有する英國及び固定資本原料の大部分を海外より仰ぐ本邦ごときの場合にあつては、外國爲替相場における安定の、景氣政策に關係する強度には甚だ偉きものが存する。然るに、爲替安定の要諦をなす

ものが共に強大なる輸出入の均衡か、又は金の自由輸出入かに在るのは、既に常識の談に屬する。で、この點より觀て、今やすでに西歐米諸國に約束されてゐる古典的な金本位への復歸は第二義的重要のものだとするも、少くとも金本位的運用、即ち外國爲替手形賣買方策と手を携へたる上に、ての金の自由輸出入は、單に景氣政策より考へるとも尙ほ、重要な一前提をなすものであらねばならぬ。

が、ひるがへりて直接的なる貨幣政策および金自由市場政策にも遙かに超えて、景氣調節に對して最も重要なものは、實に、中央銀行の施す割引政策、および其れの作用するところの一般金融市場統制政策に外ならないのである。この關係において中央銀行の營む割引政策なるものは、決して單に金融市場、否、同市場をとほして企業界、殊に生産財生産部門に對して掲げらるべきシグナルたる役務を遂行するにとどまらぬので、其れは實に、周期的好景氣の過重壓力に向うて對抗するに堪ふるところの、無類に有力なる安全瓣たるものである。かの、既に一度び恐慌の奔流をして岩をかましめるに到つたる上にては、むかしパデオットの道破せる如く、ますます高かるべき利率を能く負擔せんとする事業には極めて自由に貸し出すことを要するけれども、此所まで、事を押し進めてしまふ

たのでは、寧ろ甚だ手遅れたるものと言はざるを得ない。すなはち景氣政策の常道としては、銀行業者の活眼底一度び、物價および生産の統計ないし曲線の鋭く上はむかんとするを見いだすや否や、銀行利率を引きあげ、そして舊獨逸帝國銀行のごとくに若し其を好まざる場合には、少くとも他の何らかの間接的手段によりて金融を引きしめ、以つて市場利率をして警戒線上に引きあげしめる所があらねばならぬ。

そして、斯かる中央銀行の擔當すべき金融統制の業を完うせしめるべくば、本邦現時の中央銀行、一般銀行間に見られるごとき弛るき關係に放置せらるべきでなく、必ずや英國金融市場に存在するもののごとき、鞏き連帶關係が生成し來らねばならぬ。近く催されてゐる我が金融制度調査會も、此の點を看過してゐるもののごとくであるから、今その一斑を短語しように、其れには、必ずや一方、一般銀行の定期拂預金利率を中央銀行貸出利率の一分五厘引き、又た輸出手形期限前支拂の割戻料を同貸出利率の一分引き、たらしめるごとき英國的慣例を生成せしめるとも、他方、中央銀行の手形再割引には一層の門戸を開き、且つ其の利率を他種貸出利率よりも廉からしめ、あひ俟つて中央銀行の市場統制力をより、有力ならしめねばならぬのである。そは兎もあれ、斯くの如きは、有らゆる資本主

義諸國を通じて大戦前の英國ごとき純粋金本位の運用され居れる場合には、單に中央銀行金準備高における消長去來の注視のみをもつて、足りた事であらう。が、その然らざる場合にありては、この規則的に自働増減する金準備の厚薄化のほか、尙ほ指數統計殊に内外物價指數の比較的計表を藉り、以つて適切なる割引政策が運用されねばならぬ。この點本邦從來の偏重商主義的信用政策を否とした福田博士の見解は正だしい。

さて凡そ上述せるごとき諸政策のよく運用される所、既に今日の發展階段にまで進み進みて、其の景氣運動の大いに平調化されたる近代經濟生活には、更らに一般價格の安定化、生活の安定化即ち靜的進化 *Preisfahilisierung, Lebensstabilisierung* が實現されるに相異なく、そして其の故ゑに、飛躍的ならざれども堅實なる進化發達は必然、將來の經濟生活に約束され來たる事であらう。

五

しかも尙ほ顧みれば、シュタテイシレンされたる經濟生活にありても、其の生活自體は依然ダイナミツシユなのであるから、景氣運動もまた、經濟秩序ないし組織の如何んを

超越して、永劫に循環し進化して息むところが在り得ない。そして然る以上、そこに景氣政策以上の、或る國家政策の對象が生じてくる。すなはち、私有財産と契約自由を基調とする現存社會生活においては、その基礎を自己の勞働におかざる所得と財産、短言すれば不勞所得と財産上の不勞増加 *Arbeitslose Einkommen und unverdiente Wertzuwachs* は、かく不斷に、又た好景氣の上り阪や投機熱高潮時にありては、殊に、將來ともながく張目せらるべき社會現象たり、流通經濟事象たるであらうと、云ふ事が、其れである。

さて今、社會的正義をもとめる心に照らして之を處理すべくんば、其は如何に爲されるべきであらうか。かのマルクス主義批判の精鋭ロバート・リイフマンすらも是認してゐるがやうに、この點國家の租稅政策に懇たふる事が、何れの視角より觀じて、王道的政策である、と私は確たく信ずる。こは、曾つて土地増價稅を強調したる自分にとりては、宿昔の直觀むしろ信念ですらもある。が、箇人的收益への努力が、交換流通を組織する最も高き、又た數千年の發展の裡に生成せる美はしき根本的原理である旨を揚言する、リイフマンよりして、之を聽くを欣ぶものであるから、故らに、その節を引用しおかうと思ふ。「……しかし現在の經濟秩序内部にありても、箇々の經濟主體が過度の收益努力を所得財産上

に實現せんとするに對しては、課稅權等によりて制限を加へ得る。かかる場合の第一は、景氣變動よりして最大の利潤を獲得し得べき、經濟生活における最も動搖的なる要素即ち商工業投機である。……「……概言すれば新しき組織秩序は、案出せられ製作せらるべきでなく、自から徐ろに發展し生成するものであらねばならぬ。が當分のところ、現存秩序攻撃の最大原因たる、餘りに著しき所得財産の差異を制限するには、課稅の手段を施行し得るのである。殊に收益不能者以外のものに對しては不勞所得の獲得を制限すべきであつて、その主要手段は鋭き累進率によるこの相續稅に外ならず、そして此の稅種こそ、恐らく、所得稅とならんで、將來の主要租稅たる事であらう。」(Liefmann, Allgemeine, S. 20)かやうにして、この種の見解は、今や凡そ、有らゆる社會思想家の支持し、少くも承認してゐる所にかかるのである。

しからば次いで、其の稅種には如何なるものが數へられるか。曰く、國稅體系における所得稅、相續稅、財産稅、殊に財産增加稅、營業收益稅、資本利子稅。また曰く、地方稅體系における特殊地稅、土地増價稅。そして右の何づれも謂はゆる直接稅の範圍に落つるもので、中んづく一國稅制の中堅たる所得稅および其の補充稅たる相續稅にいたりては、凡そ尖

鋭なる累進稅率を課せらるべきである。ただし、現存秩序の維持せられる限り、それにはおのづからなる限度の存在すべきは勿論であつて、箇人的には、その効果として私的収益努力が爲めに弱はめられるであらう箇所において其の限界が見出され、そして「國民經濟的には、資本形成行程が爲めに妨げられる點において其の制限は存すべきである。」(Liefmann, Geschichte, S. 181; Ders., Allgemeine, S. 66; Ders., Grundsetze, S. 800—803.)

蓋し是れ、敢へて言詮するまでもなく、社會主義的思想より得られたものでなく、夙とに強調されたるアドルフ・ワグナーの考察より示唆されたるものである。否な、綜じて時代の精神は斯く宣するのである。すなはち、全體に繋がる箇々人の關係をうかがひ、協同社會體の理義にめざめ、そして社會全體のイデアルをあふぐところの人々の、論理および情操のためらふところなく指標する歸趨は、眞に此れ以外なかるべしとおもふ。

(大正十五年七月末日。)

第三篇 唯物史觀の發展史一斑

- 一、經濟學徒の心眼に映れるマルクス主義の今昔
- 二、經濟思潮史の一対立思想としてのスミスかマルクスか
- 三、唯物唯心の何づれにも偏せざる物心一如史觀の把持者としてのスミス
- 四、佛蘭西革命、英佛産業革命、英國普選運動を反映する其の後の經濟學思想の變遷
- 五、佛蘭西唯物論、革命思想、チャアチスト運動を綜合せるものとしてのマルクス主義
- 六、今なほ有するマルクス主義の強よみの中心が其の經濟理論にも階級闘争説にもあらざる所以
- 七、しかして其の中心が辯證法的に展開せられたる唯物史觀にのみ存する所以
- 八、みぎの唯物史觀の重要考因としてのヘーゲル辯證法、並びにリカルドウの分配理論および階級利害對立論
- 九、革命的志向に推進せられたるうへは單なる視角轉換によりて成れる、リカルドウ階級對立説よりマルクス階級闘争説へ
- 一〇、階級的利益代辯學たりし爲めリカルドウ理論の陥れる同一陥穽が等しく階級的世界觀たるマルクス唯物史觀を待ちうくる運命たるべき所以

前世紀初じめ、スミスが産業革命的急潮に押し流されてリカルドウを生み、リカルドウがまた革命的精神の奔湍に流されて其の晩年におけるミルを産み、更らに同世紀中葉における社會條件批評的精神辯證法的唯物論而して前代社會主義的諸思想の裡ちよりは、世界を解釋せず理想主義的に之を改造せんとはせずして逆に超倫理的に世界其れ自體を變革せんとしたる、マルクス生まれインタアナショナル成りて、茲に世紀の半ばが過ぎたのである。かやうに看きたれば、有らゆる思想あらゆる思想家は、その時代の所産であり産兒であつたことが判知されるのである。

しかし、一つの思想が他の思想と刻し一主義が他主義と對立するところには必ず、より高き綜合すなはち一種の社會的理想主義とも呼び得らるべき思想的階段が、打開せられるを常とする。しかるに近く、斯かる理想主義的段階の展開せられると共に、勞働階級における明確なる經濟的地位および教養上の進化向上の實現せられるありて、爲めに、階級的對立意識の底流には縦ひ依然險惡なるものありとも有機的進化は常に無機的革命に

打ち勝ち來りて、この世紀の初五分の一もまた、マルクスの課題はそのまま高閣に束ねられてゐるのである。

然るにも拘らず、北歐の一大國はもとよりとし、其の他の國々にあつても、マルクス主義の聲望威容が、今ま正さに吾われの目をみはらしむるものある事は、之を無視すべくんば、餘りに顯著なるに過ぎるであらう。かくしてニコルソンが會つて二十年前、むしろ洞ろにも、社會主義的全理論が國民經濟學全體系の批判たるがやうに、我が國民經濟學は其の全精神全理論を傾けつくして、全社會主義的世界觀經濟理論又は現存經濟理論への同批判に對する、批判たらねばならぬ」と疾呼したことが、今や事實上、經濟學徒の一使命たるに到つた。すなはち、世紀はじめ其の駁撃の對象がドンキホーテの風車の如くに見えたに對して、今やマルクス主義は巨大なる蛟龍となり來つた。しかも其の中に就いて、マルクス經濟理論の一つ一つに關しては、すでに右傾するところありし修正派すらも、尙ほ全くは放棄せざるところの、マルクス主義における最根本問題、即ち辯證法的唯物史觀を檢討すべき十字軍には、吾われも加はらねばならぬやうに思ふ。しかし、今や經濟學が同時に社會政策學を前提せざるべからざるに至れる以上、吾人は經濟理論の内容その者の

研究の途上に須要せられる一外廓を先づ築くべき意味においてもまた、此の史觀の當否を考へねばならぬものあるやうに思ふ。かやうにして凡そ、リイフマンの近く強調せる、國民經濟學者は社會主義的原理を承認する社會主義者——社會政策理論家を指すものであらう——たるを得れども、斷じてマルクス主義者たるを得ないと云ふた理義を、多少なりとも承認する限りにおいて、此の難問を通過し検討せねばならないのである。

微力みづから揣らず、本文を草する所以もここにあるのであるが、しかるに、一の理論に對する消極的および積極的論考を施すに先きだちて、其れにかかはる思想史的考察を試みんとする自からの學的傾向に囚はれたるのみでなく、今たどらんとする論理が、スミスおよびカントと、マルクスおよびヘゲルとの對立のあひだを縫ひすすみ、以つて前者の立場において吾人の社會政策觀を見出さんと試みたるため、勢ひ、長く思想史的展望をほしいままにしをれる裡ちに豫定論程の半ばに達せずして、わが筆のすでに摧けをはれるを覺える。仍りて右にいへる後半は、他日の業に譲りおくものである。(大正十二年三月末日稿了。)(之を承けたるものが、次篇「マルクス唯物史觀の修訂と歸趨」である。)

二

おもふに經濟學研究における興味ある一主題たるものは、先人の遺こせる思想に讀み
 入りて思索を其の時代のなかに融かし、そして對立の鮮明なる二つの思潮を相ひ係はら
 しめるによりて、よし微かなりとも、其の間だに独自の批判を試みる仕事であらねばなら
 ない。かく刺する思想を其のおのの時代において把握し、之を吾人の有する世界觀
 および今の活ける時代の意識思潮と照合せしめて、その對立その矛盾のうちより、一の綜
 合を導きだす快適にひたり得るからである。マルクスの語を藉りれば、化石化する状態
 を舞踏せしめ而して其の固有の旋律を合唱せしめる」ところの辯證法的思考を自由に使
 驅し得るからである。

かかる思想研究の行き方を歩んでフルウヒトバアルな業績を知識の王國に貢獻せる
 もの、吾人これを、先天的に辯證法的傾向の鋭き獨逸學者において數多く見いだすのであ
 った。試みに吾人の心がかりを有てる領域にて例示してみようならば、オンケン、シュル
 ツ、ゲエヴァニッツ、ブレンゲ、フオルレンダ、ベルンシュタイン、カウツキイ等の諸論著を

擧げうる事である。

この理義と此の研究的精神との是認せられるため、姑らくヘゲルの權威を藉りるこ
 とであらう。「……しかし有らゆる哲學も論駁せられざりしものなし」と若し言ひ得べく
 んば、之と同時に、一の哲學とても辯駁せられしものなく、又た辯駁し得らるべきものに
 らず、とも主張せられねばならぬ。何故となれば、各哲學體系は、觀念の發展過程における
 特殊の一時期または一階段の表現として看らるべきものであるからである。かやうに
 して哲學史は、其の成果において、人間の錯覺謬想の展覽場ではなくして、實に寧ろ神體の
 奉安されてゐる靈殿に比較せらるべきものである。」(Hegel, Encyclopaedie der philosophischen
 Wissenschaften, 1. Bd., § 86, Zusatz 2.) しかり、十九世はじめ柏林大學を輝かしめたる巨星の、右の
 言葉は、實に哲學史について眞實なるのみでなく、實に經濟學その他の社會科學一斑にお
 ける思想史に關しても妥當するのである。例へば一經濟學派の倒れて他の學派體系の
 生まれた其の變遷こそは、殆んど悉く、社會生活の發展過程における史的變遷の一階段を
 反映表現したるものに外ならないごときが、是れである。

かやうにして現代に生動しつつある經濟理論そのものの研究とならべて、その思想史

を論考する所以も、ここに存在するので、例へばオンケンやヴェイルブランド、はたデイド、リストやランボオ等の經濟思潮史より讀みとらんとする中心が、大概ね、かの起伏し承繼し而して發展し來れる次ぎつぎの諸思想の間に横たはる「對立」の考察に、存在する理義もまた此所にあるのである。

三

かかる思想的對立の溝渠の益ます深く其の嶺の愈いよ高きにつれて、之が拔涉踏破の愉悅さ利益そして必要さは、ますます大いものがある。然るに此の意味において「誰と誰と」または「誰か、はた誰か」の形ちにおいて、當然その對立の研究せらるべくして而かも閑却せられてゐる、二つの大きな經濟學的思想があると、思ふ。すなはち是れ「スミスかマルクスか」てふ命題であらねばならぬと思ふ。いくらか回顧的に言ひ換へれば、一九二三年六月五日その誕生二百年の紀念せられるアダム・スミスと、五年前の五月五日その誕生百年の追憶せられたカール・ハインリツヒ・マルクスとの思想的對立の問題であらねばならず、更らには又た時代思潮の向背より察して言ひ改めれば、一見流されんとする潮勢と、之を

攻めんとする思想との敵對が、果して如何んの綜合を生むべきであるか、の問題たらねばならぬ。しかも此れへの近づき方が、例へば「マルキシズムの復活」におけるニコルソン教授のごとく唯だ獨斷的に「スミスは嘗だにマルクスよりも遙かに偉大なるのみならず、彼の教條は霹靂的革命に代ふるに社會的改良の連續的流下に對する廣潤なる水路を用意しておいた」と言ひ放てるやうではならぬ。(The Revival of Marxism. London, 1920. p. 7.) すなはち須らく、二思想家の社會哲學および經濟學における一切の對立よりして綜合に向うて、具さに批判せられねばならないのである。

周知せられる如く、スミスの社會哲學はた經濟學における全思想は、およそ一七五九年初刊、一七九〇年その生涯中における最終版第六版たる「道德的情操論」(The Theory of Moral Sentiments. London, 1759. その Bohn's Library series 版のものは容易く入手し得られる)及び一七七六年初刊、前書同斷第五版の「諸國民の富の性質及び原因に關する研究」(An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations. London, 1776, in two volumes. そのうち Canmar's edition が最良の版本)ついで近く其の遺稿本をキャナン教授の編輯したる、スミスの講義の臺本たりしところの Smith's Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms. London, 1896. 更には又「ブラッ

ク、ハットンの共編にかかる Smith's Essays on Philosophical Subjects, London, 1795. の四部作中に展開されてゐる。

けれども、人文三発見の一とたたへられたるケネイ著經濟表〔*Quesnay, Explication du Tableau Economique*, 1758.〕の傳を失はしめ、ひとりスミスをして思想史上の不朽なるものたらしめたと共に、輝かしく文化科學、經濟學の建設者たる榮冠を戴かしめたる所以のものは實に「國富論」の一卷に盛られた業績の故に外ならぬ。と同時に、彼れの眞面目を謬らしめたもの、換言すればクニイスのいでて其の誤謬を言ひ釋けるまで永く獨逸學界等において、後年の無批判的なる自由放任主義を絶叫せる一政商派マンチェスタア・シュウレと此のスミス教義とを混同せしめたる事や、又た經濟生活の發達および調和が、分業および自愛心——自己の生活狀態を改善せんとする各個人の自然的努力——のうちに、おのづから備はるものとし、さらに此の形而上學的前提において自己勞働の結晶としての私有財産の制を支持したるの故をもつて、今日なほ彼れを有産階級的經濟學の權輿なりと看做さしめたる事等も、まさしく此の著述ありての外ではない。(Kries, Politische Oekonomie, Kapital III, §3.)

果して然らばスミスは本當にゴブデン・ブライトらの運動を學的に基礎づけたのであるか、資本主義的經濟秩序における自由放任を眞に是認したのであるか、更らに利己心の衝動行爲を心よりして辯護せる有産階級的經濟學者たりしのであるか。悉く否な。一は、後年マンチェスタア政商一派が擅まに、スミスの高名然り獨のマルヴィツツをしてエナ戦の直前、彼れは今やナポレオンについて全歐羅巴における最も強大なる主權者なり」とよばしめ、またハアストをして其の教義はピットよりグラッドストオンにいたる政治家がひざまづいて其の權威を藉れる聖典たりしと讃仰せしめたる如きの、其の高き聲望を、潜用せるものであつて、スミス自からの與かり知らざるところなのである。(Hirst, Adam Smith, Chp. xi.) 二は、自然法の攝理と人生の慶福に信ぜる其の形而上學的樂天觀を支持すべく、前人未到の精到豊富なる史的考證を織りこめる彼れにおいても尙ほ、其の後の經濟條件における發展方向を豫斷し得なかつたに過ぎぬのであつて、之が證左として、彼れにおいては「富」あるひは資本財の觀念はあつたのであるが、然かし近世的資本すなはちゾムバルトの謂はゆる資本を資本として其の數量的増大のみを唯一職分とする近世的資本の概念の、全たく存在しなかつた事を擧げ得られる。(Sombart, Moderne Kapitalismus, Vol. I,

S. 196; Cunnun, *Early History of the Term Capital*, *Quart. Journ. of Econ.* May 1921 number.) 而して此の點について、オンケンはいより進みて、カント並びにスミスをば、ともに、後年の講壇社會主義と同じ見解を採れるものと論じたる程である。斯かる如きは寧ろ過ぎたる立言であらう。が、しかし其の思想論調を掬むとき、若しスミスをして前世紀後半に在らしめたならば、少くとも其の政治的見解の必ず、信念堅き社會政策學者アドルフ・ワグナーのに類したであらう事は、ほぼ想定しえられるところである。(cf. Small, *Ad. Smith and Modern Sociology*, Chicago, 1907. Chp. ii.)

終りに、スミスは明かに階級に超絶しをり、かつて一階級の利益の爲めに代辯せるところなかつた。即ち勞働をもつて價値の源泉にして且つ尺度たるものとなし、そして此の價値の生産及び分配の觀念をもつて、斯學に統一を興へんとなせるにとどまる。そして財産の尊重さるべき所以は其が勞働の結果たるに依り、また勞働の尊貴なるは其が人格の發露たるに依るとなせるのであつて、その成立過程をば全たく措いて問はざるところの、私有財産に對する全般的なる尊重に到りては、遍へに社會的安泰を念じたるベントム、降りてリカルドゥの鼓吹したる所にかかる。かくのごとくにして、縦ひ自然に従ふと

ころに福德かね到るべしと信じたるフイヂオクラアト的の素朴さは免かれざりしとはいへ、彼れが首尾一貫せる倫理および經濟の一致論者たり、進みて自然法的道德に順應するところのみに經濟生活の即ち榮ゆる旨を信じたる物心一如論者たりし事には、全たく疑ひがないのである。

次いで彼れを姑らくカントに結びて考へるなら、スミスの思想の未だ啓蒙哲學の其れより脱し切り得られざりしは明白であるが、之と同時に、かの知識は思惟が事物に應うて生ずるものでなく、寧ろ却りて事實が思惟に従うて成立するとして、謂はゆるコペルニクスの思考を認識論上に創唱したる、カントの其れに傾向せる事も疑ひがない。さらにカントの人格主義および人道主義の國際的政治論に現はれたるものとして、吾われがかの「恆久的平和論」を仰ほぐときは、(Kant, *Eternal Peace and other International Essays*, by Hastie, Boston, 1914. Chp. iv.) スミスが、戰爭を惡み植民地爭奪を排し殊に實業家階級に支配せられて國難を醸もす政治を呪へる論議、例へば其の商品の市場や顧客たるべき人民を確保し涵養せんとする唯一目的をもつて一大植民帝國を建設せんとするは、一見商賣人の國民に適應したる考案たる如しと雖も、實は全たく然うではなく、寧ろ商賣人階級の傀儡たる政府に

支配せられるの光榮ある國民のみに恰好なる愚策である」と道破せる如きの大局的なる立言ありし事をも顧み尊重すべきであらう。(Hist. op. cit. pp. 175-6) 彼れにおいては、一社會内の全民衆間におけるごとくに國際社會の全員間にも調和あるべく、又た倫理と經濟との間にも偕調あるべきであると云ふ、唯心論的樂天觀が充ち溢れてゐた。かくして「道徳的情操論」における唯心論者たるスミスは「國富論」において唯物論者に豹變せりとなし、之が根據をば、母國にての思索においてはハチエノンやヒユウムの影響下にありしに對し、後ち佛蘭西に往いて暫らくチュルゴウやヘルヴェチユウスやグラムベエル等と交友せる事實に求めんとしたる、スカルチンスキイの論態のごときは、全然この蘇國の思想家を誤解せるものであるのみでなく、文献史的に察しても (Smith's Lectures on Justice, etc. を指す) 其の誤謬を指摘し得られるのである。(Skrzyński, Adam Smith als Moralphilosoph und Schöpfer der Nationalökonomie. Berlin. 1886.) しかしてただしく解すればスミス「國富論」は其れのみにて獨立の經濟學を展開したるものと見るべからず、寧ろ其れに先行せる實踐哲學の著述を序論としての本論たり、あひ合して、汪洋たる經濟文化の歸趨を披瀝したるものと考へらるべきである。

はたして彼れは實在を直視するとともに、價值的な世界を想望したる倫理的經濟學體系を建立せるのであつた。おもふに經濟學が政治的なる形容詞を冠して其の名實を全うせんとする限り、すなはち、ケネイの夙に動物的經濟より政治的經濟への見解の變遷を示唆したりし如き(…… Uebertragung der Anschauung gsw.weise der „Economie animale“ auf die „Economie politique“ — Oncken, a. a. O. S. 388.) 使命を全うせんとする限りにおいて、そが縱し「二階級の擡頭福利を念とせず、却りて「全」民衆の經濟的厚生を目標として社會改造の業に躍進するとも、そは必ずや實在と價値との二元的倫理觀を背景たらしむるを要する。即ち言ひ換へれば、唯物的若くは唯心的の一元論の代りに、此の二者を内包含し克服したるところの、倫理的要求の背景を有つ事を須要されるのである。而してスミスの經濟學體系は、まさしく此の要望を充たせるもので、従うて其の社會的態度が輓近の社會政策の本質に一致するものあるは決して偶然でない。かへりみれば、ニコルソン教授は近く英國經濟學四季雜誌上の租税に關する一雄篇において、スミスを目して、自から燒滅するも常にその灰より復活し來りて永劫の命を生きるギリシヤ神話中なる不死鳥をもつてしたることであるが、わたくしもまた彼れの此の根本的思想の關係する限り、彼れを永遠

の人なりと云うて、些かも良心の疚しさを感じないものである。

四

しかりわたくし共が今、スミスを永遠に生くるフイニックスなりとする讃詞に同じたのは、それが社會政策家として常に經濟理論の背景に倫理的思索を布置したところの根本的思想にかかはりてであり、必ずしも「國富論」に現はれたる個々の思想に關説するものでは在り得ない。けだし後者については、その主著の公刊せられし頃より現はれ、更らに一七九〇年の其の死に前後して奔流もつとも急なるを示せる英國産業革命概ね一七六〇ないし一八二五年にわたりに完成したるが、スミスの美はしくも描ける自愛心——自由放任——同情心——愛他心——行爲の社會的承認——自然的調和といふごときの認識に基づける、朗らかにも明るき樂天的な經濟理論の一つ一つを、無慚に破壊したからである。つぎつぎの機械および新動力の發明と交通機關の進歩と新世界市場の開拓擴張。かやうなる農業國より工業國への推移否な慕進は、爲めに無數の社會問題を生み、その頂點には先づ、農業者殊に地主と、商工業者の對立を顯現せしめ來り、謂はゆる調和派經濟學

者は其の一つ一つの理論の支持については舉措を失うたる觀があるからである。

奔湍は飛沫を含み流れ、嵐と喘ぎは刻々に高か鳴りを加速度させた。しかし、偉大なる詩人ゲーテは、「過ぎゆける三千年の史實に通ぜざる人々の生活は日から日への蒙昧を生きるのみである」と教ふる。(West-Ostlicher Diwan.) もし、このシユモラアの引いたるゲーテの見解をとほし眺めるならば、この社會的對立または階級的對立と云ふ事實は、必ずしも産業革命の被造物でなく、思想としてはアリストテレス等の、そして詩としてはアリストフアネス等の説き且つ歌へるがごとく、ベルシヤ、パレスティナ、ギリシヤの昔よりしてすでに、嚴たる社會事象たりし事は明らかである。(Max Beer, Social Struggles in Antiquity. London 1922. は「この點一讀に値ひする好著である。')

ただ傳統慣習信仰威權その他もろもろの意識ありて此れを抑へゐたるに過ぎず、そして今ま大成せる此の産業革命てふ經濟的事實の壓力の餘りに強くして、爲めに社會意識社會形態の外殻を潰裂せむとしたるにとどまる。さうして其の後、階級意識ますます鮮明にして階級對立に進み、やがて其の階級鬭争に到達すべきを憂へ、更らに其の對立が専ら有産と無産との「have and have-nots」間にありてもつとも死物狂ひたるべきを洞

見せる思想家に、獨のシュタインのあり、また佛のギゾウのあつたることは、見逃されてはならない。實に逸早く對立の黎明を告げた、一七八九年の佛蘭西革命において、彼等は此の事實を見いだしたのである。ギゾウ曰ふ、今や新たな第三戰鬪者は舞臺に上り來つた。かくて民主的要素は分裂せるので、勞働階級は中産階級に對陣し、庶民階級は市民階級に對立して將さに砲火を交へんとする。のみならず、此の新たな鬪争は必死の戰ひである、何故とならば、新興階級は他階級の存立を全然認めざらんとしてゐるからである」と。(Guizot, De la démocratie en France, p. 107.) 更らにまざまざとシュタインは描く、「一八四八年の革命にあたりて、共和國協議會上、謂はゆる第三階級——市民階級は能ふ限り、階級意識に目ざめんとする無産階級——第四階級の利益權利を代表せざらむ事に努めた。が併し、革命の進行途上、第四階級は、ひたおしに佛蘭西政治的生活の檜舞臺に登場し來り、そして、その後ち決して再び其處よりして立ち去らなかつたのである」と。(Lauenz von Stein, Der Sozialismus und Communismus des heutigen Frankreichs, Leipzig 1842, S. 8.; Quoted by Simkhovitch, Marxism versus Socialism, pp. 176-7.) かくロオレンツ・フォン・シュタインのいふ如くに、たとひ無産階級が政治的舞臺を去らざりしとはいへ、然し其の勢力は爾後尙ほ久しく有産階級に

比較して微弱であつた。何故となら、その經濟的實力乏しく従うて鬪争意思を發現するに足りるところの鬪争力を有しなかつたからである。

さればこの點遙かに多く隱忍して力を養ひつつありし英國勞働者は、實際戰術上寧ろより巧妙なものであつた。けれども時は産業革命の完結とともに來た。而して其の形は普通選舉を強要するチャアチズム運動 Chartism とともに、又オオウエン派社會主義運動 Owenites とともに來たのである。しかも此のチャアチズム運動が、示威と請願と而して「勞働者」や「北光」の刊行物を通ほしての宣傳とをもつて略ぼ其の目的の一部を達し、其の掉尾の事業として暴力に訴へんとし、「實際的勢力を其の背後に有するにあらずんば、道德力は畢竟、道德的ハムバッグたるのみ」更らに「爲し得べくんば平和的に、が斯く爲さざるを得ざるべくんば暴力的に」してふ標語を實行に移さんとして、つひにオオコンナアの失脚となり、四八年、同團體の崩壊をみたのである。次いでオオコンナアの死後三年なる一八五八年に、無前の犠牲的博愛的主義者オオウエンもまた「予の生涯は斷じて無用でなかつた、予は多くの重大なる眞理を世界に寄與せるもので、それが顧みられざりし所以は一に世人の諒解洞察力の缺乏による。予は予の時代に先行してゐたのである。『I have been

ahead of my time.」の悲壯語を遺こし、此の信仰をもつて實際には失敗に充てるも併し文化史上ながく輝くところの倫理的な従うて二元的な社會改造の思想的殘骸を纒かに飾りて逝いたのである。(Beer, op. cit. Vol. II, p. 174.)

斯かる産業革命の急進時代すなはち一八四八年佛蘭西を震源地として西歐全土を震撼せる精神的革命時代にあたりて、およそ現存するものは合理的なり」とする、又たスミスの精神すなはち自然的調和を念とするところの、經濟學は、如何なる反動的貢獻を生みたるか。リカルドゥは必ずしも然かり得ず。すなはち、不易の經濟法則として其が高揚したるものは、實は實業階級の心理利益を、少くとも、經濟人の行爲の規範を示せるものとして、其の死後忽ちに背教者辯駁者の接踵殺到するに逢遭したのである。

ここにおいて、その父とベンザムとリカルドゥより生れたる如きジョン・スチュア・アト・ミルは、博大なる知識と嚴密なる論理を掲げて、リカルドゥを當代化し其の中心思想を永遠化せんとするとともに、叙上の革命的精神を緩和せんとする、十字軍の陣頭に現はれたのである。そして其の武器が、雄篇「經濟學原理」二八四八年——「しかり、同年は西歐革命的時代の一頂點を示す年であつた——であつたる事は更めて記すまでもないであらう。

自説を固たく織り込めるとともに、其れをもつてミルが完成したるところは、「……經濟人の宣傳者であつたるリカルドゥを抹殺して、冷靜なる眞理の探究者、嚴格にして利害の念に縛されざる科學者としてのリカルドゥを前面に押し出したることにある。是れ實に經濟學史上千古不朽の價値ある學説なりと批評せざるを得ない。」……が併したとひ其れが千古不朽の學説なりとも、其の萬古不滅の巨巖を容赦なく押し流さずしては已まざりしものこそ、時代と呼ぶところの、冷酷にして而かも激越なる大波浪であつた。そして、ミル自からも、今までに（一八四八年）なされた、もろもろの發明が、人間の勞苦を少しでも軽くしたか否かは疑問である。それらは國民の大多數には依然たる不潔な牢獄のやうな生活をおくらしめてゐるが、其の傍らには可なりに増加した工業家その他富裕な人々の巨産をなさしめてゐる。ただ其が、中産階級の物質的生活を向上せしめた事だけは明らかだ。」と嘆じたのであつた。そして是れ、とりも直さず、改善の須要されてゐるところの階級には、却りて物質的文明の慶福の及んでゐない事を告白したものに外ならない。(Mill, op. cit., p. 751. 上田博士「英國産業革命史論」六〇頁。因みに、思想史論には史論を先行せしむべしと見解のもとに、本節を附加してゐる私は、經濟史中、最重要なる時代相を對象として大局

より英國産業革命前後の世相人心を史論せられた上掲名著に接せるを歡ぶものだが、さらに、思想史上、最重要なる發展段階を對象とし明哲簡潔に論述せる良著として、その三年後の今、追記するを逸してならぬものに、小泉信三教授の近著「近世社會思想史大要を得た。」

然らば、ミルは斯かる經濟的寧ろ分配的利害の對立の將來を如何やうにみて、其の調和觀における安住地を立てたのであるか。少くとも其の「原理中にては、漸く緊張し來れる勞働および資本の關係が終ひに二形態のいづれかに依つて、自然的に解決せらるべきを豫想した。」——即ち利潤分配の制か、又は産業組合の發達かによつて。けれども、斯かる豫見は、實に科學的に根據なかりしのみならず、實際に當りては、全たく幻滅の悲みをなめざるを得なかつたのである。しかも反對に、爾來勞働組合の發達と併んで企業家同業者資本家協同の發達し來れるため、この勞働資本階級間紛争の解決は、生産分配よりして更らに社會生活一般および財政生活にわたる廣汎なる社會政策的施設、および勞働者側の團體的交渉權その他を規制する輿論並びに立法をもつてせられるに到つた。さうして此の狀勢を理論の上に反映し來れるものが、一八七二年社會政策學會成立の年以後の獨逸經濟學であり、また、隱然同傾向を辿れるものが、英國の經濟學なのである。しかしなが

ら今にして斯かる叙述をなす如きは、謂はば思惟行程における飛躍なのであつて、われわれは立ちもどり、もう一應、四八年代における革命的時代を顧みようとする。

五

時は正さに西歐革命思想の爛熟期であり、ヘゲルが就任講演中、あらゆる獨逸的精神文化と眞理との中心と讃仰せる其の伯林大學より流れいでたる唯心論ないしは觀念絶對論の勢望の薄らがんとした際である。と同時に、ギゾウやシュタインの階級調和論の風馬牛ときき流され而して英國チャアチズム運動の精神的影響の未だ滅せざるときであつた。否、この時すでに獨逸における自由思想家たり而して佛蘭西に往いて端的に經濟學に立脚するの革命的思想家たるに至れるマルクス並びに逸早く一八四四年において「英國勞働階級の狀態」(Condition of the Working Class in England, 1844)の一書を獨文および英文もて略ぼ同時に公刊し實際的根據に立ちて革命の當來を示唆したるエンゲルスは、共に手を携へて、四七年倫敦共產主義者大會に來り、有名なる「共產黨宣言」を起稿し以つてチャアチズム運動の全遺産を繼承せるのみでなく、其の思想を科學的體系化し革命的思

想化し且つ運動を國際化したる、其の前夕なのであつた。實に四八年佛蘭西革命においては、又た斯くも頑強なりし四〇年代英國急進普選運動においては、無産階級は眞の思想的指導者なくして妄動したのであるが、マルクスは此の缺陷を補つた。すなはち「レの言ふたやうに、彼れは觀念の缺乏よりして、無産階級運動を救へるとともに、無慚にも夢想的なりし、觀念よりして、前期社會主義を救つた。げに彼れは社會主義思想を無産階級の生活にふきこめると同時に、無産階級生活を眞の社會主義思想に導き入れた」(Taine's *Studies in Socialism*, p. 133.)のである。もう少し詳しく詳しうすれば、彼れは階級闘争を原動力とし、唯物史觀を武器とする獨特の革命的社會哲學と、勞働價值論、剩餘價值論を基礎とし、資本集中および複生産行詰り説を中堅とする社會主義的經濟理論と、しかして最後に周到にして敢爲細心にして膽大なる國際的勞働階級運動とを併らべ提げて、四〇年ないし八〇年代に亘たる國際的共產主義運動の中心を爲したのである。

そして其の運動の第一聲は、チャアチズム精神ないし運動の燒灰より復活したる、共產黨宣言において聞かれた。ギゾウにおける庶民 *people* は其處にては無産者 *Proletariat* となり、しかも社會革命の大使命を荷ふたのである。ギゾウやシュタインやマヂソン等

の爲した逡巡は其處には微塵も存するなく、有産階級と無産階級との對立闘争は陽の東に朝する如くに確實に、而してこの闘争が有産階級の没落に終はるべきは夕陽西に入る如くに争ふべからざるものとせられた。何故となれば、資本主義的經濟組織の爛熟期に到れば、其の内在的要素の展開に依りて、有産階級は支配階級として社會を維持する代りに、逆に社會の生産力の犠牲において扶養せられることとなり、従うて無産階級の生存そのものをすら確保し得ざるに到る。そして其の半面には、斯かる經濟秩序そのものの中に、具さに團結的訓練を加へ且つ絶對多數を擁する無産階級の敵對力に至りては、おのづから熾烈にして有力になるから、と宣示するのである。しかも不可避的大團圓へ向うての鐵のごとき必然性なるものは、マルクス著述中にて最も科學的なる「資本論」の序文中にてすらも、再三強調されてゐるのである。さらには斯かる社會革命——政治的革命および經濟革命を包括する——が、いつ成就せらるべきかについても、必ずしも遠からずとせられ、即ち或ひは一八四八年直後、或ひは米國內亂後一八六七ごろ、或ひは生産力上の革命を呼びおこす電動力の發明後、或ひは一八七一年巴里コムミュウンを境ひとして、と云ふ如くに「雲の柱」の立ち昇るべき豫言の行はれることの甚だ數しにして、革命はつ

ひに到來しなかつた。そして纔かにその到來したるや、マルクス死後三〇年、彼れが當年（例へば露土戰後革命來の必然を夙とに想望したりし一露西亞において、——が彼れの豫期せざりし時期方法において、——極めて歪められた形ちをとりて、實現せられたにとどまるのである。

されば、ベルンシュタインが近く伯林大音楽堂にて無前の大聴衆に向うて「全世界は今や社會主義に就いて高調力論する」と叫ぶも、其は革命的なる一主義を指すのでなく、又たハインドマンが装ひを新たにせる社會主義の經濟學に序して「マルクス死して約四〇年、しかも彼れの影響の偉ほいなる今日の如きは前代未聞のところである」と言ひつつも、尙ほ同時にボルシェヴィズムをマルキシズムにあらずとする。（Bernstein, Was ist Sozialismus? Berlin, 1922; Hyndman, Economics of Socialism, London, 1922.）いな從來最も正統的なマルキシストをもつて任じたるカウツキイにおいても、そのボルシェヴィズム觀にいたりては、この社會革命の心と形ちとを、ともに排撃して剩まさぬのである。

六

然らば次いで、其の社會主義的經濟理論——この科學的なる展開ありて、一の經濟秩序より他の經濟秩序への推移轉變が正さしく自然科學的正確さ必然さをもつて爲さるべしと做すにおいて、その創唱者名づくるに「科學的社會主義」[Wissenschaftlicher Sozialismus]を以つてせる全體系よりして、假りに唯物史觀といふ一世界觀を除けるもの——は、いま如何なる狀勢にあるかといふに、是れまた、四面楚歌の裡にあるのである。尤も、此の論點は、今の吾人の考察の範圍外に落ちるのみでなく、その難關たる勞働價值説や資本制生産の行き詰りや平均利潤率等に關しては、斯界の權威間に幾度かの有力なる論戰取りかはされ、爲めに本邦マルクス經濟理論の批判的文獻は、近時、英米佛等における論壇以上にすらも豐潤ならしめられた。のみならず、筆者もまた、一近作において、極めて現實的資料の上にたち、企業集中と財産集中または資本支配力集中との別を説き、企業資本のより、高き有機的構成が寧ろ勞働階級の福祉にすら一致すべき理由と其の條件とを敘し、また有無産階級對立關係の緊張が社會的立法ないしは社會的理想主義の發揚によりて如何に緩和せられつつあるかを論じた事である。よりて、此所にては右の問題には觸れざるべく、また觸れるとしても最少限度の引用ぐらゐにとどめおく事であらう。

思ふにハインドマンは「……約して言ふならば、マルクスはいま尙ほ理論に生きてゐる、……經濟的社會的事象の進行は凡そ彼れの豫言通り筋道を走つてゐる」と爲し以つて「社會主義の經濟理論」二卷を新たに世に問ふところあつた。が、そが若し文字通りに眞に純理論體系を意味してゐるものならば、それは彼れがデエヴォンス及びマーシャルの所説を喋々するに拘らず眞のマーシャル、殊にボエム、バヴェルクの諸論攻を閉却してゐる一證左であらねばならぬ。(Hyndman, op. cit., Preface and ch. xi.) けだし、其れがマルクス學說に對する正面よりの論駁として展開せられ、又た獨立に論究せられたる事の何づれともあれ、バヴェルクやゾムバルトやメンガアやマーシャル等の論攻せる、價值に關する限界效用説、心理學説ないし經濟的平衡説は、確かに勞働價值説の又た従うて餘剩價值説の廢棄を強ふる力を有てるものであるからである。ソオレルすら曰ふ、餘剩價值に關する朦朧たる數理的表現法式は、勢ひ人を曖昧に導くものであり、仍りて經濟科學の領域より全たく驅逐せられねばならぬ」(Vile Gide et Rist, Histoire des doctrines économiques, p. 557, n.) 而して是れら純理上の根本問題、其の他これより演繹せられたる諸學說における矛盾缺陷に對しては、曩きにはバヴェルク、デイイル、近くはボオレ、ライフマン等の包括的批評あり、

更らには其の膝もとよりすらもベルンシュタイン等の忌憚なき批判のいづるありて、爲めに、もはや故障なく、其の「理論は生きてゐる」と壯語し得ざるに到つてゐる。(Boehm von Bawerk, Zum Abschluss des Marx'schen Systems, 1896; Karl Diehl, Verlaufs von Wert und Preis bei Marx, 1898; Pöhl, Kapitalismus und Sozialismus, 3. A., 1921; Tiefmann, Geschichte und Kritik des Sozialismus, 1921; Bernstein, Die Voraussetzungen des Sozialismus, 1899. — 因みに、其のボオナア序文つきの英譯本すら絶版となり、右の第一書が、近時「バヴェルク全集第二卷」小論文集中に收められて再刊行され來つたのを注意すべきである。)

さうして價值論については、其は明かに誇張に失しては居るが、二十年前伊太利亞著名のサンヂカリストなるアアチュロ・ラブリオラの公けにしたる、左の綜括的評語をもつて、寧ろ肯綮に近きものがあると思はれる。「學術的研究發達の最近三十年(今日よりすれば五十年)こそは、經濟學の如き希望に燃ゆる若き一學問にとつて、閑却し得らるべき些末の數量ではない。……吾れらマルキシストが舊師の遺こせる古る衣裳の綻びを補綴するに没頭しをれる間に、正統派經濟學(もちろん廣ろき意味にて)は日々に發達の巨歩を運びつつあるのである。即ち試みにマルクス「資本論」を採りて其の章ごとくに之をマーシヤ

「經濟學原理」に比較しきたるが宜しい、然らば吾人は曾つて前者において無慮數百頁の割かれたる諸問題が、マーシャル教授においては僅々數行の簡潔さの中に解決せられてゐるのを見出す事であらう」と。(Socialiste, 1889, tome I, p. 674) またクロオチエは、利潤の社會學的研究に至りてはマルクスの暗示したるとき比較的考察を爲すの有益なるを認めつつも、經濟學的考察としては尙ほ主觀派經濟學の教理に服せざるを得ない旨を明言してをる。(B. Croce, Historical Materialism and the Economics of Karl Marx, Chp. IV.) 以つてマルクス主義者たちの如何に其の經濟理論の細目の彌縫の業に苦心しつゝあるかを窺ふに足りるであらう。茲において、修正派の名のもとにマルキシズム批判主義に立てるベルンシュタインの如きは、餘剩價值説に關して「同説の有する理論的強弱はた眞偽の如何やうにあれ、それは餘剩労働の嚴たる存在の認識に對しては何んらの妨げを爲すものでない。餘剩労働の存在は、通常人の耳目もてする日常觀察經驗のみにて十分實證し得られる經驗界の一大事實であつて、従うて何らの演繹的論證を須むないところである」と答へ、(Intern. Bibliothek Anft., S. 78.) 以つて其の論調を著しく引下げてゐる。ベ氏の思想について注意さるべきは、餘剩労働の必ずしも餘剩價值を意味せざる事、並びに此の餘剩價值が不

勞所得を意味する場合については事實上あらゆる近代文化國において徵稅權の發動および社會的輿論統制の下に漸次公共化せられんとしてゐる事に、外ならない。

かくて最後に階級意識を白熱化せしめつつ行はんとせる國際的運動の其の後の状態は、如何んを一瞥するであらう。そもそも無産階級の國際的運動が、マルクス、エンゲルス稿「共産黨宣言」および一八六四年倫敦における國際労働者同盟の創設の機會にて高調せられたるマルクス稿「創立宣言」において、たえざる刺戟と、かれざる源泉を見出してゐる事は、いふまでもない。が、兩者間の論調には著しき高低の較差の存在するを見逃しえない。例へば前者においては、「支配階級をして共産主義革命の前に戰慄せしめよ、無産階級は其の鐵鎖の外に失ふべき何物をも持たぬ。そして彼れらは獲得すべき全世界を有つてゐる。あらゆる國々の無産階級者團結せよ！」の壯語もて結び、而して資本主義的經濟秩序の成熟期、従うて其の否定の否定たる崩壊を促進すべくんば、區々たる労働條件の改善を目標とする運動の如きは却りて寧ろ妨げあり、とした。これに對して、後者にては、マルクス自から明かに「然かるが故に、十時間労働法は啻に重大なる實際的一成功たるにとどまらず、吾人の主義そのものの勝利である」 Und deshalb war die Zehnstundenbill nicht bloss

ein grosser praktischer Erfolg, sie war der Sieg eines Prinzips. (Inaugural-Adresse der Internationale Arbeiter-Association.) と言つて、交譲妥協せるの例證を發見するのである。のみならず、如何に有らゆる民族すなはち全人類の、共通に有する赤血をもつて、感情利害の結ばれざる象徴たらしめようとも、一箇の下に萬國の労働階級を踊らしむる事の全く不能である事實を、幾度びか體驗せしめられたのである。否な更らに、同一國內における労働階級にありても、米國にては A. F. I. 及び I. W. W. の組合員間には超え得ざる利害の衝突あり又た佛蘭西にては *syndicats jaunes* と *syndicats rouges* とは全たく階級意識を異にするありて、今更ながらにルロア・ポオリユウの會つて「今や吾人は第四階級 *quatrième Etat* を有するのみでなく、第五階級 *cinquième Etat* をも有するのである」と論じたる、其の眞理義を痛感せしめられるものがある。

妥協ないし緩和の點についてより、興味あるは、露國の新興第三國際労働者同盟に對峙し、第二國際労働者同盟（一八八九年創立の復活せられた倫敦協議會一九二〇年において、無産階級の意義が新たに定められ、謂はゆる筋骨労働者のみならず、獨立の手工業者、自作農、および此れまで有産階級に準ずるものとして排斥しむるたる自營するところの有らゆる知識階級 *Intelligentsia, intellectuals* を包括す、と爲せる事であらねばならぬ。(See Salter, *Karl Marx and Modern Socialism*, Ch.iii) 是れ蓋し社會的には有用と認めつつも尙ほ生産的にあらずとして、多數の勤勞者階級を新興階級よりして排斥しむる、固有のマルクス一教條の放棄に外ならない。が、かかる様ざまな補綴をもつてするも尙ほ、全社會を二大階級の對立たらしめようとする運動ないし政策は、理論上よりは成就すべくもなく、況んや之を高潮せしめて革命の激成成就の槓桿たらしむるときは、例へばロシヤおよび獨逸に見られたる如き、内在的な社會條件と外來的な壓迫刺戟との併存せざる限り、望むべくもないのである。

七

西歐産業革命の成れる四五十年代にありては、譬へば潮ひあがれる紅海を徒涉したモオゼの遠征を導き守れる神の十誡のごとかりし、マルクス主義經濟理論は、今や斯くして一つ一つ其の權威を失ひゆけるのであつた。而して其の理由は、一に其が非現實的となれるが爲め、すなはち時代が其を捨て去りしが爲めである。彼れが最も傾倒せりしヘエ

ゲルの語にいふ、理性的なるものは現實的であり、現實的なるものは理性的である。そして哲學の任務は現實に在る所のものを把握するにある。……各箇人は其の時代の兒であり、哲學もまた思惟において其の時代を把握したるものである。この故に何ん人も又た如何なる哲學的思索も其の時代を超越し得るものでない」と。(Hegel, Vorrede zur „Philosophie des Rechts.“) 然かり、合理的なるものは現實的であり、現實的なるものは合理的である。之を翻へせば即ち、非現實的なるものは不合理である筈である。かやうにして、すでに非現實的従うて不合理なるものとして斥けられた、マルクス經濟理論の一つ一つは、曾つて之を呼び起せるヘゲルの同じ語の意想によりて、今や公然否定され拒否されねばならぬ運命に立てるのであつた。次いで、運動もしくは戰術にいたりては、エンゲルス生前の知遇を得たるベルンシュタインはすでに、前世紀末を夙とに革命的急進の方策を抛つたのであるが、實はエンゲルス自からすら、其の晩年には、若し諸國民間の交戰條件にしてすでに變化したならば、社會階級間の鬭争方法もまた、おのづから變化せねばならぬ」ことを言ひ、そして佛伊兩國における共產黨員の徒らに舊式なる市街戰 *street* に安動するを戒飾したのであつた。まことにソウレルの妙みじくも説けるがやうに、總同盟罷業と

いふ神話よりの、デヨシユアの蓬萊郷入りは、永遠に實現し得られぬ神秘なのであつた。

然るにも拘らず、尙ほデヨシユアに従ふ約束の國への同志の今、かくも大衆を示す所以は、果して何の故であるか。曰く、經濟理論の一つ一つと全たく獨立せるものでないにしても、其は實にマルクス主義全體系の基礎をなすとともに、其の全體系全著述を貫ぬき流れるところの、人世觀歴史觀または世界觀の魅力の、尙ほ生きて人を動すものあるに因るのである。即ち、辯證法の論理力をもつて左顧右眄するところなく展開せられた唯物史觀の生命力に因るのである。少しく説けば、その好み用ひたる「斯かる精神的王國の聖杯よりこそ觀念の無限性の泡立つ」„Aus dem Kelche dieses Geisterreiches, schenunt ihm seine Unendlichkeit.“ (Hegel, *Schlussatz zur Phenomenologie des Geistes.*) の言外に、美しく秘められたる純唯心論的見地よりして「世に定在せるものなく、一切は生成従うて消滅の過程にある。かくて在るものは悉く否定の否定である」„Das Etwas ist die Negation der Negation“と觀じ、以つて觀念の進化を肯定、否定、否定の否定、即ち正—反—合の法式をもつて展開するものと説ける其の歴史觀をば、今や一八四〇年代に盛行したる自由思想批評的精神および唯物論に翻へし讀みて一の歴史觀を立て、この史觀をもつて、一方過去および現在の

事象を説き、他方將來における社會發展線の必然性を信念強く豫斷せんとせるところの、唯物的歴史觀が、恰もシナイ山より降り立てるモオゼのごとくに輝いて、大衆運動を牽引し行くに基因するのである。しかり、必然を約束する、此の史觀の力づよき呼びかけの存するありて、爲めに恰もロオレイ美女の唇より響きくる抵抗すべからざる蠱惑的韻律をなし、以つて大衆の針路を謬まり誘ふのである。

ゆゑに、此の歴史觀だに搖ぎなき限り、此の世界觀の上に築かれたる經濟理論體系の一つ一つの學説が、縦し反證せられ論駁せられようとも、マルクスは、社會哲學上のフイニツクスとして、民衆運動の眞上を自由自在に飛翔することであらう。かくて此の節に筆をおくにあたり、二先達の言葉をかりて、同史觀および論理法の重要さを傳へおきたいと思ふ。エンゲルスは曰ふ、此れとともに、社會主義は始めて今あらゆる其の細目と關係とが統一的に研究せられる一學問となつた」と。(Engels, Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft.) これを布衍してベルンシュタインは曰ふ、「マルキシズムの基礎に横たはる最も重大なる要素にして且つその理論全體系を貫通する根本法則たるものが、唯物史觀と名づけられる、彼れ一流の歴史哲學であることは、何人も争はぬところであらう。げに

主義においては、マルクス理論は、唯物史觀とともに建ち、唯物史觀とともに倒れる。かくて、其が制限を蒙むる場合には、其の制約せられたる限度に従うて、同理論における他の諸要素は、おのづから相互に其の結論を異にし來ることであらう。だから、此の理論の妥當性いかに關する有らゆる檢索は、先づ其の前提として、此の歴史法則の眞否もしくはその眞理の限界は如何んといふ問題から出發せねばならぬ」と。(Bernstein, Die Voraussetzungen des Sozialismus u. die Aufgaben der Sozialdemokratie, Ss. 32-3.)

おもふに社會發展の理法において、個人主義的經濟秩序が、其の内在的要因によりて、おのづから自己の否定を生み、否定の否定たる社會主義的經濟秩序それに代りて生成するてふ、鐵のごとき不可避性または必然性 Unvermeidlichkeit oder Notwendigkeit が、その提唱者固有するところの革命的志向より強調せられるべき爲め、ヘーゲル辯證法的論理が、同史觀の研究方法において縦横に利用せられたであらうことは、容易く逆睹しえられねばならなかつた。それ歴史觀が、古代の觀念論的稗史英雄史より中世の王朝史へ、次いで民衆史文化史へ、進みて經濟史へと、其の重點を移してきたる事實は、初近世アダム・スミス、デヨンソン、マコーレイ、カーライル、グリーンより降りては、牛津のローチャアス、劍橋のカン

ニンガム、バアミンガムのアツシュレイにいたる、次ぎ次ぎの史家の著作を進むにつれて漸くより、色濃くなれるのが、心讀し得られるところであつて、敢へて奇異とせらるべきでない。此の故をもちつて、マルクス、エンゲルスの歴史の物質的見解を、他の史家の其れより峻別し特徴づけたるものは、單とり人間歴史發展の全過程を純粹に唯物論的に解釋し且つ其の將來の發展方向を明確に豫斷せるのみでなく、實に辯證法的論理の呪文を高唱し専ら之によりて社會革命の根本的思想を呼び下ろしたる點に存在する。即ちマルクス自からの語を藉らば、この論理を「從來おほくの哲學者たちは世界を種々に解釋したが、吾人の解くべき問題は正さに世界そのものを變革するにある。」(„Die Philosophen haben die Welt uns verschieden interpretiert, es kommt aber darauf an, sie zu verändern.“ — Marx, These zu Feuerbach.) といふ使命の、強大なる道具たらしめたる點に存在するのである。

八

いま吾人が取扱はんとするものは、右に引續ぎて、謂はゆる「世界そのものの變革」の呪文たる唯物史觀の文獻史的考察を行ひ、併せて其の批判を試みんとするにある。而して

殊さらに文獻史的考證を批判に先行せしむる所以は、有らゆる學說の興亡盛衰と變化流轉とが其の時代相を思想的に把握せるものの表現であり、従うて各時代の社會條件および意識の發展を象徴する此の思潮流轉の眞源泉を掘みて、批評の階段始めて昇るべしと信ぜられるからである。すなはち、ヘゲルの謂はゆる「各箇人は其の時代の所産であり、何ん人も其の時代を超越すること能はざる」ことを信ずるからである。この用意ありて始めて「總てを解するによりて總てを許す」の境涯に立ち、更らに批判を立し得べしと思ふ。しかも、經濟理論の内容の考察が今この論攻の範圍外であるにも拘らず、引きつづく二節は特にマルクス理論に對するリカルドウの影響の簡叙にさかれねばならない。何故とすれば、リカルドウの學說こそは、最も適切なる有産階級的經濟學批判の資料並びに其の理論構成上の暗示をマルクスに與へたのみではなく、その社會經濟論攻の基調には階級對立の思想漂ひ又た辯證法の論理閃めき、更らには其の行論の抽象的概括的演繹的なる點すらもマルクスの認識を啓發せしところ尠くないからである。言葉を換へれば、伊太利のアントニオラブリオラが「マルクス資本論は、共產主義的批評經濟學の序論である代りに、正しく唯だ有産階級的經濟學の結論であり其の掉尾の大著述である」(In Conception

Materialiste, p. 91.) と評せるは、無條件には正だしくない。けれども然し、ソウレルが「マルキシズムは前代空想的社會主義よりも遙かに多くマンチエスタア學派と呼ばれる思想に類似しをり、而して其は忘れられてならない一重要點だ」(Gorel, La décomposition du marxisme, p. 41.) と言うてゐるのは、より深く眞實に觸れてゐる、と思はれるからである。

そして右の場合、有産階級の經濟學はたマンチエスタア學派と呼ばれた一團の思想體系の頂點に立てるものが、リカルドウの其れに外ならない事は、言ふを俟たぬ。彼れは明かに空想的社會主義の如く「倫理人」や「理想郷」を描かずして、彼れの時代人より、正だしく言へば當年の倫敦市民を象徴したる「經濟人」 homo aeconomicus と其の現實の經濟生活とを考察し、従うて階級意識の發達を直視して恐らく其の時代の要求なりと觀ぜられたる「一階級」の利益を忌憚なく代辯したのである。しばらく當年の世相を粗描しおこならば、佛蘭西よりも其處にありては産業革命 une révolution commerciale et industrielle は凡そ一八一五乃至三〇年代に成就した、とピッカアルは言うてゐる。Vile Bezanon, The Early Use of the Term Industrial Revolution, Quart. Jour. of Econ., February 1922 number, p. 345.) 遙かに早く到來せる英國産業革命の高潮は、——奈翁戰の影響も其の責めの一部を負ふべきであつたが、——其處に避け

難き二種の社會的對立を出現せしめたので、一は賃銀労働者と資本家との、他は商工業者と大地主貴族との其れであつた。さらに此れが現れとしては前者よりは賃銀闘争 ("A fair wage for a fair day's work!")、後者よりは政治的支配權をも目標とせる ("One vote for each! Peaceably if we may—forcibly if we must!") 自由および保護貿易の論争が生れたのである。斯かる經濟生活の變革に出會うては、スミスの曾つて信じたる、世界は獨りで運行する ["Le monde va de se!"] を中心思想とする、自然主義的調和經濟論は最早や通用することなく、寧ろ假面を脱ぎすてて時代の要望なりと少くとも自からには信ぜられたる側に、有力なる一票を投ずるべき闘争的理論家の出現を要求せざるを得ない。

しかして斯かる産業革命の生める、そして階級的代辯者たるべき運命を荷うて現はれたる經濟學的著述家が、外ならぬデヴィッドリカルドウその人であつた。彼れ元と猶太系の人として市井の間に生まれ、若うして産を積めるのであるが、一七九九年たまたまバスマ溫泉地に閑を得てスミス「國富論」を繕きてより經濟學研究に志し、一八〇九年銀行券低價の證左としての金地金の騰貴なる處女作によりて一躍、名を時論界に得たりしより、一八二三年その死に至るまで、殊に其の五十一年の短き生涯を考ふるとき、著作する所甚だ

多ほかつた。そして、一八四六年マカロツク之を輯して「リカルドウ全集」(The Works of David Ricardo, ed. by McCulloch. London, 1846.)と爲して居る。しかも此所に關係を有するものは、其の主著「經濟學租稅原理」(Principles of Political Economy and Taxation. London, 1817.) (この最終、第三版に據れる Gonnor's Edition が、今日最良の版本であらう)に限りられるのであるが、中んづく、吾人の當面に關係する部分は、其の第一、二、四、五章および第十二、二十四章中に展開せられてゐる。しかしてリカルドウの主使命となせるところは、各階級間への價値の分配に關する原則の闡明であり、自からも、この分配を支配する法則を決定することこそ經濟學における最重要な問題である」と宣明した。その高門弟マカロツクは、此の旨を、「スミスが富の生産に深き研究を施せるに對して、リカルドウは今や其の價値および分配の問題を思索の中心對象としたのである」と解明してゐるが、ここに看逃がし得ざる一事は、リカルドウにおいては、此の問題の研究が階級對立の存在を凝視しつつ試みられたる點である。いま、上掲各章の讀餘の感じに、更らにマックス・ヴェアの敘述を點綴して、(Max Beer, Karl Marx, sein Leben und seine Lehre, 3. Aufl. V. 1.) 左に、その主要點の梗概を約記することであらう。

生産の目的に費されたる勞働量が價値の基礎であるとともに、其の生産に要せられたる比較的勞働量が、其の商品の交換率を決定する。價値とは、取りも直さず、自然價格を指すのであり、従うて其れは需給その他の一時的條件原因の變化につれて定まるところの市場價格に一致せぬけれども、後者は必ず前者を中心として動き、又た常に之に歸趨するものである。……社會は地主と資本家企業家と勞働者との三階級より成り、従うて生産において生ずる富の分配が、是れら三階級に、其れ其れ地代と利潤と賃銀との形をもつて行はれる。ところで、經濟社會最重要の要素は資本すなはち蓄積せられたる勞働であつて、其れは常に生産の原動力であるのみでなく、資本および勞働の兩階級の支柱である。そもそも富は無限に増殖せしめ得られるけれども、而かも之に體得せられた勞働量が減すれば、價値においては減少する。そして文明の進歩に伴れて、おのづから交通の發達機械の發明、分業協業などの組織の改善が行はれるが故に、ここに前記に使用せられ體現せられた勞働量は、又、おのづから減少し來り、爲めに通常の状態においても工場商品の價値は低落する。之と同様に、賃銀もまた、價格の法則によりて決定せられるもので、勞働者は彼れの費やしたる勞働量を償ふに足るところの生存資料をば賃銀として受取るのであ

る。で資本の増殖および人口の増加の結果として、穀物の價格は騰貴すべきが故に、其れに連れて賃銀また騰貴の傾向を有する。然るに賃銀と利潤とは商品價値の最重要なる成素たるが故に、賃銀が騰貴すれば、其れだけ利潤は低落せねばならない。けれども顧みれば、賃銀の騰貴と利潤の下落との原因は實は土地の固有する關係すなはち耕作地面には獨り制限あるのみでなく、其の品質にも差異がある、と云ふ冷かなる自然的事實に横たはる。資本労働機會および人口が増加すれば、舊耕作地面よりの生産物だけにては克く人口を支え得ざるが故に、耕作は能ふ限り擴張せられる。然し、其の耕作地面の擴張は、おのづから次ぎ次ぎにより、劣等地へより、劣等地へと爲されるものなるが故に、此れが耕作は、勢ひより、困難であり又たより、大なる労働量を須要する。然るに使用せられたる労働量は價値を決定するが故に、其の生産物の價値は、絨上の價値法則に従うて絶對的に騰貴せねばならぬ。これとともに、其の同じ農産物と交換せらるべき工場商品にいたりては、將來益ますより、少なき労働量を體現するによりて、其の價値愈いよ低下すべきが故に、みぎの農作物の價値は、更らに相對的にも騰貴せねばならぬ。斯かる穀價の騰貴に連れて、地代も騰貴するのであるから、實に地主階級は、耕作はた生産の困難といふ事實によりて、

二重の利益すなはち、より、大なる分け前と穀價の騰貴といふ、兩面的な不勞利益を享受するのである。ここにおいて、文明上進の總勘定を窺はうならば、穀價と賃銀との騰貴するに反し、工場商品の市價は停滯するか下落するか、の如くに見える。然るに更らに仔細に吟味するならば、製造家は絶えず利潤の低落に脅され、労働者は其の實質賃銀の低減を嘗めるとともに、彼れらの失ふところは、全部悉く、地主階級の懐に這入つて了ふのである。

斯く論じて卷末に近づくにつれ、社會進化の理法をば明確に辯證法的に展開し來つてゐる。即ち曰ふ、ミスは貨幣低價と穀價騰貴との區別をなさざりしが故に、地主の利益が他の社會全體の福利と背反せざる旨を推論したのであるが、其は謬つてゐる。文明の初期にありては、其の慶福は暫らく労働者資本家地主及び一般消費者の均霑するところたりしも、更らに文明の進歩と人口の増加に伴うて、其れより生ずる一切の利益は専ら土地所有者に移り行き、遂に地主階級と其の他の全社會階級とは確然たる利害の敵對に立つ。すなはち高き地代と低き利潤と高き生活費とのゆゑをもつて、地主以外の有らゆる階級は穀價不斷の騰貴の犠牲となるに到たる。思ふに外國貿易にありては取引當事

者は共に、利益を受くるものであるが、一般社會と地主階級との取引に當りては後者の利益は常に明確に社會の絶對多數なる前者の犠牲に、おいて、營まれると。——しかしてリカルドウは、かかる如きが箇々の地主の自由意志によるものでなく、一方において土地の私有として他方において耕地の質量上の制限と人口の自然的増加と云ふ社會的經濟的および自然的事實に原因するものであり、ただ其の必然的結果としておのづから他の社會階級全部の利益を搾取することになるのだと、決論したのである。ただし、之が對策として、其の提示し來れる想迹をみれば、案外にも、その理論的立場の敵對に反して、スミスのよりして異なるところ大いならず、即ち對植民地自由貿易殊には穀物輸入稅撤廢を強調せるところとどまれるのであつた。かやうにして、その先蹤よりして別たれるところは理論上の階級對立を認識せるところとどまり、一度び政策觀に轉ずればリカルドウは果して全く英國流の自由主義者なのであつた。牢として抜くべからざるリベラリストなのであつた。が斯かる歸結は、リ氏の思想環境より觀ては案外でなくして、果然なのである。

九

かやうにして、リカルドウ學説はその今日より回顧せられるとき、誤謬必ずしも尠なからずといへ、それが如何に大なる光明を當年の市民派的經濟論策界に投じたるか、容易く窺知し得られるであらう。即ち労働者の受くるべき賃銀は理論上その生存線を保障するに止まるべしとして後日ラツサアルの大きく援用したる賃銀鐵則の法式を描き、地代は國富増進の結果であつて斷じて其の原因でないとして後ち其の名を冠されたる地代説を提唱し、以つて工業資本家階級および労働者階級と地主階級との利害對立を高調して當時の要求の最大の一つと看做されたる大地主貴族への鬭争に對して、有力なる理論的基礎を與へたものであるからである。

けれども、斯かる階級的經濟理論が、工礦業界に労働争議の頻發してチャアチズム運動の燎原の火と燃え熾らんとする前夕にあたり、工業労働者の味方なりし思想家達に對して、其の論理を逆まにして直ちにより、痛烈に工業資本家階級に挑戰すべき武器を與へたる形を爲せる經紀に就いては、リカルドウ自から、之を知らずして逝いたのである。それは殆んど同時代にあたり、國家主義者にして唯心論的辯證法論理家の雄なるヘゲルの得意の絶頂において時疫にたふれるや、其の門下なるヘゲル左黨が、その同じき論理

を使驅しつつ革命的唯物論を展開して以つてハインリッヒ・ハイネの傳へたがやうな、ヘゲル臨終の精神的苦悶を具現化せるに、如何に酷似してゐた事であらう。(Tide Croce, Historical Materialism, p. 130 n.; Beer, n. n. O., xxxii.)

しかしてまた是れ、ゴンナアが肩いからせて、「近世社會主義者が其の教條をリカルドウ學說上に築けるは、彼れらが全たく同學說を曲解謬想したる爲めに外ならぬ」と言へる、主張が縦ひ眞實なりとも(Gonner's Introductory Essay to the Principles.) 其は事實上、リカルドウ學說が、一八二〇ないし四〇年代の英國における反資本主義的諸文獻(リカルドウ原論公刊の三年後はやく敢然として社會主義者の名乗りを擧げたるオオウエンの古きにまでは遡らずとも、ジョン・フランシス・ブレエ、ウイリアム・トムソン、ピアアシイ・レヴンストオン、トオマス・ホツヂスキンの多數社會主義的文書を生み、更らにプルウドン、ラツサアル、ロオドベルツス等に深き影響を與へ、しかして窮極するところ、マルクスの博大なる知識と論理の王國に入りこみて餘剩價值搾取論等を示唆する所ありし事を、寸毫も覆へすものでない。

そして又、此の消息は、近時、マックス・ペエアが下のごとく簡潔に説き去つてゐる。……「ここにては視角の轉換以上の何物をも必要としなかつた。すなはち、リカルドウは凡べ

てを動産的資本家の立場から眺めたに對して、社會主義者は一切を労働者の立場から見ただのだ。見よ。リカルドウは曰ふ、資本こそ一切であつて、地主は無である。にも拘らず、後者は交換價値に對する獅子の分け前を貪つてゐると。之に對應して社會主義者達は曰ふ、労働者が一切であつて、資本家も地主も無である。にも拘らず、前者が辛うじて労働的家畜として看られ而して生存最低限界に呻吟してゐる間に、後者は創造せられ蓄積せられたる全労働成果を搾り取つてしまふと」(Beer, n. n. O., pp. 101-101.)

一言でもつて此れを掩ふ。——それは、リカルドウが産業革命時代の空氣の中で、無意識に築きあげたる動産および不動産所有の兩階級間の對立矛盾をば、マルクスは次ぎの精神的自由批判の時代また社會的革命的時代の熔爐の中に投げこみ、そして意識的に、無産階級および有産階級間の對立意識と鬭争意思にまで、發展せしめ焦熱せしめたものに外ならないのである。

一〇

リカルドウよりマルクスに到たる文獻的詮索のみにて、此の文を終はらしめるは若干